

太田五郎
新田次郎
功太郎ノ戰

江田兵衛
尉青根三郎

官兵被討取者、彼是有數^多、^{中略}註其交名送武州、^{中略}

六月十四日宇治合戰討敵人々(以下百二十七人ノ名列ノ中ニ)太田五郎一人、手打

十五日已後於京都記之(以下十六人ノ名列ノ中ニ)仁田次郎太郎五人、内一人生取、^{宮内省刑部丞}

六月十三日十四日宇治橋合戰手負人々中略

十四日(以下九十七人ノ名列ノ中ニ)寺尾又太郎中略

已上九十四人七カ

并百三十二人(以下九人ノ名列ノ中ニ)江田兵衛尉 江田五郎太郎 青根三郎

六月十四日宇治橋合戰間越河懸時御方人々死日記(以下八十九人ノ名列ノ中ニ)太田六郎 寺

尾於橋上被討左衛門尉

^註 仁田次郎太郎トハ新田次郎義季(次項參照)ノ子賴有ナルベシ。尊卑分脈參照。

是歲 新田次郎義季(世良田德川)、上野世良田ニ長樂寺ヲ建立シ、榮朝ヲ請ジ

テ開山トス。

〔禪刹住持籍〕上野州世良田山長樂寺歴代 開山第一祖榮朝和尚、號釋圓、扁明菴西承久三年辛巳、

歲五十七、開長樂禪苑、住二十七年、

承久三年

〔長樂寺文書〕(前後略全文ハ觀應三年三月十一日條ニ收ム)同庄内女塚 開檀那 新田次郎義寛元四十二季法名榮勇

〔長樂寺出土古瓦銘〕(瓦字)長樂〇(寺久光)

貞應二年癸未 二八八三
是歲 聖一國師辨圓及神子榮尊、上野長樂寺ナル榮朝ノ門ニ入ル。明年、辨圓、久能ニ歸ル。

〔肥前國勅賜水上山興聖萬壽禪寺開山勅特賜神子禪師榮尊大和尚年譜〕
師諱口光、字榮尊、以字行于世、族姓平氏、判官康賴子也、(中略)

榮西ノ弟子ナリ
榮朝ノ教

貞應二年癸未、師歲二十九、聞野州長樂寺榮朝傳明菴千光之法、教外別傳之道、以是爲指南、與辨圓聖一相共詣長樂、問曰、生死事大、無常迅速、如何體究去、朝曰、十二時中莫妄想、師漸有省、居十年、足不出門限、

〔水上山萬壽開山神子禪師行實〕(字性)依神之告、束袍發足、巡禮靈場、訪求知識、即有人語曰、上野州長樂寺、有律師榮澄者、千光之門人也、法門義虎、汝行可參之、師到彼受業、適會中有僧圓爾、勸師令參詣師、則參澄師、問曰、生死事大、無常迅速、如何躰究去、澄答曰、二六時中、都無別事、莫汝相誤、師至此、初有省師、下室語爾、爾爲悅之、居未幾許、澄則示寂矣、師哀慟送葬、終發憤委思、欲參於知識、又復還關西、(下文ハ嘉祿元年四月條ニ收ム)

建仁西公ノ上足ナリ

〔元亨釋書〕 第七 淨禪二釋辯圓、字圓爾、以字行、姓平氏、駿州藁科人、母稅氏、(中略)建仁二年十月十五日、日出時生、(中略)十八薙髮於園城寺、登東大寺戒壇、又入洛都、潛聽外學、一日猛省曰、我居講肆、雖研究大小權實、徒筭沙而已、乃出三井、往野州長樂寺、從榮朝、問別傳之道、朝者建仁西公之上足也、初西得敵虛室禪門大戒之圖、爾就而受之、兼瑜伽三部之灌頂、經年而歸久能山、

〔聖一國師年譜〕(貞應二年癸未、師二十二歲、歸園城寺、一日自思、以爲我比年學大)

三部ノ密法ヲ傳持ス

小乘、究權實教、但增知解而已、於生死大事、何益之有、吾聞野州長樂寺、有榮朝者、(上野)非當傳持三部密法、而亦受禪戒、聽教外別傳之道、知識匪遙、何滯此邪、乃出園城、赴野州、就朝扣其所、

禪戒ヲ受ク

元仁元年甲申、師(聖一)二十三歲、(長樂寺)歸久能山、(中略)
(嘉祿)二年丙戌、師(聖一)二十五歲、遊相州寓壽福藏經院、住持行勇、(莊嚴)與長樂寺榮朝、法門伯仲也、見師管待甚厚、

貞應三年、元仁元年甲申(十一月二日改)二八八四

正月二十九日 新田尼(義兼ノ後家)、其ノ孫岩松時兼ニ上野新田庄内岩松郷竝

貞應三年、元仁元年

ニ武藏春原庄内万吉郷ヲ讓ル。

〔正本文書〕

ゆつりわたす上野國新田御庄内やしき岩松郷并春原庄内万吉郷(萬吉カ)間事、

源時兼

右件りやうかうゆつりわたす事しち也、たゞし子々孫々にいたるまでまたくたのさまたけあるへからす、仍ゆつりわたす事(留字カ)こと如件、

貞應三年正月廿九日

にたのあま花押(1)

〔註〕 建保三年三月二十二日、嘉祿二年九月十五日條參照。

元仁二年、嘉祿元年乙酉(四月二日改) (二八八五)

十二月二十日 將軍若公移徙ノ儀。里見義繼、供奉人中ニアリ。

〔吾妻鏡〕 廿日、丙午、快霽、今日若君有御移徙之儀、申一點御出(中略)御出儀、先諸大

夫(以下十二人名列)伊賀藏人

〔註〕 尊卑分脈ニヨレバ伊賀藏人ハ里見義成ノ子義繼ナリ。

嘉祿二年丙戌 (二八八六)

九月十五日 岩松時兼、祖母新田尼ノ讓ニ任セテ、岩松郷ノ地頭職ニ補

任セラル。

〔正本文書〕

(源時兼)
(花押)

下 上野國新田庄内岩松郷、

補任地頭職事、

源時兼

右人任祖母尼貞應三年改元元仁正月廿九日讓、補任彼職之狀所仰如件、以下、

嘉祿二年九月十五日

〔註〕 貞應三年正月二十九日條參照。

嘉祿三年、安貞元年丁亥(十二月十日改) (二八八七)

十二月是月 相馬能胤、女子土用(岩松時兼ノ妻ナルベシ)ニ陸奥加比草、野萱、下總相馬

御厨内手賀、布施、藤意、野毛崎等ノ地ヲ讓ル。

〔正本文書〕

ゆつりたてまつるとよこせんのそちの事、

嘉祿三年、安貞元年

行方郡内千倉庄加比草野定御くりやのうちにてかふせふちこゝろのけさ
き、

以上五か所也。

右ところのとよこせんのりやうとして、ねうはうのさたゝるへきことしちなり
ちやくしちやくなんといふさまたけおいたすことあらんにおきていかなる
けんもんニもよせて、ねうはうのさたゝるへし、よつてこにちのさたのためゆつ
りしやうおたてまつる事如件、

嘉祿三年十二月 日

平能胤

(註) 貞永元年十一月十三日條參照。

安貞二年戊子 (二八八八)

七月二十三日 將軍賴經、三浦義村ノ山莊ニ遊ブ。里見義繼、扈從者ノ
中ニアリ。

(吾妻鏡) 廿三日、甲午、陰、將軍家渡御駿河前司義村田村山莊(中略)

先隨兵十二騎(中略)御後野筒、越後守 駿河守 陸奥五郎 大炊助 相模五郎助

教 周防前司(中略)伊賀藏人(以下略)

寛喜二年庚寅 (二八九〇)

是冬 辨圓、壽福寺ヨリ長樂寺ニ歸リ、榮朝ニ孝事ス。

(聖一國師年譜) 師(國師)二十九歲、在壽福披閱藏經已訖、冬歸長樂寺孝事榮朝、

是歲 大明國師無關普門、長樂寺榮朝ヨリ菩薩戒ヲ受ク。

(大日本國皇城東五山之上瑞龍山大平興國南禪々寺開山第一世祖佛心

禪師大明國師無關大和尚塔銘)十九歲(寛喜二年)往禮長樂寺釋圓、受菩薩戒、游及於

顯密之兩教、則關東越北之講席、无嬰其鋒者矣、俄聞東福聖一國師旺化於京、特往參扣、

寛喜四年、貞永元年壬辰(四月三日改) (二八九二)

十一月十三日 幕府、相馬能胤ノ嘉祿三年ノ讓狀ニ任セ、其ノ女土用ノ
領知ヲ公認ス。

(正本文書)

將軍家政所下 平氏子字土用、

可令早領知陸奥國行方郡内千倉庄加比草野登、并下總國相馬御厨手加布勢、藤意、

野介崎地頭事、

右人任父能胤嘉祿三年十二月日讓狀、可領知之狀、所仰如件以下、

寛喜四年、貞永元年

貞永元年十一月十三日

案主左近將監菅野
知家事内舍人清原

令左衛門少尉藤原

別當相模守平朝臣

武藏守平朝臣

貞永二年天福元年癸巳(四月十日改) 二八九三

是歲 辨圓竝ニ榮尊、渡宋ヲ志シテ長樂寺榮朝ノ門ヲ辭ス。

〔聖一國師年譜〕 師(聖一)三十二歲、一日侍長樂和尚次、啓曰、某甲猥承慈接、親聞顯

密二宗、不爲無得、是故已登傳燈大阿闍梨位、然教外宗旨未領厥旨、此夙緣稍差爾、願

欲往宋、訪尋知識、伏乞慈悲、俯賜允許、乃泣下數行、長樂愍其誠懇、擇日餞別、師復歸故

鄉

〔榮尊和尚年譜〕 師歲三十九、與辨圓相共辭長樂、定渡宋傳法之志、既還關西、取途

于勢州、詣大神宮、

天福二年文曆元年甲午(十一月五日改) 二八九四

十一月二十八日 里見義成卒ス。

親朝ノ寵
士ナリ

〔吾妻鏡〕 廿八日、前伊賀守從五位下源朝臣義成卒、七十八、是暮下將軍家寵士也、

親疎莫不惜之、

文曆二年嘉禎元年乙未(九月十日改) 二八九五

四月 辨圓竝ニ榮尊渡宋ス。仁治二年(〇一九)七月、辨圓歸朝ス。

〔榮尊和尚年譜〕 師歲四十一、與辨圓相共乘商舶、出平戶、經十晝夜、直到大宋明州、

即宋理宗端平二年也、然與辨圓分手、歷參諸名藍、圓爾先參徑山、師先扣江南禪關、後

參徑山、圓爾見師來、倒衣出迎、延令參請、師問曰、生死事大、無常迅速、如何體究去、佛鑑

曰、左之右之、唯這箇、汝勿錯舉、師省日本榮朝師答處、服勤三年、

〔聖一國師年譜〕 師三十四歲、四月船出平戶津、經十寅夕、到宋明州、(中略)

〔仁治二年辛丑(中略)肥州水上有榮尊(覺禪房號)持律行道、世所稱也、昔與師偕或在長

樂或入宋國、然尊經三年而歸、領水上教院、聞師既至、草教爲禪、請師爲開山祖、亦自居

板首、

〔水上山萬壽開山神子禪師行實〕 (前文ハ貞應二年是歲ノ條ニ收ム) 師彌欲願助道、詣伊勢、參太神

宮、(中略)付商舶渡皇宋、訪求一蹤、遍參知識、後到徑山、見無準範、然雖隨衆入室、以不

通語話機語不相契、和僧圓爾適在座下、侍於範湯藥、師以宋晉話不得、從爾研究、終猛

文曆二年、順嘉元年

榮朝、佛
鑑答フル
所、按ヲ
一ニス

省於澄師之處師莫汝相誤師在宋一年居無何織巨舶歸本國

嘉禎三年丁酉 (一一九七)

四月十九日 將軍賴經、大倉新御堂上棟式ヨリノ歸途、足利義氏ノ邸ニ立寄ル。新田政義、引出物役人ノ中ニ在リ。

〔吾妻鏡〕 十九日、庚子、晴、大倉新御堂上棟也、將軍家御布衣、令監臨給中略以還御之次、入御左馬頭義氏朝臣之家、御遊非一中略其後有御引出物

役人 御劍 丹後守泰氏

御調度 足利五郎

御甲 駿河四郎左衛門尉 同五郎左衛門尉

南庭 壹岐守

一御馬御毛 畠山三郎 日記五郎 二御馬御毛 新田政義太郎 太平太郎

是歲 僧隆圓ノ勸進ニヨリ長樂寺ニ於テ楞嚴經印板ノ彫刻始マリ、延應元年(一一八九)冬、功終ル。

〔慈眼堂經藏所藏首楞嚴經卷之十奥書〕(日光町)

口絶工傷

楞嚴十軸印經板首尾三把彫刻終若是非蒙天冥助、隆圓豈輒使其工伏乞龍天常守護與隆佛法繼眞風、不知爾等共來誓熟違其言自利空、勸進比丘隆圓彫刻期印版□嘉禎丁酉、終於延應己亥、勸進經營雖滿於三箇年、功匠劬營不足於九箇月、所以二百(句九)五句之中、即成七十六斤之板、於上州新田庄長樂寺、依師匠貴命延應元□□孟冬小雪日甲子法之而已、弘安元年戊寅中秋日□□

〔註〕 考古學雜誌第七卷第一號、六號、上毛及上毛人第二四六號參照。

仁治二年辛丑 (一一九〇)

正月二日 幕府椀飯ノ儀、馬役ヲ新田政義、大井田十郎等勤ム。

〔吾妻鏡〕 二日、辛卯、天晴、椀飯、左馬頭義氏朝臣沙汰、御劔宮内少輔泰氏御調度秋

田城介義景御行騰太宰少貳爲佐、

一御馬 足利五郎 高彌太郎 二御馬 秋田(政義)太郎 阿保彌次郎

三御馬 多々良小太郎 同次郎 四御馬 武田(政義)次郎兵衛尉 同三郎

五御馬 畠山三郎 大井田十郎

四月二十九日 新田政義、預レル囚人逐電セシ罪ニヨリ、過怠料ニ處セラル。

仁治二年

一一三

足利義氏
同泰氏

足利五郎
新田政義

大井田十郎

新田政義

〔吾妻鏡〕 廿九日、丁未、囚人逐電事、預人罪科不輕、召過怠料、可被寄進新大佛殿造營之由、爲清左衛門尉滿定奉行、今日有議定之、新田太郎政義分三千疋、毛呂五郎入道連光預召人紀伊國三上庄、分五千疋、各來八月中可令辨償云々、是爲孫子深利五郎爲經咎之由、蓮光雖訴申、被尋下云、蓮光猶不遁之云々、

仁治四年、寬元元年六月二十日改、癸卯（一九〇三）

七月十七日、幕府、將軍供奉ノ結番ヲ定ム。中ニ新田三郎アリ。

〔吾妻鏡〕 十七日、壬辰、臨時御出供奉人事、（中略）

定 御共結番事次第不同

足利大夫判官

上旬（全四十九人ノ名） 足利大夫判官（第二十三） 新田三郎（第四十五） 佐貫太郎

新田三郎

中旬（全四十九人ノ名） 園田彌三郎 下旬（全四十）

右守結番次第、可被參勤之狀、依仰所定如件、

寬元々々年七月日

寬元二年甲辰（一九〇四）

六月十七日、新田政義、京都ニ於テ俄ニ出家セシ罪ニヨリ、所領一所ヲ沒收セラル。

大番在京

自由出家

所領召放

〔吾妻鏡〕 十七日、丙戌、新田（政義）太郎爲令勤仕大番在京、是爲上野國役之故也、而稱所勞俄遂出家、但不觸事、由於六波羅并番頭城九郎泰盛等之由、依有注進狀、今日評定

之次、被經沙汰、任被定置之旨、可被召放所領一所之由、被定云々、

〔新田實城應永記〕 （系圖部）

〔參考〕 政義ノ處罰セラレシ理由、吾妻鏡ニ左ノ條アリ。

〔吾妻鏡〕 （仁治二年十一月） 十七日、庚子、天霽、御家人等未及老耄、無病而不蒙御免、令出家、

猶知行所領、又乍浴關東之御恩、居住京都、自今以後、可被停止之由、有評定云々、（建三年十二月二日及七日ノ條ニハ、足泰利氏自由）

八月十五日、將軍賴嗣、前將軍賴經、鶴岡ノ放生會ニ臨ム。隨兵中ニ新

田（世良）賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 十五日、癸未、天晴、鶴岡八幡宮放生會也、大殿并將軍家御參、（中略）供奉

人行列（中略）御後五位六位（布衣、全六十二人ノ名）宮内少輔泰氏（第二十五）蘭田淡路

前司俊基

後陣隨兵（全十二人ノ名）三河守賴氏

八月是月、辨圓、上野長樂寺ニ歸リ榮朝ニ逢フ。

關東ノ恩ニ浴シテガハラ京都居住

榮朝ノ禮

〔聖一國師年譜〕二年甲辰、師（聖一國師）四十三歲（中略）秋還野州受業、藤丞相道家、差備中刺史行範衛護以送、八月至長樂寺、觀本師、將拜榮朝、朝不受曰、公已傳龍淵正派、我豈受拜哉、但喜衰質未盡、重得相見、師款語七日、遂過駿州、省其母、

〔元亨釋書〕淨禪寬元二年秋、還長樂并故里、覲省本師及母氏、大相國差備中刺史、行範爲宿衛、夫人脫羅綺珍服、充母之祝、至長樂禮本師、榮朝朝拒而不受、曰、公已傳龍淵正派、我豈堪拜哉、只喜長壽再得相見、

是歲、後ノ上野長樂寺住持院豪、宋ニ航シ佛鑑禪師ニ教ヲ聽ク、

〔佛光國師語錄〕卷九（弘安二年十一月一日ノ條ニ收ム）

寬元三年乙巳（一九〇五）

五月九日 金津資成、上野新田庄内米澤村名主職ヲ改メラレズ、

〔吾妻鏡〕九日壬寅、金津藏人次郎資成申上野國新田庄内米澤村名主職事、以懸物狀雖申子細、文曆御下知無相違之間難及改沙汰之由被仰下云々、

〔註〕金津某ノ長樂寺ニ寄進セル事、弘安四年六月十五日條ノ院豪注進中ニ見ユ。

五月十八日 上野長樂寺開山榮朝 武藏慈光寺ノ推鐘ヲ造ル、

榮朝

〔慈光寺推鐘銘〕藏武

奉治鑄 六尺推鐘一口

天臺別院慈光寺 大勸進遍照金剛深慶 善知識入唐沙門妙空 大工物部重光

寬元三年乙巳五月十八日辛亥

願主權律師法橋上人位榮朝

（背面ニ）銅一千貳百斤

寬元四年丙午（一九〇六）

八月十五日 將軍賴嗣、鶴岡放生會ニ臨ム。扈從ノ中ニ新田賴氏アリ

〔吾妻鏡〕十五日辛丑、鶴岡放生會也、將軍家有御出之儀、

行列 先陣隨兵 足利次郎兼氏 上野三郎國氏（中二名略） 田中右衛門尉知繼（以下

略）（中略）次御後五位六位、（布衣）全五十六人ノ名列（賴氏） 參河守

十二月十五日 新田次郎義季、上野長樂寺ニ同國新田庄女塚郷ノ土地ヲ寄進ス、

〔長樂寺文書〕（全文ハ貞治四年七月ノ條ニ收ム）

寬元四年

足利兼氏
田中知繼
新田賴氏

一所女塚郷 寛元四年□月十一日(五九)

在所坪付略之

沙彌榮勇寄進之

〔長樂寺文書〕(全文ハ明德三年八月十一日修ニ收ム)

一女塚村

寛元四年十二月十五日

沙彌榮勇寄進之

〔長樂寺文書〕(全文ハ觀應三年三月十一日修ニ收ム)

同庄内 女塚

開山檀那

新田次郎義季法名榮勇

寛元四十二

寛元五年・寶治元年丁未

(二月二十日改)

(二九〇七)

是夏心地覺心(圓明)、上野長樂寺ニ詣リ、榮朝ニ就ク。

〔圓明國師行實年譜〕(續群書類從)

師四十一歲就上野國世良田長樂寺過夏住持榮

朝、講法姪之禮、師問釋圓和尚、佛法大意、如何用心、圓云、忍辱精進、不蓄一塵財、是歲榮

朝入寂、(中略)(寶治)師四十二歲、寓止甲州心行寺、住持生蓮和尚也、壽福寺悲願長老

周聚過夏、師九旬安寘一竹床、於大殿後、晝夜宴坐、一夕定中、見從胸中提出許多小蛇、

覺後心意豁然、自知從前學解非究竟法。

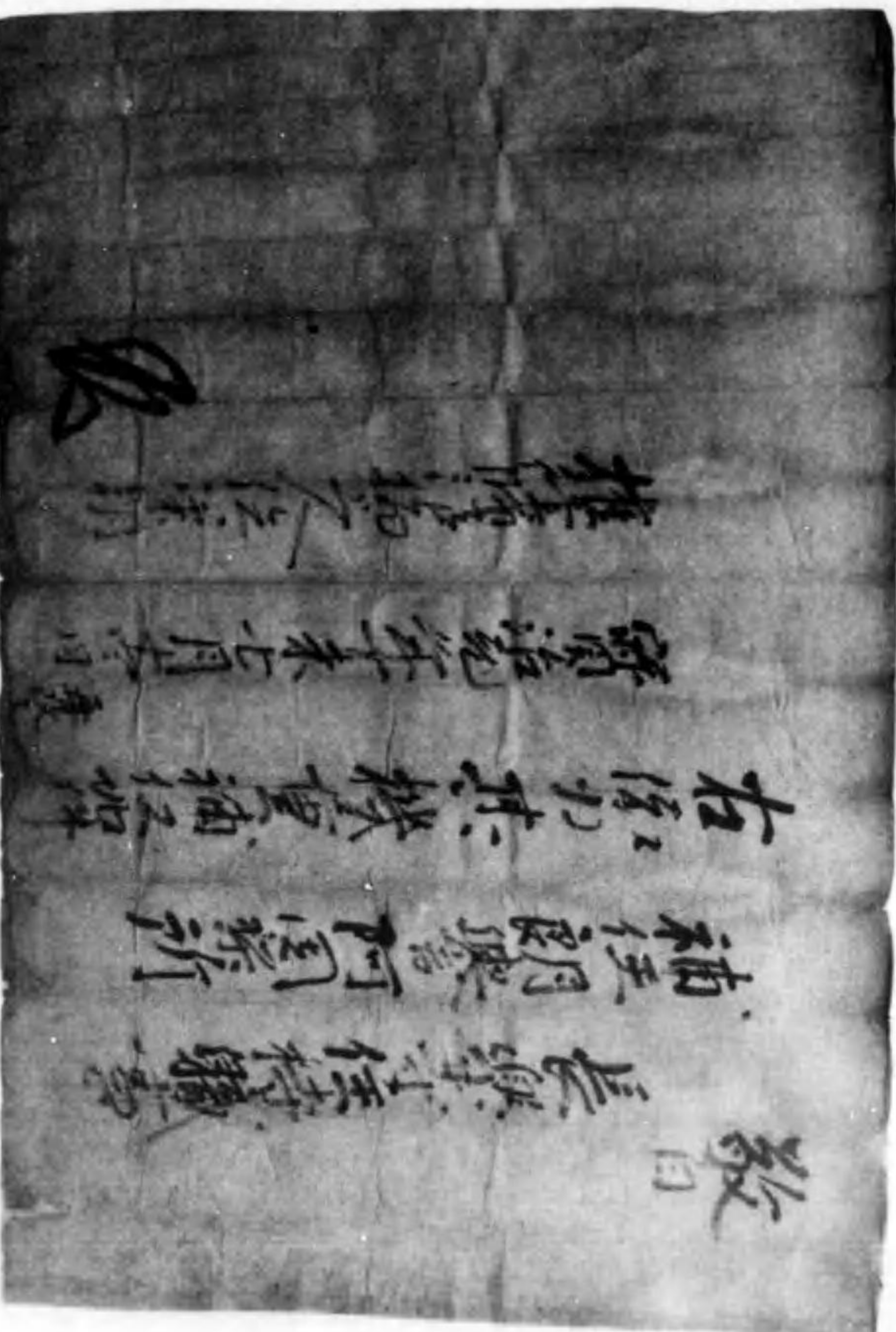
七月十四日 榮朝、上野長樂寺住持職ヲ朗譽ニ讓ル。

〔長樂寺文書〕

敬白

義季法名榮勇

悲願朗譽



111 榮朝白筆讓狀

上野世良田長樂寺藏

長樂寺住持職事

補任朗譽阿闍梨所

右依爲其機量任如件

寶治元年丁未七月十四日再改之

權律師法橋上人位榮朝(花押⁽²⁾)

〔沙石集〕

卷第十 (建治二年六月四日ノ條ニ收ム)

九月二十六日 上野長樂寺ノ榮朝、寂ス。

〔沙石集〕

卷第十 長樂寺榮朝上人ノ事

上野國世良田の長樂寺の長老釋圓房の律師榮朝上人は、彼の建仁寺の本願僧正の弟子也、慈悲深く、徳たけて、智行ならびなき上人と聞えき、去ぬる寶治元年九月二十六日入滅、彼の寺の僧の語りしは、戌の時の終りに臨終、其の時寺中光明有り、燈なき寮中明か也、ければ僧共後の物語にもとて彼の光にて日記なんどしけり、其の時の僧に遇ひて承りし事也、寺の近邊の在家人は寺に燒亡のあるにやとて、走り集りけり、端坐して印結び、北方に向つて、安然として化せらる、葬の時の作法、坐儀平生の如くして、有り難く目出たかりけり、

大光菴ニ
群ル

〔禪刹住持籍〕上野州世良田山長樂寺歴代 開山第一祖榮朝和尚號釋圓、扁明菴西、承久三年辛巳、
歲五十七、開長樂禪苑、住二十七年、寶治元年丁未九月二十六日戌時寂塔于大光菴、
壽八十三歲、

二世藏叟諱朗譽、號悲願、扁榮朝、寶治元年丁未入寺、歲五十五、住院十二年、

〔聖一國師年譜〕 寶治元年丁未、師（聖一國師） 四十六歲、九月二十六日、野州長樂寺榮
朝示滅、

〔元亨釋書〕淨禪 釋榮朝粹密學從、建仁西公稟宗門要旨、居上野之長樂禪苑、盛揚眞
化、東方道俗趨化如歸、寶治元年九月二十六日戌時滅、于時寺內甚明、徒衆相語曰、昏
夜之明豈有是等之煥赫乎、采筆記事、過于炬燭、寺傍民家望寺以爲失火、急奔入寺、見
朝之坐丈室而化、壽福朗譽、東福圓爾、皆朝之徒也、

〔洛城東山建仁禪寺開山始祖明庵西公禪師塔銘〕 嗣法者不計其數、其上首
則長樂開山榮朝、朝傳壽福朗譽、々傳壽福寂菴上昭、々傳南禪龍山德見、々嘗住大唐
寧洲兜率寺、相承至今、

〔沙石集〕卷第六 榮朝上人の説戒の事

上野國新田の庄、世良田の本願釋圓房の律師榮朝上人は慈悲深く、智慧賢くして、
顯密ともに學し、説法説戒まことに貴かりければ、近國の道俗、歸依渴仰して、聽聞

持戒人ノ
ナキ世相
ヲ歎ズ

山伏ヲ感
化ス

しけり、或る時の説戒に、「我が國邊地にして、佛法時を追ふてすたれ、如法の僧の
なき事の悲しさ、僧と云ふは、戒、定、慧の三學を宗として、出家の本意を達する也、出
家の五衆と云ふは比丘、比丘尼、沙彌、沙彌尼、式又摩尼也、在家の二衆は優婆塞、優婆
夷也、其の位にしたがひて、五戒、八戒をも保ち、十戒、具足戒、菩薩戒など保つに、出
家の形となれるも、戒も持ちまばることなし、學し知らざれば、たゞ俗の如し、出家
は三衣一鉢を持して戒を本として、其の上に定慧の修行、顯密禪教を習ふべしと
見えたり、三國の風儀かはるべからず、然るに、我が國も上代は鑿眞（ガシジン）和尚唐朝より
來りて、如法受戒の作法ありけれども、久しからずしてすたれつ、只髪を削り衣
を染めて、受戒と云ひて、戒壇走りめぐりたるばかりにて、化制のおきても知らず
受隨のしなも辨へずして、空しく藹次をかすへ、いたづらに信施を受くる僧のみ
國に滿てり、さるまゝに、異類異形の法師世間に多し、なまじひに、佛弟子の名を得
ながら、或は妻子を帶し、或は兵杖（シヤウ）をよこたへ、狩、すなどり、殺生、偷盜なさすと云ふ
事なし、かゝるまゝに、布薩（フツサツ）など云ふ事は名をも知らぬ者も有り、此の座にも見
え侍べり、男かと思れば、さすがに袈裟（カサ）に似たるものかけたり、又烏帽子にもあら
ず、童にもあらず、法師にも非ず、さる者の候ぞや、と山伏のありけるを見て、宣ひ

ければ、僧共はかゝる心づきなき事の給ふものかな、山伏はたてたてしき物を淺
猿しき事なりと思ひあへり、されども、眞實の慈悲を以て惡口の心はなく、佛法
の道理を思ひ入りて説き給ひける故、其の威ありて、この山伏方丈へ參じて、『今
日の御説法聽聞仕り候へば、げにかゝる形佛法の教に叶ひても覺え侍らず、いか
ゞ仕り候べき』
とまめやかに思ひ入りたる氣色にて、うち口説き、泣く泣く申しければ、『さらば
持齊して此寺におはせかし』との給ひければ、『然るべく候』とて、やがて遁世
してけり、彼の徳もいみじく、山伏も宿習有りけり、哀にこそ、

〔黃龍十世錄〕

乾 序 △六三二、一四三

愚見從上諸祖授受之間、其機緣語句悉詳傳記矣、自黃龍南禪師、至萬年貢禪師六世、
則五燈錄之所載也、其次天童雪庵、虛庵、則所不記也、本朝建仁開山千光祖師、得
法於虛庵、其後長樂朝公、壽福譽公、宏光昭禪師、三世雖的相承、而語錄既湮沒矣、獨
宏光上足特賜眞源大照禪師、龍山和尚、妙年之時、密受宏光之秘訣、而後徧參南朝知
識也、晚年歸郷、以唱黃龍將絶之道、故今編輯于南禪師以下十世語句、以補闕也、昔人
謂、前輩言行不見傳記、後世學者無所矜式也、愚之所以不敢私藏之意在焉、

榮朝
等ノ
語録
ニ
テ
リ

榮朝ハ上
野那波郡
人ノ弟
嚴ノ子
血脈諸流
ノ上ヨリ
重要ナル
地位ニアル

庚申十一月十三日

前廣嚴嗣祖比丘 以倫 謹誌

〔長樂寺血脈裏書〕

東福寺 誌所載

世良田山長樂寺開山釋圓房榮朝、上野國那波郡人、

依慈光山嚴趨別當出家、同受灌江、號大勸進上人、次隨建仁寺開山葉上僧正榮西受持
衣鉢、竝具足戒成僧、同受灌江、則穴太流也、榮西以黃龍袈裟直付授之、今世良田大光
庵在之、又奉值武藏州岡部即成房名聖、蒙再三呵責、重受蓮華院嫡々相承之法、全同カ
和尚三衣竝谷皇、呵闍梨所持鈴、明鏡、輪寶螺、金錘、寶冠、一流聖教等悉以付屬之、云々、
〔參考〕 榮朝ト武藏慈光寺ノ關係ハ寛元三年五月十八日ノ洪鐘銘ニモ見ユル
所ナルガ、嚴耀ナル人ハ吾妻鏡ノ文治五年六月廿九日ノ條ニ見ユ。

寶治二年戊申 (一九〇八)

正月三日 將軍御行始ノ儀、供奉人ノ中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕

三日、壬子、碗飯相州御沙汰、以後、將軍家有御行始之儀、入御左親衛御第供奉
人五位 前右馬權頭御査、尾張前司等全二十一人ノ名、宮内少輔第九人、新田參河
前司第十九人目、上野前司

八月八日 岩松時兼、阿波國生夷莊、武藏國春原莊内万吉郷ヲ其ノ妻ニ
讓ル。又、新田庄内成塚郷、菅鹽村金谷村ヲ其ノ女とち御前ニ讓

寶治二年

一三三

ル。

〔正本文書〕

庄阿波生夷

讓渡 ねう(平土用カ)の所

あはのくにいくいな(生夷)のさう、むさしのくにすん(春原)のはらのさうの内まん(万吉)きちの
がう、

右件の所々、御下文らをあいくしてゆつりわたす事しち也、た、しかきりあるね
んくく(置役)わやくニいたて(置)て、せんれいにまかせてきたをいたすへし、よてこ(後日)にちの
せうものために、ゆつりわたすさう(歌)如件、

寶治二年八月八日

源時兼 (花押) (3)

〔正本文書〕

讓渡 とちこせん(平土用カ)の所、

上野國新田庄内なりつかのがう、同すかしをの村、かなやのむら、
右件のかう、ゆつりわたす事しちなり、た、しかきりあるねんくくわやくにいた

りては、せんれいにまかせてきたいたすへし、し、そんく(平土用カ)にいたるまで、またく
たのさまたけあるへからず、し、さかいにいたりては、せんれいにまかすへし、を
よそかやうにゆつりわたすといふとも、は(平土用カ)のこ、ろをそむかむにいたては、は
はのしんたいにてあるへし、よてのちのせうものためにゆつりわたすさう如
件、

寶治二年八月八日

源時兼 (花押) (4)

〔註〕 とち、御前ガ時兼ノ娘ナル事ハ、弘長三年三月二日、及同二年八月廿八日ノ

讓狀ヲ併セ見テ察スベシ。

八月十五日 將軍、鶴岡放生會ニ臨ム。隨兵中ニ里見義繼アリ。

〔吾妻鏡〕 十五日、己丑、天晴、鶴岳放生會也、將軍家有御出之儀、(中略)

後陣隨兵十一人 相摸三郎太郎時成 千葉次郎泰胤 上野三郎國氏 里見伊

賀彌大郎義繼(以下略)

閏十二月十一日 足利義氏、其ノ亭ニ將軍ヲ迎へ、引出物ヲ進ム。其ノ
役人中ニ、里見義繼、同氏繼アリ

〔吾妻鏡〕 十一日、甲寅、及還御之刻、(前日ノ條ニ將軍家爲御方邊入御于足)亭主進御引

寶治二年

一三五

出物

其役人 御劔長伏輪 宮内少輔泰氏 羽櫃壽鶴 上野前司泰國 一御馬

黒笠壽鶴 足利三郎 同次郎 二御馬 輪之 里見彌太郎 同藏人三郎

(註) 里見藏人三郎ハ氏繼ナルベキ事尊卑分脈ニヨリテ推察セラル。

建長二年庚戌 (一九一〇)

正月十六日 將軍、鶴岡八幡ニ參拜ス。供奉人中ニ新田賴氏アリ。

[吾妻鏡] 十六日壬午天晴將軍家御參鶴岡八幡宮今年初度御東帶也供奉人

(全四十二人ノ名列) 宮内少輔泰氏(第十一) 新田參河前司賴氏

二月二十六日 新田賴氏、將軍賴嗣ノ學問祇候ニ定マル。

[吾妻鏡] 廿六日壬戌將軍家可有文武御稽古之由相州以消息狀令諫申之給爲

和漢御學問則縫殿頭參河前司爲弓馬御練習急(五名略)等常令祇候御所中各可隨

召云々又爲和泉前司武藤左衛門尉奉行人々子息之中撰試好文竝器量之士可候

同學趣内々被仰付之云々

三月一日 閑院殿ノ造營役新田氏ニモ仰付ケラル。

[吾妻鏡] 一日丁卯造閑院殿雜掌事爲被進覽京都云本役人云始被付分今日悉

被注緝之(中略)

其目錄樣(中略)

紫宸殿 相模守 清涼殿 甲斐前司 駿河入道(中略) 小御所 足利左馬

頭入道(中略)

築地八十八本 垣形十

十本 左衛門陣南 武田伊豆入道跡(中略) 三本 同門西在 佐貫左衛門跡

三本 同西 武石入道 二本 同西 島山上野前司(中略) 六本 同東 縫殿陣西

新田入道跡(以下略)

三月二十五日 將軍方違ヒ供奉人中ニ新田賴氏アリ。

[吾妻鏡] 廿五日辛卯天霽將軍家爲御方違入御相州御亭供奉人々布衣下括(全

十五人ノ名列) 宮内少輔(第十八) 那波左近大夫(第二十六) 新田參河前司

十二月二十七日 幕府、近習結番ヲ定ム。第四番ニ新田賴氏アリ。

[吾妻鏡] 廿七日戊午近習結番事治定(中略)

定 結番事 次第(一番子午ヨリ六番巳亥マ)

四番卯酉 宮内少輔 上野前司 足利三郎 新田三河前司 下野七郎 佐渡

建長二年

一三七

新田入道

大夫判官 (以下略)

建長三年辛亥 (二九二)

正月一日 一日ノ將軍他出ノ供奉、三日ノ椀飯、五日、十一日、二十日ノ將軍他出ノ供奉ノ中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 一日(中略)(將軍家相州御第入) 新田三河前司賴氏(中略)

三日、甲子、椀飯、左馬頭入道正義沙汰、

御劔 宮内少輔泰氏 御調度秋田城介義景 御行騰 新田三河前司

賴氏(中略)

五日、丙辰、(二位殿秋田城介義景廿) 新田三河前司賴氏(中略)

十一日、壬申、天霽、將軍家參鶴岡八幡宮、(中略)(御後供奉) 新田三河前司賴氏(中略)

廿日、辛巳、天晴、將軍家二所御進發也、行列(御籠御後ノ) 新田三河前司

六月五日 引付衆ノ結番ヲ定ム。中ニ山名行直、同俊行アリ。二十日更ニ改ム。

〔吾妻鏡〕 五日、甲午、天霽、有評定、(中略) 次五方引付、更被結番之爲六方、(中略) 其

番文云、



一三 里見氏義造立不動尊石像

上野勢多郡横野村宮田



一四 宮田不動尊石像銘(截斷下面)

一方(五名) 二番(五名ノ中第一) 山名進二郎行直 三番(五名) 四番(五名ノ中第一)
山名中務俊行 (五番、六) (中略)

廿日、己酉、引付之事雖被結番之、重々被歷其左右、縮六方欲三方、一番(十名略) 二番(十一名ノ中二) 山名進次郎 三番(九名ノ中二) 山名中務直

七月八日 里見氏義、上野勢多郡宮田ノ地ニ不動尊石像ヲ造立ス。

〔宮田不動尊石像銘〕(斷下面) (群馬縣勢多郡 横野村宮田)

定朝流ノ
佛師院快

佛師定調流造之、 僧院隆

僧院快 (花押)

予情望此巖岫、定爲古聖跡歟、以是所發佛法興隆之願也、夫以釋迦如來成道之砌、現不動色身而攘障擬魔王、法喜菩薩修行之岩、安明王尊像而利末代衆生、因之尋彼前蹤、爲奉持大聖、令修營岫中之處、建長三年六月十八日、行法之器具岫出之、是則相催宿習、所至丹誠也、仍彌抽懇志、同廿六日終功、所奉安置忿怒形像也、抑所仰者斷惡修善之誓、所憑者生生加護之願也、速除魔緣災難、必成現當所求、爲乃至法界平等利益也、興隆之志、越大概如斯矣。

里見氏義

建長三年 大歲 七月八日

願主掃部權助源朝臣氏義(花押)

建長三年

八月十五日 將軍、鶴岡放生會ニ臨ム。新田賴氏、供奉人中ニアリ。

〔吾妻鏡〕 十五日、癸卯（將軍家鶴岡八幡放生會）新田三河前司賴氏（御出、御後ノ行列中ニ）

十月十九日 將軍、北條時賴ノ新第ニ臨ム。供奉人中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 十九日、乙亥（將軍相州新造御第）新田三河前司（入御ノ供奉人中ニ）

建長四年壬子（一九二二）

四月三日 新田賴氏、幕府御格子番ノ中ニアリ。同十四日、賴氏、將軍宗尊親王ノ鶴岡御社參供奉人ノ中ニアリ。

〔吾妻鏡〕 三日、丙辰（中略）又御格子上下事、被定人數云々（中略）

御格子番事次第不同。

〔一番ヨリ六番マデ中ニ〕 五番（全十二名ノ中）參河前司賴氏（中略）

十四日、丁卯（將軍家鶴岡御社參）參河前司賴氏（後陣隨）田中右衛門尉知繼（供奉人中ニ）

四月三十日 幕府ノ引付衆ヲ改組ス。中ニ山名行直、山名俊行アリ。

〔吾妻鏡〕 卅日、癸未（因晴）引付加二方爲五方（中略）

引付（一番ヨリ五番マデ中ニ）

一番二日（全七名ノ第）山名次郎行直（中略）四番卅三日（全七名ノ中ノ）山名中務丞俊行（第七日目ニ）

七月五日 藤原時家、上野長樂寺ニ武藏中條保内ノ水田ヲ寄進ス。〔長樂寺文書〕

七月八日 將軍ノ御方違、行列中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 八日、庚寅、天晴（晴）小雨潤酒（雨）申刻將軍家爲御方違入御于右兵衛督教定朝臣泉谷第（御行列）前參河守賴氏

八月一日 宗尊親王、任將軍拜賀ノ爲、鶴岡御社參、尋デ十四日、放生會御臨場供奉人中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 一日、癸丑、天晴、親王家令任征夷使大將軍御之間、可有御拜賀于鶴岳八幡宮之由（中略）御拜賀供奉人（次第）御劔（全三十七人ノ名列）那波左近大夫政茂、

參河前司賴氏（中略）

十四日、丙寅、放生會御參宮供奉人散狀被覽之（中略）參河前司賴氏（全四十六名中ニ）

十一月十一日 將軍、新邸御移徙、二十日、北條重時亭ニ入御、供奉人中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 十一日、辛卯、天顏快晴、申刻將軍家新御所御移徙也（其ノ供奉人中ニ）

參河前司賴氏（中略）

建長四年

廿日、庚子(將軍家入御奥州、亭供奉人ノ中ニ)參河前司頼氏

十二月十七日 將軍鶴岡御社參、供奉人中ニ新田頼氏アリ。

〔吾妻鏡〕 十七日、丁卯(將軍家鶴岡御社參、供奉人、御後布衣ノ中ニ)參河前司頼氏(行儀)

是歲 僧無住、上野長樂寺ニ於テ、朗譽ニ釋論ノ講ヲ聞ク。

〔雜談集〕 三十五歳、壽福寺ニ住メ、悲願長老(朗譽ノ下ニテ、釋論圓覺經講ヲ聞、釋

二十七歳世良、田ニテ聞之、坐禪ナト行シ侍リシ、

建長五年癸丑 (一九一三)

正月三日 將軍御行始ノ役人中ニ、又二十一日、鶴岡御社參供奉人中ニ、

新田頼氏アリ。

〔吾妻鏡〕 三日、壬午(將軍家御行始供奉人、布衣、御劍役ノ中ニ)參河前司頼氏(中略)

十六日、乙未、來廿一日依可有御參于鶴岡八幡宮、被催供奉人之(行列、御後布衣ノ中ニ)參河前

司頼氏

八月十五日 將軍鶴岡放生會御臨場、供奉人中ニ新田頼氏アリ。

〔吾妻鏡〕 十五日、辛酉、晴(將軍家鶴岡放生會御參宮、供奉人、行列、先陣隨兵中ニ)田中左衛門尉知綱(御後布衣ノ中ニ)

參河前司頼氏

十二月二十一日 幕府、引付頭人改補、山名行直、同俊行、番ノ中ニアリ、

〔吾妻鏡〕 廿一日、乙丑(引付頭人ノ改補ニツキ、番ヨリ五番マデノ中ニ)一番(全八名ノ第一、八人目ニ)山名進次郎

四番(全七名ノ中ニ、第七人目ニ)山名中務丞

建長六年甲寅 (一九一四)

正月一日 將軍御行始、二十二日、鶴岡御社參、供奉人中ニ新田頼氏アリ。

〔吾妻鏡〕 一日、乙亥(將軍家御行始ノ供奉人、布衣、下括ノ中ニ)參河前司頼氏(中略)

廿二日、丙申、齋、將軍家御參鶴岡八幡宮、行列(御後ノ中ニ)參河前司頼氏

六月十六日 諸人、幕府ニ群參、着到ヲ附ク。中ニ新田頼氏アリ。

〔吾妻鏡〕 十六日、丙戌、鎌倉中物念之間、自昨夕諸人群參御所中、皆令着到之披閱、

相州御覽云々(全六十五名ノ第十人目ニ)新田參河前司(第四十三人目ニ)田中右衛門尉

七月二十日 將軍供奉人ノ催促アリ。故障アル者ノ中ニ新田政義アリ。

〔吾妻鏡〕 廿日、庚申、供奉人等事重有催促、日來連々申子細人人、

布衣 右馬權頭 尾張前司 駿河四郎 新田太郎(以下九名略)

已上申障

建長六年

八月十五日 將軍、鶴岡放生會臨場。供奉人中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 十五日、乙酉（將軍家鶴岡放生會出御、行列御後布衣ノ中ニ）參河前司賴氏（後陣隨、兵中ニ）田中右衛門尉知綱

十二月一日 幕府、引付衆ノ結番ヲ定ム。山名行直、俊行、新田賴氏等番ノ中ニアリ。

〔吾妻鏡〕 一日、己巳、五方引付更被結番也。

引付 一番（全九名ノ中、第八人目）山名進次郎（中略）四番（全九名ノ中、第五人目ニ）那波左近大夫將監（第八人目ニ）山名中務丞 五番（全九名ノ中、第二人目）參河前司

建長八年康元元年（十月五日改）丙辰（一九一六）

正月一日 幕府、腕飯ノ儀祇候者ノ中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 一日、癸巳、天顔快晴、有腕飯（相州御、沙汰）之儀、相州奥州已下人々着布衣出仕、各候庭上如例（全八十六名中、第七人目ニ）中務權大輔（第八人目ニ）足利次郎（次ニ）同三郎（第二十一人目ニ）島

山前司（第三十一人目ニ）足利上總三郎（第三十七人目ニ）那波左近大夫（第三十九人目ニ）新田參河守

正月三日 幕府、腕飯ノ儀、祇候者ノ中ニ新田次郎（大館家氏、ナルベシ）アリ。

〔吾妻鏡〕 三日、乙未、晴、腕飯、（足利三郎、利氏沙汰）御簾黃門、御劔越後守實時、御調度下野前司

泰綱、御行騰和泉前司行方（一御馬ヨリ五御、馬マデノ中ニ）五御馬 足利次郎兼氏 新田次郎

正月五日 將軍御行始、十一日、將軍鶴岡御社參、供奉人ノ中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 五日、丁酉、天晴、將軍家依可有御行始于相州御亭、注今日日出仕衆八十五

人之交名披覽之、就御點以三十八人爲供奉（第十四人目ニ）中務權大夫家氏 足利次郎兼氏 同三郎（第二十三人目ニ）參川前司賴氏（中略）

十一日、癸卯（中略）未刻將軍家御參鶴岡宮（御後二十九名中、第十二人目ニ）足利三郎利氏、中務大輔家氏（一名ヲ、イテ）足利上總三郎滿氏（一人ヲ、イテ）三川前司賴氏

六月二十九日 將軍、鶴岡放生會臨場、供奉人惣人數中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 廿九日、戊子、放生會御參宮供奉人事、越州任例注惣人數、申下御點（全百八人中第二十人目ヨリ）中務權大輔 足利次郎 同三郎 上總三郎（第七十三人目ニ）新田參河前司、

御點散狀（次第、中ニ）中務權大輔 足利次郎 同三郎 新田參河前司（一人ヲ、イテ）那波左近大夫 同大郎

七月十七日 將軍、最明寺ニ御參、供奉人中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 十七日、乙巳、晴、將軍家御參山内最明寺（御出行列後供奉廿二人ノ第七人目ニ）新田參河守

賴氏

八月十五日 將軍、鶴岡放生會臨場、二十三日、北條重時ノ第臨場、供奉人中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 十五日、癸酉（鶴岡八幡宮放生會、將軍御出行列先陣隨兵十人中ニ）足利次郎兼氏（中略）

五位十五人（布衣下括）越後守實時（一人ヲ）中務權大輔家氏（三人ヲ）三河前司賴氏 那波

左近大夫政茂（中略）

廿三日、辛巳、天晴、將軍家入御于新奥州常葉第（供奉人中ニ）參河前司賴氏

康元二年、正嘉元年（三月十日改）丁巳（二九一七）

二月十日 新田（世良田）賴氏、上野長樂寺ニ、新田庄内世良郷ノ田宅ヲ寄進ス。

〔長樂寺文書〕 同庄世良田郷内田（一町四段在家一字） 賴氏 康元二十（全文ハ正平七年三月十一日條ニ收ム）

〔長樂寺文書〕（全文ハ貞治四年七月五日條ニ收ム）

一所世良田郷内（在家一字同前條正境供田） 康元二年（二月）□□十日 前參河守源朝臣賴氏寄進之

〔長樂寺文書〕 一世良田郷内在家一字（康元二年二月十日地頭前全文ハ元中九年八月十一日條ニ收ム）

閏三月二日 幕府、引付衆ヲ結番ス。中ニ、山名俊長、山名行忠アリ。

〔吾妻鏡〕 二日、丁巳、晴、今日評議之時、更被結番引付人數、自來月朔回以此衆可行之由被定下云々（一番ヨリ五番マ）山名中務大夫俊長（五番ニ）山名進次郎行忠

十二月二十四日 幕府、廂衆ヲ結番ス。中ニ新田賴氏アリ。

廿四日、甲辰、天霽、當參人數之中、或可然之仁、或撰要樞之輩、始被結番廂衆（中略）（一番ヨリ六番マ）三番寅申（全十名ノ第一番）新田參河前司

是歲 上野長樂寺住持朗譽、鎌倉壽福寺ニ遷ル。翌年、院豪、長樂寺住持トナル。

〔聖一國師年譜〕 （正嘉）元年丁巳、師（聖一）五十六歲（中略）平元帥、傳師居壽福寺講叢

林禮蓋榮西開基以來禪規未全、住持朗譽（悲願房）且居偏室

〔禪刹住持籍〕（上野州世良田山長樂寺歷代）二世藏叟、諱朗譽、號悲願、品榮朝、寶治元年丁未入寺

歲五十五、住院十二年、後遷壽福寺（中略）

第三世一翁、諱院豪、諡圓明、佛演禪師、品無學元、正嘉二年戊午入寺、歲四十九住院二十四年、

〔吾妻鏡〕 （正嘉二）廿三日、癸酉、霽、故武州經時十三年佛事、被供養佐佐目谷塔婆、導師壽福寺長老悲願（房）文朗譽

正嘉二年戊午 (一九一八)

正月一日 幕府椀飯ノ儀、二日、將軍御行始ノ儀、十日、鶴岡御社參等ニ新田賴氏參列ス。

〔吾妻鏡〕 一日、辛亥、天晴、椀飯、相州禪室 御沙汰兩國司被候大庇、其外着座于庭上東西

西座(全六十 四名略)東座 中務大輔(以下百二十名ノ 中第十八人目ニ)新田參河前司(中略)
二日、壬子(中略)椀飯之後將軍家御行始(供奉人布衣下括五位 二十人ノ中十人目ニ)中務權大輔家氏(十六人 目ニ)

參河前司賴氏(中略)
十日、庚申、晴、將軍家御參鶴岳宮、御出行列(中略)五位布衣 下括參河前司賴氏

三月一日 將軍、一、二所御社參、行列中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 一日、辛亥、晴、辰刻將軍家二所御進發(行列ノ 中ニ)參河前司賴氏

六月十一日 十一日、將軍、時賴第二、十七日、鶴岡放生會ニ臨場、供奉人ノ中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 十一日、己丑、晴、未刻將軍家入御山内叡明寺御亭、供奉人(中ニ)參河前司賴氏(中略)

十七日、乙未、來八月鶴岳放生會御參宮供奉人事、爲申下御點(中略)其記書樣(全百二 十二名)

中新田參河前司(及ビ)田中右左衛門尉

正嘉三年、正元元年己未(三月二十 六日改)(一九一九)

十月六日 新田政氏、八幡大菩薩ノ像ヲ造立ス。

〔普門寺八幡神像銘〕 (新田郡世良田村大字 群馬縣金 世良田天臺宗普門寺 石文年表)

右志者、源政氏當自

義家第八代孫、八幡 正元々々年

大井奉造立、仍壽福増 (御マ) 己未十月六日

長息災延命、恒受快樂也。

〔註〕 右神像銘文ハ筆蹟疑ナキニ非ザレドモ、暫ク茲ニ掲グ。

正元二年、文應元年(四月十 三日改) 庚申 (一九二〇)

正月一日 幕府、椀飯、將軍、御行始ノ儀、十一日、鶴岡御社參、新田賴氏、參列ス。

〔吾妻鏡〕 一日、己巳、晴、椀飯、相州禪室 御沙汰兩國司并評定衆以下人々着布衣出仕、列候

庭上之儀如恒(全八十八 名中ニ)新田三河前司(中略)
今日有御行始之儀(中略)未刻御出(御後五位 中ニ)參河前司賴氏(中略)

正元二年

十一日、己卯、將軍家御參鶴岳(御後五位ノ中ニ)參河前司賴氏

正月二十日 幕府、文武ノ一藝ニ堪能者ヲ以テ晝番衆ヲ定ム。新田賴氏番ノ中ニアリ。

〔吾妻鏡〕 廿日、戊子、今日於御所中被定置晝番衆、其内於壯士者、歌道蹴鞠管絃右筆弓馬野曲以下都以堪一藝之輩者、於時依可有御要、被定結番者(中略)〔マデノ中ニ〕五番(辰ノ中ニ)新田參河前司賴氏

二月二十日 幕府、廂番ヲ改ム。新田賴氏、番中ニアリ。

〔吾妻鏡〕 廿日、戊午、廂御所結番更被書改、〔マデノ中ニテ〕五番(全十二人ノ中ニ)新田參河前司

四月三日 將軍、北條重時ノ第二臨ム。供奉人中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 三日、庚子、齊入御于入道陸奥守亭(供奉人布衣ノ中ニ)參河前司(賴氏)

十月是月 日蓮、他國侵逼難ヲ豫言シ、十一通ノ狀ヲ當路者及ビ大寺院ニ送ル。上野長樂寺モ其一ナリ。

〔日蓮聖人註畫讚序〕

文應二年、弘長元年(二月改)辛酉(一九二)

正月一日 幕府出仕者、將軍御行始ノ參列者中ニ新田賴氏アリ

〔吾妻鏡〕 一日、癸亥(兩國司以下出仕、相分子庭)新田參河前司(未刻將軍家御行、始御所御方ニ)新田參

河前司賴氏

三月二十日 幕府、引付結番ヲ改ム。山名俊行、同行直番中ニアリ

〔吾妻鏡〕 廿日、壬午、雨降、今日評定衆召連署起請(中略)次引付衆等進別紙起請、亦

新制事今日始施行之、引付結番被改之、〔マデノ中ニ〕四番(廿七日、全八名)山名中務

大夫俊行 五番(廿七日、全九名)山名進次郎行直

四月二十四日 將軍、北條重時ノ山莊ニ臨場、供奉人中ニ新田賴氏アリ。

廿四日、乙卯、晴、將軍家(御馬)入御于奥州禪門極樂寺新造山莊(中略)供奉人(中略)中御

所御方騎馬(全十一名ノ中ニ)三河前司

七月十二日 是日、及ビ十月四日、將軍、時賴第二臨場、供奉人中ニ新田賴氏アリ。

〔吾妻鏡〕 十二日、壬申、雨降、將軍家(御馬)入御叡明寺第(中略)供奉人(中略)中御所御

方騎馬(全十二名ノ中ニ)新田參河前司(中略)

〔同十月〕四日、癸巳、天(晴)將軍家入御叡明寺御亭(供奉人、騎馬全十七名ノ中ニ)參河前司賴氏

弘長二年壬戌 (一九二二)

八月二十八日 岩松時兼、(覺智)先ニ子息經兼ニ讓レル上野新田庄新島ノ在家ヲ、女とち御前ニ讓ル。

〔正本文書〕

讓渡 上野國新田庄にゐしまのうちのさいけともちこせんの所々、

願念房のさいけ、同源三次郎入道のさいけ、井あまのさいけ、

右かの所ハ、せんそさうてんのりやうたり、よてたのさまたけなし、しかるあいたにゐしまの村ハ、さきに五郎(兼兼)にゆつるといへとも、このさいけともはかりをこひかへして、とちこせんのやしき所のれうにゆつりまいらせ候、またくたのさまたけあるへからず、さかひ(知行)ふるきことくにてあるへし、又先ゆつりまいらす所々の間事(公九)せられしつきやうハ、なりつかに公田三町かふん、かなやに公田貳町のふんを、京かまくらのをうはんといひ、御わうはんといひ、かれこれ五町かくうしをつとむへし、すかしをにきてハ、かやうに公事をせぬところなれハ、京かまくらのくうしにきては、いかうあるへからず、但りやうけの御ねんくうはかりは、覺智かそんしやうの時のまゝにてあるへく、くわふんのさたあるへからず、もし

岩松五郎
經兼
とち御前

領家ノ年
賞

このむねをそむきて、わつらひをもいたさん子ともあらハ、ことの上しをかまくらとのへ申して、このゆつり狀のことくのさいきよをかふるへし、仍なかくとちこせんにゆつりわたす所也、またくのちのさまたけあるへからず、狀如件、

弘長二年八月廿八日

時兼事 智(花押)(5)

〔註〕 覺智ガ時兼ナル事ハ寶治二年八月八日、及明年三月二日ノ讓狀ヲ併セ考フル事ニヨリテ察セラレ、又、五郎ガ經兼ナル事亦明年三月二日ノ讓狀ニテ察セラル。

弘長三年癸亥 (一九二三)

正月十日 幕府、堪能者ヲ撰ビテ旬蹴鞠ノ奉行ヲ定ム。新田賴氏、其ノ中ニアリ。

〔吾妻鏡〕

十日、辛卯、因晴、爲和泉前司行方奉行、被定旬御鞠之奉行、皆是所被撰堪

能也、云々(二月、五月、八月、十一月ノ下)三河前司賴氏

三月二日 岩松時兼、先ニ其ノ妻(平土用ナ)ニ讓リタリシ武藏春原庄万吉郷ノ地ヲ妻ノ死後、子息經兼ニ讓ル。

〔正本文書〕

弘長三年

一五五

岩松五郎
經兼

讓渡武藏國春原庄内万吉郷五郎經兼所、
右彼所者、依爲先祖相傳所領讓與五郎經兼所也、敢不可有他妨、但この所者、故女房
に讓所に、死期もかくなりて、万吉にをきては孝養所にすへきよし、遺言にせらる
るによりて、地頭つくだのうち、五段にをきて、故女房の墓所堂に永寄進する所
なり、敢不可有他妨、宛給彼堂住僧、爲孝養毎日可致勤者也、於彼田五段者付公私不
可有一向公事者也、任此讓狀不可有相違、仍讓狀如件

弘長三年三月二日

覺智(花押)

八月八日 幕府、鶴岡放生會供奉人等ノ事ニツキ沙汰ス。新田賴氏、在國
中ナリ。

〔吾妻鏡〕 八日、乙卯、放生會供奉人等事條々有其沙汰、(中略)新田三河前司(以下十
以上十六人、在國、有其沙汰被仰出條々事、)

文永三年丙寅 (一九二六)

七月是月 上野新田庄ノ内大嶋六郷ニツキ記セル事アリ。

〔正文書〕

上野國新田庄之内大嶋六郷事、

大嶋郷 大田郷 鳥山郷 長手郷 東牛澤郷 高林郷

文永三七月 日

文永五年戊辰 (一九二八)

五月三十日 新田賴有(得川)、其ノ外孫岩松龜王丸(政經)ヲ養ヒテ嫡子ニ立
テ、之ニ上野新田庄得川郷、横瀬郷、下江田村、但馬上三江庄、相模永用郷
ヲ讓ル。

〔正文書〕

ゆつりわたす所りやうの事、かめわう丸所

一かうつけの國新田庄内とくかわのかう、よこせのこ、下江たのむら、

一たちまの國上三江庄東方

養子事

一さかみの國 永用のかう

右新田庄内の所りやうハ重代さうてんのしりやう也、上三江庄ならひに永用
のがうはくんこうの所なり、しかるにせんねんのところ女子源氏ニゆつりたひ
て、あんとの御下文を申あたへ了、こゝにまこかめわう丸ハかの源氏のしそく

文永五年

一五七

岩松龜王丸

但馬上三江庄

相模永用郷

勳功ノ所
龜王丸ハ
女子源氏
ノ子息

京都大香

たるあいた、これをやうしとしてちやくしにたて、御下文并てつきのもんくうをあひそへて、やうたい(永代)をかきて、かめわう丸にゆつりわたすところなり、たしきやうと大はんの大事の御公事たるによりて、ふけん(分限)にしたかひてかめわう丸かは、并こけふんにもはうれいにまかせて所のようにとうをはいふんすへし、仍子々孫々にいたるまでさうゐなくなりやうちすへき狀如件、

文永五年五月卅日

散位源頼う(花押)⑥

上三江庄

〔大田文〕

但馬

上三江莊、百四十三町二反百七十歩

領家東方二位律師西方因幡法實秀案主八木五郎兵衛尉高家御

家人公文職相論御家人

〔註〕

史料編纂所本朱ノ加筆ニかめわう丸 岩松太郎經兼子、岩松太郎政經重名龜王丸、又号新田下野太郎、母頼有女、

〔正文書〕

本領所々注文

上野國

新田庄

丹生郷

武藏國

春原庄内万吉郷

澁江郷

小泉郷

片柳郷

秀泰郷

久米六間在家

蒲田郷

小林村

手墓村

得永名

加治郷

糯田郷

上總國

秋元郷内大谷村

下總國

藤意郷 手賀郷内布施村

野毛崎村

菊田庄内家中郷

相模國

長持郷 文永五年五月卅日下野御殿あところりやう

豆伊國

宇久須郷

〔註〕

右ノ本領所々注文ハ何時ノモノカ不明ナレドモ、茲ニ掲ゲテ參考トス。

十月十一日 僧日蓮、元寇豫言ノ符合ヲ述ベ、邪教ヲ止メン事ヲ獎ムル

狀ヲ長樂寺其他十一箇所ニ送ル

〔平左衛門尉頼綱狀〕

本満寺御書(頼綱第一書)類纂高祖(遺文録)

〔長樂寺狀〕

本満寺御書(類纂高祖(遺文録) 録外卷之一)

就蒙古國調伏之事、方方令披露候畢、既日蓮如勸、立正安國論、令符合早捨邪法、邪教可歸實法、實教若無御用者、今世亡國失身、後生必不可墮、那落速集一處、遂談合、令評議給、日蓮所令庶幾也、依御報可存其旨、候處也、敢而非諸宗、蔑如、但存此國安泰計也、

文永五年

下野殿御

恐恐謹言

文永五年十月十一日

日 蓮花押

謹上 長樂寺侍司御中

〔平左衛門尉賴綱狀〕〔弟子檀那中御書〕〔建長寺道隆狀〕(類纂高祖遺文錄本滿寺御書錄外卷之一)

文永九年壬申 (一九三三)

十一月十八日 長樂寺住持院豪、上野淵名庄政所ノ黑沼某ニ、長樂寺内ニアル菴室所ノ處置ニツキ狀ヲ與フ。

〔長樂寺文書〕

仰給候菴室所^{寺大門北脇}事、世良田地頭御建立長樂寺敷地内候之間、自始院豪計申候了、隨而佛法興行之程者於彼菴室所者後々長老も不可有悔返之儀候歟、然者永代不變地として被思食候、御免^{可令}存其旨給之狀、如件。

文永九年十一月十八日

院 豪(花押)

淵名庄政所黑沼太郎入道殿

〔註〕 黑沼太郎入道ハ、元弘三年五月八日、義貞舉兵前ニ幕府ノ徵稅使トシテ世

良田ニ來リ殺サレタル黑沼彦四郎入道ノ一族ナルベシ。

世良田地頭建立七長樂寺

是歲 新田賴氏、佐渡ニ流サル

〔源氏系圖〕(上野長樂寺所藏) 賴氏 三河守、世良田地頭、文永九年被勘氣流罪佐渡畢、康

元二年二月十日、法名良隱禪定門、

〔卷外長樂寺系圖〕 賴氏 三河守、文永九年被勘氣流罪佐渡畢、

文永十一年甲戌 (一九三四)

八月十四日 沙彌西願、源清重、源常家、源富村等、上野新田庄地方ニ於テ彼岸供養ノ青石塔婆ヲ造立ス。

〔淨藏寺所藏板碑銘〕(新田郡尾島町大字堀口淨藏寺藏、同字ザラメキ出土)

大壇那沙彌西願

秋平二入道 沙彌□□ (下缺)

沙彌實阿 菅原國文

毎月十四日 于時文永十式^{甲戌}年八月時正^{第三番}白

僧榮圓 藤原時□ 源常家

僧幸信 源清重 藤原富光

沙彌如蓮 源富村 高麗景吉

文永十一年

源常家

(註) 右ハ新田氏關係ナルカ否カ不明ナレドモ參考トシテ掲グ。

建治二年丙子 (一九三六)

六月四日 上野長樂寺前住朗譽、寂ス。

〔沙石集〕

卷第十 壽福寺朗譽上人の事

壽福寺の長老、悲願房阿闍梨朗譽上人かの榮朝跡を繼ぎて長樂寺の長老せらる、後には壽福寺の長老にて御坐しき、これも智行共に並びなき上人にて、末代には有り難き智者と申し相ひき、建治二年六月四日寅時入滅、先の日塔頭の邊、人のたやすく入らぬ様に、材木のありけるを以て、我と下知して、ゆいわたさせなんどした、めて、大衆に對面し、暇乞ひて、寅の時觀音の像の前にて燒香禮拜して、頌を書きて、倚座に坐し、手に印を結びて入滅、頌に曰く、

『八十四年動轉機、門々閉塞在今時、元來無主誰又去、空室頽危豈惜之、清夜月閑、松風爲琴、自非我客、誰亦知音、』

建長寺の先の長老兀庵和尚の申されけるは、『日本國には過分の智者也、』と、智恵も道心も有り難き上人と見え侍りき、そのかみ眞言に付いて、心池を開きたる人とぞ聞えし、昌山にて千日の護摩之行法の時、佛法の心地を得給へりと語りし

朗譽寂ス

辭世ノ頌

兀庵ノ評

人侍りき

〔禪刹住持籍〕

上野州世良田山長樂寺歴代

第二世藏叟諱朗譽號悲願、品榮朝、寶治元年丁未入寺、歲五十五、住院十二年、後遷壽福寺、建治二年丙子六月五日示寂、壽八十四歲、

〔念大休禪師語錄〕

大休和尚住禪興建長壽福小參(中ノ一節)

壽福譽公和尚、百日對靈小參、寥寥龜谷峰頭月、洞徹虛明觸處通、塔戶乍腐人寂寂、清光冷照福山中、豎拂子云、前壽福譽公和尚、只今在拂子頭上、住寂滅定、諸仁還知麼、其或未、知、福山當陽指出去也、昔從無相中示生、猶片雲點於太清、還從無相中示滅、似一瀉停於巨海、世壽八十四齡、冰清霜潔、成就百千三昧、玉轉珠回、道價雷動、風行學屢、雲蒸霧推、克振龜峰中興之業、不忝千光正續之宗、能事既畢、談笑歸眞、(中略)

前壽福譽公和尚、三周小參(文略)

大休和尚告香普說(中ノ一節)

爲前住當山譽公和尚七年遠忌普說、始自逍遙庵憶別、塵寰已見七年期、須知眞淨界、虛徹箇裏何曾隔、一絲伏惟、譽公和尚、定慧等持、戒行兼美、縱懸河之大辯、乘慈草以精嚴、中興龜谷、幻出梵宮、道業爲學者所宗、清聲爲檀門所敬、二十餘載、風行雷動、入十餘

戒行兼美

文永十一年

一六三

齡皓首彫眉滋焦枯之雨露開聲色於聾聵誠所謂季世之法燈也子嘗觀永嘉真覺大師徧探三藏精天臺止觀圓妙法門於四威儀中常冥禪觀後因左溪朗禪師激勵遂往曹溪謁六祖(中略)此日譽公諱辰斯臨諸徒思念命山野舉揚般若以資覺地報効提携然而譽公禪師與永嘉真覺雖相去久遠以今視昔誠不多讓與持佛祖大法普被群機譬如一雨所霑隨根受潤不墮偏局之見恢張圓頓之門法海寬廣波瀾浩渺悉使龍魚蝦蟹皆知以水爲命豎拂子云諸人只今還知譽公端的處麼須信古今無異路從來達者共同途以拂子擊禪床一下

大休和尚大小拂事(中ノ一節)

祭前壽福譽公和尚文(文略)

爲壽福譽公和尚乘炬

龜谷深沈古蘭若聯芳積燄譽飛騰毗藍昨夜忽然起吹滅山中正法燈伏惟新圓寂壽福譽公和尚妙指親傳道造離微之極辯才無礙說縱河漢之流岩檜蒼蒼傲雪霜神清貌古冰壺湛湛映泉石履實踐真蓋先進之白眉爲後學之清範八盡過壽不倦啓建之勞一室安禪自得逍遙之樂化權既攝恐偈坐亡總帳空閑猿鶴咨怨雖然末後一句始透牢關畢竟如何即是擲火炬云烈燄推中開箇○無明山上動雲雷

大休和尚佛祖讚頌(一節)

壽福譽和尚爲逍遙庵主請讚

河目海口鶴貌雲心中興龜谷鏗鏘正音八十四年隨緣應化百千三昧境界幽深腦後神光耀古今宗枝花木自成陰

大休和尚偈頌雜題(中ノ一節)

壽福譽和尚結庵扁曰逍遙說偈贈之

縛菴龜谷待眞歸八盡餘齡今昔稀瑩淨氷懷元不染孤高松操廻無依思公有約三生藏眠老全提一指機物外逍遙忘世慮倚筇閑看白雲飛

次年因過訪復以三偈寄之(文略)

十月一日 里見時成(山鳥) 田宅ヲ妻念空及孫女ねをい御前ニ讓ル。

〔長樂寺文書〕

神事佛事の御くうし事をちきたるといふともこの田さいけとんにいかくへからすかうふんにこのさいけとんのくうしをは□□□□へしこのさいけとんは一ふんもあけす女はういちこのちはねをい御せんにゆつらせ給へしよの人にはゆつらせ給へからすこの所は時成かちうたいさうてんのそりやう

なり、しかるによりて御くうし事とんをさためをはりぬ、かみくたんの事とんて
うく一ふんもそむかんこともまこひこし、そんくにをきては、おやおほち
のめいをそんく物にて、ふけふの人たるへし、時成かあとをちきやうすへからす
かみの御はからひとしてた人のりやうたるへし、仍のちのせうもんのためにゆ
つりしやう如件、

建治二年 ひのへ 十月一日

源時成(花押)(8)

(註) 弘安五年三月十日、正應四年十二月二十一日ノ條參照、

十二月二十五日 長樂寺住持院豪、境内ニ多寶石塔ヲ造立ス、

〔長樂寺境内多寶石塔銘〕

敬白

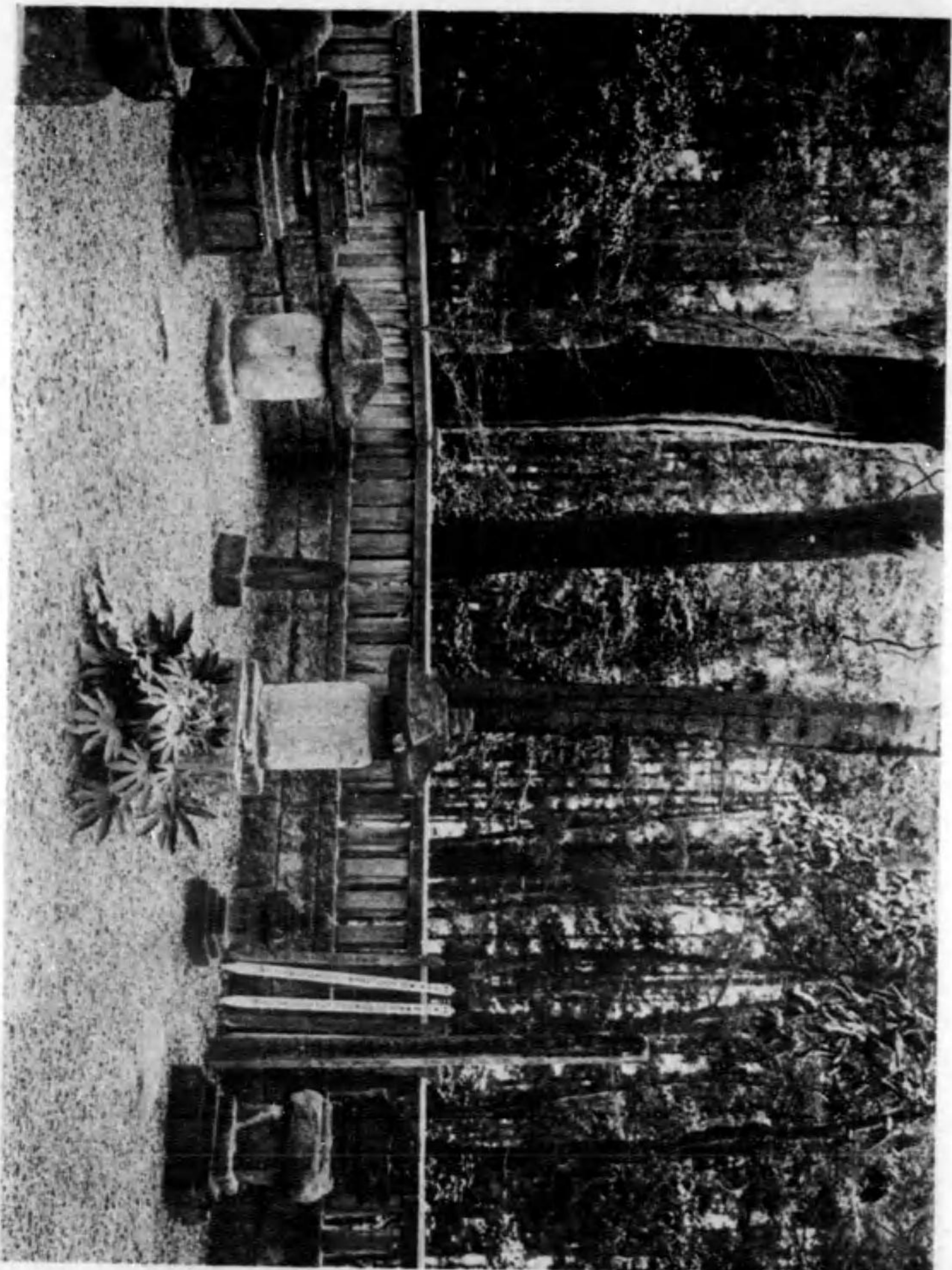
奉造立多寶石塔

右所造立如件

建治二年 丙子 十二月廿五日

第三代住持比丘院豪

建治三年丁丑 (一九三七)



一五 長樂寺文珠山墓地 右端、徳川義季ノ墓、造立銘アリ
中央、多寶石塔ニ院豪造立銘アリ

十二月二十三日 新田頼氏ノ次女尼淨院、新田庄上江田郷内堂垣内ノ田宅ヲ上野長樂寺ニ寄進ス。

〔長樂寺文書〕

故田中殿ノ御寄進

世良田長樂寺によせたてまつる田三丁、さいけ一字の事(堂垣内)たうかきうち、
右かの田さいけ(地頭)こたなかとの、御き日ところなり、上江たのうちに田七丁のちとうのとくふんをもて、としことにまいらすへきよし、こたなか殿の御きしんのしやうありといへとも、そのところにくたんの田さいけをよせたてまつるところなり、御寺にちやうさいほんきやうのそう一人もをこなハせ給候はん程ハ、いつれの世にもさをいあるへからす候、よてせうもんのためにしやう如件、

けんち三年十二月廿三日

淨院在判

〔長樂寺文書〕

新田庄世良田長樂寺領目録(略 觀應三年三月十日ノ條ニ收ム)

〔同〕

世良田長樂寺領除□□知行所々可被載御判所領等事(略 明徳三年八月十一日ノ條ニ收ム)

〔同〕

世良田長樂寺領所目録事(略 貞治四年七月五日ノ條ニ收ム)

〔註〕 淨院頼氏ノ次女ナル事、元亨二年十一月二十日ノ寄進狀及觀應三年三月

建治三年

十一日ノ寺領目録ニヨリテ明カナリ。

建治四年、弘安元年(九月二十) 戊寅 二九三八

是秋 上野長樂寺ノ明寅長老(家院)ト昵懇ナル同國山上行仙房、寂ス。

〔沙石集〕^{十卷} 臨終目出度僧の事

上野國山上といふ所に行仙房とて、本は淨道僧都の弟子眞言師なりけり、近比は念佛の行者にて、貴き上人と聞えき、去ぬる弘安元年秋の比入滅、(中略)世良田の明寅長老と得意にて、常には佛法物語などして禪門の風情も心にかけたる人
と見えたり、

〔註〕 明寅長老、沙門院豪ノ勅諡ヲ圓明佛演禪師ト云フ、之ト關係アルベシ。

十月三日 岩松經兼、上野新田庄内田嶋、岩松、千裁、高嶋、金井ノ諸郷、武藏万吉郷、陸奥加比草、野萱郷、下總野毛崎村、鎌倉甘繩地、和泉五ヶ畑、阿波生夷庄ヲ子息政經ニ譲リ、とよ御前、あぐり御前、女房某、こまわう御前等ニモ土地ヲ配分セシム。

〔正文書〕

永讓渡 太郎政經所

上野國新田庄内田嶋郷、岩松郷、千裁郷、高嶋郷、金井郷

武藏國万吉郷、陸奥國千倉庄(比設カ)加草野定(置カ)、

下總國相馬御厨内野毛崎村、

鎌倉甘繩地、

和泉國五ヶ畑、阿波國生夷庄、

惣領主トシテ配分スベシ
とよ御前
あぐり御前
女房
岩松經兼
入道道覺

右件所々者、先祖相傳所領也、代々手繼證文等を相そへて太郎政經に讓所也、敢不可有他妨、惣領主として公事等をはいふんすへき也、但讓もらしの所あらんをハ政經領知すへし、但西田嶋内田三町在家二字とよ御前ニ讓所也、同西田嶋内田二町在家一字あぐり御前に讓所也、この田在家等をハ政經相斗てかの二人の女子にわけあつへき也、女子一期後政經領知すへし、野毛崎村は女房に讓所也、女房一期後ハ政經領知すへし、一期のほといさゝかのわつらいいたすへからず、且女房のことハをろかならすをもひ一人の子ももたれす候へハ母とをもひて心にかはすいとをしくあたなるへき也、たゞ道覺かあるとをもふへき也、但田一町在家一字相斗ていつれの所にもあれこまわう御前にをもひへきなり、仍讓狀如件、

弘安元年

一六九

弘安元年十月三日

道覺(花押)(9)

(註) 道覺、一般ノ寫本ニハ道受トアレドモ、内閣文庫影寫本ニヨレバ道覺ヲ正シトス。

弘安二年己卯 (一九三九)

十一月一日 是ヨリ先、宋僧祖元、北條時宗ニ招カレテ、來朝シ、建長寺ニ入ル。是日、長樂寺院豪、之ガ講ニ赴キ其ノ法嗣トナル。尋テ、祖元、長樂寺ニ至リテ慶懺ス。院豪、下野雲岩寺ノ顯日ヲ長樂寺ニ招キ祖元ノ教ヲ聽カシム。以後、二者ノ道交繁シ。

〔前住相模州巨福山建長興國禪寺勅證佛國應供廣濟國師行錄〕(續群書類從本)

弘安二年己卯、相陽平將軍遣使大宋邀無學、但於天童主巨福山建長寺、世良田長樂寺住持一翁曾入大宋、見徑山佛鑿禪師、與無學初爲法門兄弟、聞學祖入我邦曰、我昔在徑山、密聞祖元沙彌名也、既稔矣、其後元侍者聲名震號叢林、若得其人、寔我國之福也、迨乎學祖之福山入寺、一翁特往講好入室問答、機々相投、學祖鳴鼓上堂證據之由、是一翁遂爲學祖之嗣也。一翁年臘長於無學祖於是一翁拜請無學祖慶讚、長樂一翁與雲岩師(佛國國師)道誼素厚、書疏往來不已、以故一翁遣使馳書以招師(佛國國師)見無學祖

時宗、祖元ヲ遣フ

院豪、法嗣トナルニ參ジ、祖元長樂寺ニ來ル

顯日長樂寺ニ來ル

於長樂、其猶如睦州之撥臨濟參黃檗、雲峯之激發黃龍見慈明、嗚呼所以學祖之得師者、一翁之功居多也、師始詣世良田長樂寺、見佛光禪師、問云、從來佛祖如冤家、今朝觀面難迴避、不顧放身捨命處、請師下斷命手脚、光云、斷命刀子在你手裡、師曰、吹毛元不動、遍地是觸體、光云、門葛藤便詰問云、夾山所謂垂絲千尺意、在深潭雖鉤三寸、子何不道、當處下一轉語、師云、龍門真躍鱗、不隨漁人手、光云、你因什麼在醋甕裡着身、師振威一喝、光云、絲懸流水、浮定有無、乍麼生分賓主、師曰、一吸滄溟乾、光云、船子末後付夾山云、藏身處沒蹤跡、無蹤跡處莫藏身、作麼生、師曰、敗闕不少、光云、賞你大膽、放三十棒、師曰、爭奈棒頭在學人手裡、光云、回這棒頭打東福和尚、師曰、祖你不少了、殃及兒孫、師嘗受業東福和尚又一日因入室、光問云、馬祖陞堂、百丈捲席、意旨如何、師曰、一狀領過、光云、你因什麼向老僧鉢盂裡洗浴、師曰、和尚鉢盂百難碎、光呵々大笑云、也得々々、光示師法語云、提王庫刀、振塗毒鼓、正恁麼時、不可以言語造、不可以寂點通、不可以無心得、不可以有心求、所以道若有一法、過於涅槃、吾說即如夢幻、軒知箇事、非小根小智可得、而髣髴若英靈上士向空劫以前、不動一塵、不撥一境、直下橫身、荷擔一程、走三萬里、更不回頭、方可作吾家種子、若向言中取旨、句裡呈機、此是依艸附木精魅、不足道也、通常日、師真吾家好種草、初未識面、老漢因到長樂、炷香請益、將夾山見船子機緣驗之、機先顏能騰躍

弘安二年

也、有吾三十年前在先師會中、見解雖未精、許入妙要、且氣宇步驪、有衲子調度、吾囑之云、若要扶豎宗門、當堅守戒行、明如水雪、與解相應、無愧佛祖、是真扶豎宗乘也、勉之勉之、上古流傳方冊者、不在衆之衆寡、亦不在寺院之大小、道之靈驗、自然照曜天地、吾落筆處、汝既知之、若是東山左邊底、吾當別日分付、(以下佛光ト佛國トノ交涉繁シ)

(末尾ニ曰ク)時正長元年戊申佛成道之日、法孫比丘 妙祁謹誌之、

妙祁字叔京、絕海國師之高弟也、曾語人云、余聞耆宿之說云、佛光國師嘗云、我來搏桑、自得高峯一翁二子、而回鄉之念息矣、嗚呼佛國之於佛光、雖師資夙契、寔繇一翁之提獎也、

〔佛光國師語錄〕 卷九

長樂一翁長老書

院豪已ガ見解ヲヲ録呈シテ改テ元ノ元ヲ抹ク無準ニ就テ

院豪昔年參禮大宋徑山無準老師、問曰、宗門用工夫也、無師曰、工夫也得、無工夫也得、院豪成一頌曰、

工夫也得松元直、不用工夫棘自曲、榮悴頭頭無異、艷枝枝葉葉火中綠、

一日問師曰、心者名也、作麼生、是其體、師曰、作箇一問、是誰、又曰、會得麼、曰、不會、師曰、不會最親、又成一頌曰、

電光影裏扣玄津、會得分明不會親、一步驟然超百億、河沙諸佛腳跟塵、

一日問師曰、不假方便、直示一句、師曰、燒了二卷來、與爾云一句、曰、燒了來、師曰、燒了後作麼生受用、當時不覺舉手開合、師呵呵大笑、乃拈筆書曰、豪上座有向道之姿、又成一頌云、

二卷燒了總成灰、不覺手頭合亦開、萬事皆夢何日覺、驢兒未去馬兒來、

院豪杜撰見解、不敢隱藏、謹以錄呈、切望

慈悲改抹為幸、院豪九拜、申呈

建長堂上師兄和尚大禪師足下、

院豪頓首九拜、申覆

建長堂上師兄和尚大禪師足下、某茲者特來禮拜、仰荷寬慈、不以卑賤、特蒙于口私心萬感、但語音不通、不能細敘委曲、今託筆舌、略申大槩、伏念、某自少已來、志慕玄宗、撥艸瞻風、尋師訪道、為法忘軀、不憚艱勞、第天性昏蒙、徒費艸鞋、而後聞大宋徑山佛鑑禪師、法道大興、開甘露門、拯濟羣品、於此私心景仰、不勝踴躍、遂於(寬元二年)淳祐甲辰年、發志航海、梯山乃抵四明、徑詣徑山、禮謁佛鑑大禪師、再三扣問、特垂慈誨、直指徑截、機鋒峭峻、蒙昧莫測、其由、雖然向道之心、猶切猶深、繼而拜辭東還、佛鑑囑某、再出其言、叮嚀、其後再欲

寬元二年院豪入宋佛鑑禪師ニツク

院豪、祖
元ニ頌ヲ
呈ス

入唐以扣未聞之誨、不幸佛鑑已圓寂、不遂此願、今者天假大檀越投誠歸敬、遠請大和尚歸國、榮董巨福名山、振起叢林、提唱玄旨、學徒奔湊、士庶崇重、正是保社一新、法燈重輝、乃見佛鑑和尚再出世也、某不任感激、輒成一頌、謹用拜呈、師是大唐間世人、我儂日域一夢身、奇哉今日重相會、稽首和南、笑轉新

建長堂頭大和尚大禪師足下、院豪頓首九拜申覆

〔佛光國師語錄〕 卷九

十一月一
日院豪、
祖元ノ法
嗣トナル

長樂一翁和尚、在老師會中同住、彼彼不知、山楚到日本、主巨福、特垂訪備、道前後工夫辛苦之情、且云、我不習語言、拙於提唱、乞楚人證其是非、楚人因舉香嚴悟道偈、探之、翁乃大獅子吼、楚人升堂說偈、普示大衆、時弘安二年十一月一日、巨福住山無學祖元書

〔圓覺寺文書〕

長樂一翁在無準老人維會中同住、彼々不相知、四十年後、山野到日本、主巨福山、翁特々垂訪備、導前後工夫辛苦之情、且云、不提唱、乞野人證其是非、野因舉香嚴無學翁書（佛光國師語錄）（印）

〔佛光國師語錄〕 卷三

證擴長樂一翁上堂、如來正法眼、非今亦無古、父子親不傳、千歲密相付、香嚴擊竹、偈幾

人錯指注、昨朝問長樂、直答無勝語、如人白晝行、不用將火炬、又如香象王、擺壞鐵鎖、去

摩醯正眼開、大搥塗毒鼓、普告大衆知、說偈作證據、公驗甚分明、鵝王自擇乳

〔佛光國師語錄〕 卷九

對衆開長樂和尚嗣法書、上堂、斷臂立庭前、爲求無病藥、鈍斤聊一揮、立去鼻端聖、萬木欣欣兮、大地春回、滄波浩浩兮、百川潮落、良久、機先一句、已付長樂

〔佛光國師語錄〕 卷五

建長普說 長樂豪長老請慶懺本寺 普說

師祝香罷、就座索語云、垂絲萬里、要見鯤鯨（中略）進云、只如長樂和尚成此大利（中略）故

蒙太守總管元帥招住建長、自慚無道無德、有辜日本一國期望之意、自愧無可應酬、四來學子、只單單將佛祖遺下金剛圈、栗棘蓬、布施學者、是則言是、非則言非、不敢看人情、

假借於人、前日方丈特來相訪、山僧將香嚴擊竹話驗之、老子見到參到、直下如荆棘林中、將快刀、一時斬斷、挺身出來、與山僧相見、山僧只得言是、今日辨香與山僧拈出、乃見爲法之重、忘其形骸、直有斷臂之風、又承見招、慶懺上剎圓滿、陞座之次、承爲法證明、不

勝感激、又承諸位官人、諸位大檀越、諸多善男信女、四遠諸山、諸庵、泪在家菩薩、同共垂訪、同聽般若、非是今日之事、歷劫以來、與見前十萬大衆、有大因緣（中略）

弘安二年

祖元長樂
寺ニ來ル

長樂寺落
成

便知今日一翁長老施三昧力、運廣大心、共四遠貴人、四遠檀信、成就此大道場、同一手作、同一眼見、同一願力、同一喜捨、與釋迦老子然燈如來、有何各別、活鑿鑿地圖地下一本有也轉轆轤地、直是明妙、直是現成、自是諸人昧卻本光、迷卻正路、自信不及、終日出入此大道場中、而不自治、終日坐臥此大道場中、而不自覺、老僧今日為諸人、開各各自己道場、各各自己之佛、各各自己光明、各各自己寶所、各各識得自己寶所、更要向上著一隻眼、與建長老漢相見、且道如何相見、若也不會、向佛事門中、回向去也、上來講贊無限良因、先願、皇國永固、萬民樂業、次願、四遠檀信、福慧莊嚴、更願此大道場、永無魔障、佛法興隆、三寶不斷、次願、三途苦趣、六道衆生、乘此善因、咸皆解脫、四恩普報、三有遍滋、法界有情、同圓種智、結座、如來出現世、人天皆得度、上至有頂天、下至閻浮界、隨身皆宮殿、處處各不同、出自本願力、亦是人天施、舉足為道場、功用難思議、如今正末法、比丘各貪求、各各營己利、無有正信者、希有大比丘、正信有願力、住此三十年、重興此梵刹、龍天皆歡喜、稽首咸贊嘆、此是末世中、菩薩示出現、巍巍大寶刹、鐘梵警幽冥、四生與六道、咸承此法施、我從中天來、天人咸勸我、坐此妙覺場、一音演說法、四衆咸景仰、華雨亂繽紛、從空而亂墜、普震大法雷、普施大法雨、普潤一切衆、普長菩提芽、回茲功德利、同入法性海、人人超彼岸、普請成正覺、長樂次日衆僧復請、普說、

院豪長樂寺ニ住シテ三十年スヲ再興ス

師祝香罷就座、索語云、(以下)

〔佛光國師語錄〕

卷七

示院長老

古人云、蟻蚋蟲一切處可泊、獨不能泊於烈燄之上、智慧人一切處可泊、獨不能泊於般若之上、何謂如此、中略長老出於大貴之家、而能趣向此門、又是長樂之子、老僧到此日、入夜引衆求請益、老僧將父母未生前一著子、拈出似之、長老機前非且蹉了、老僧亦乃蹉卻自己、再三扣之、但只茫然、不知是藏鋒耶、是真有礙耶、吾不可得而曉、適間因令尊丈問、及聞見覺知、鑒覺應變處、下工夫事、吾寫圓覺經中一語似之、無知覺明不依諸礙、永得超過礙無礙境、就此推門入白、本來面目、不用參扣、自然分曉、密密受用、處處方圓、那時方可與汝提、向上事也、汝今向吾言中求、水中捉月、若向言語外求、接竹點月、畢竟那一句中、與吾相見、汝一番悟去、老漢為長老說阿字法門、

弘安三年庚辰 (二九四〇)

二月十二日 源輔村、上野長樂寺ニ新田庄内今井堀内御堂地其他ヲ寄進ス。

〔長樂寺文書〕

弘安三年

院豪ハ貴族出身

長樂寺 寄進

今井堀内御堂地

右至于子々孫々未來際奉寄進狀如件

弘安三年 庚辰 二月十二日

源輔村 在判

〔長樂寺文書〕

世良田長樂寺領所目錄事（貞治四年七月五日ノ條ニ收ム）

〔註〕 弘安十年十一月三日ノ條參照

六月初旬 是ヨリ先、三月二十九日ヨリ院豪病患ニ犯サル。院豪、祖元トノ間ニ音問甚ダ懇ナリ。六月初旬、院豪、寺ヲ退キ、寺務ヲ元空ニ接續セシム。是頃、祖元、江田五郎（新田氏ナ）ニ偈ヲ與フ。

〔佛光國師語錄〕

卷九

院豪咨目百拜申復

建長堂頭和尚尊前、院豪前日僕歸、通辱損答、焚香捧讀、如侍左右、仰荷眷念、感激良多、昨者錄去抽語、極爲不文、但爲法之故、忘其乖疎、今蒙稱美、過分、令人愧惡不少、又承普說六冊、尤深、喜日工後、多印幾本、布施善信、四部衆、爲好院豪、自於前月廿九日夜間、忽陰疾發作、痛楚不可忍、日增一日、飲食無進、第此地無醫人、亦無藥餌、至今不能調理、

普說六冊ヲ授ク

前月廿九日ヨリ病ム

長樂寺ニ百有余人安居ス

看來此回不能復初、抽語萬乞、慈悲早賜改正、欲得一日無復遺恨矣、弊寺今夏安百有餘人、常住本無長產、只憑十方檀信、亦告龍天打供、但臥病不能陪衆、特煩悟首座、歸前版督衆、喜得屏就、乃感道義、此亦出於巨甘之所及也、明兄在此安樂、但寂寞難堪、爾適聞鏡藏主上京、恐非所宜、未聞更冀以道法崇重大副後學之望、病中不覺縷縷伏乞慈察、

四月十六日

長樂住持院豪咨目百拜申復

〔佛光國師語錄〕

卷九

院豪咨目拜覆

建長堂頭大和尚尊前、院豪自入病鄉、將近月日、飲食日減、無復生意、蓋亦老景使之然也、中間疊承誨帖、益增不敏、茲者仰荷眷念、特賜妙藥、且服幾日、如何亦信造物、適問愚兄等上京、甚非所宜、左右豈可無一人親隨、萬一有緩急、特執能趨承前後、爲之病懷轉使不安、今明兄暫且上去、意謂特爲問訊、可便歸如何、留則須看時宜、而裁度、楚語特勞、批抹、不勝感激、至所留餘語、更加斤削、庶幾早得、揆成小冊、病中不及子細、凡事明兄必能剖露、伏乞慈察、

四月廿四日

長樂住持院豪咨目拜覆

弘安三年

〔佛光國師語錄〕

卷九

院豪頓首九拜上

建長堂頭和尚尊宿大禪師院豪久不拜一箋少伸寒溫之恭惟是寸心未忘朝夕思渴中忽辱誨帖尊體安和為喜甚幸院豪如今鄙體少健和尚靈藥遺貺始知靈驗未伸謝悃已下

展讀太守問病信使病體如服萬金之良藥也感佩無已光侍者病不知什麼病圖知土風些子別喫物不好作病苦哉和尙親蹟三佛事弊寺寶物珍之寶之大貝南金不足為此寶也迫夏已熱未得參見臨書拳拳仰不宣

六月九日

長樂比丘院豪頓首拜復

〔佛光國師語錄〕

卷九

院豪咨目再拜覆

建長堂頭大和尚尊前院豪老病困臥謝遺藥餌日久政功懷仰之中忽辱行者到來捧出親染燒香奉讀慰誨勤勤如待左右病懷恍然如醒且喻象馮迂臨垂訪又得一番瞻覲極深感慰然而正當暑中深慮跋涉之勞今已駐轅亦便於壽養院豪重念頑微之迹濫廁空門每懷佛祖出興之由不敢自墮即以斯道為己任未嘗敢自欺也不謂天假前

年造詣壽室一言之下機感相投暢快平生喜不自勝追思因緣豈其偶然哉乃誓持寸

心少報高天之德其奈何年老無所堪任而今又如斯此心慊然今月初間謝寺事歸塔

頭待盡即以院事令空首座接續寺務亦是老和尚子孫也第恨山川遼遠不得再拜慈

顏永決此生極不滿意去年令愚侍者垂喻之事嗣後不蒙指麾不敢遽然極是在懷如

欲舉此可與斷岸商議蓋一家事必以濟事虜事獲捷甚喜惟望深護法體俯為人天久

住世間提攜衆生賑誘含識俾祖風慧命長得常住以副末學之望伏乞 慈察

六月廿四日

院豪咨目再拜覆

〔佛光國師語錄〕

卷九

付衣一翁長老

佛佛授手祖祖相傳堂堂密密此土西天一翁長老一肩擔荷求人去更看花發菩提樹

大法翁既荷負千萬流通佛祖授受間不容髮出紙索書因書此以示將來云時弘安三

年中夏無學翁祖元書

〔佛光國師語錄〕

卷七

示長樂尼院長老

大凡做工夫須是絕卻無量劫來業識根本方做得出塵事業若絕不得枉喫辛苦何為

弘安三年

如此豈不見世尊云持戒不潔縱學佛法雖經千劫不得成就譬如蒸砂欲得成飯不可得也蒸過百年只是熱砂不可爲飯沙非飯本故也院長老吾之孫也戒行高潔吾甚敬之勉進斯道何患大事不成耶

〔佛光國師語錄〕卷八

長樂一翁長老請讚

七回八凸三尖五露不說此地無金剛道市中有虎汝不識我不識汝甜瓜徹底甜苦瓜連根苦(中略)

一翁二

萬象之中獨露身不知何物可爲隣乾坤坐斷頭如雪今古應無第二人滿頭髮載千年雪鼻孔堪岩眼搭睡只在萬人叢裡立萬人叢裡沒人知

〔佛光國師語錄〕卷九

偈頌

與江田五郎

勤起天驄事若何風塵通處偃干戈要爲無上覺王將先斬心中五陰魔

砂金

院豪

大唐日本古今信藏在囊中經幾年今日當陽拈出去河沙功用絕塵緣

綿襖

同

工夫綿密顯家風不在針鋒一線通寒夜全提輕搭著起居動靜在其中

〔註〕江田五郎新田江田氏ノ人タル事確實ナラザレドモ院豪ノ偈ト竝ベタル

ヨリ見テ長樂寺ニ深キ關係アル武士ナルベシ。

〔禪利住持特籍〕

上野州世良田山長樂寺歷代

第三世一翁諱院豪諡圓明佛演禪師品無學元正嘉二年戊午入寺歲四十九住院二十四年弘安三年庚辰退院(下文明年八月二日條ニ收ム)

十月十七日 東福寺ノ辨圓寂ス。

〔聖一國師年譜〕(弘安三年庚辰師(聖一)七十九歲(中略)(七月十日)投筆而化(中略)度

門弟子無慮千萬人嗣其法以據一方者(五人)月船琛海(十乘)播陽人受密灌弘於野

州諡法照禪師(中略)直翁智侃(正智)上野州人初參隆蘭溪入宋然後嗣法於師諡佛印

禪師(中略)無住道曉(房一圓)在尾州長母寺有沙石集聖財集行于世

弘安四年辛巳(二九四二)

三月一日 元空長樂寺住持トナル。

弘安四年

一八三

〔禪刹住持籍〕 上野州世良田 山長樂寺歷代 第四世斷岸諱元空、扁一翁豪、弘安四年辛巳三月一日入寺。

六月十五日 院豪、長樂寺ノ文書注進狀ヲ作製ス。

〔長樂寺文書〕

注進文書惣日記

一女塚御寄進狀

(寛元四、十二、十五、参照)

一上江田堂垣内寄進狀

(新田義季寄進狀)

一小角殿重安塔狀

(建治三、十二、廿三、参照)

一檀供寄進狀修正料

(康元二、二十、参照)

一世良田宿在日記

(頼氏寄進狀)

一塔頭寄進狀并金津殿寄進狀

(寛元三、五、九、参照)

一二宮文書アマタ□フ

(實治元、七、十四、参照)

一入道御料御文

(榮朝讓狀)

一律師御與讓狀

右文書注進之狀如件、

弘安四年辛巳六月十五日 院豪(花押)⁽¹⁰⁾ (文永九十一、十八日ノ花押ト異ル)

永仁四年二月一日

三河次郎入道殿御寄進之狀一通

八月二十一日 長樂寺院豪、寂ス。

〔禪刹住持籍〕 上野州世良田 山長樂寺歷代

第三世一翁諱院豪、諡圓明佛演禪師、(中略、弘安三年條ニ收ム) 弘安三年庚辰退院、同四年辛巳八月二十一日示寂、壽七十二、塔于正傳菴。

〔東福第八世法照禪師十乘坊行狀〕 于時弘安四年辛巳八月廿一日、上野長樂

一翁迁化。

〔佛光國師語錄〕 卷三 長樂一翁訃音至上堂、火裏汲清泉、已七十二年、憔悴體身去

觸、破於大千、黃梅渡口、雞足山前、甜如水蜜、苦似黃連、贖物現在、父子不傳、過鋒疾、一

步在先、正宗滅卻、瞎驢邊、雖然五逆、不成冤。

〔無學禪師行狀〕 (佛光國師語錄卷九)

度弟子、以心印心、以器傳器、三百餘人、拔其尤者、建長高峯日、長樂一翁豪、(下略)

〔佛光禪師行狀〕 (佛光國師語錄卷九)

弘安四年

大日本國山城州萬年山眞如禪寺開山佛光無學禪師正脈塔院碑銘、
前略師與門弟子高峯日規菴圓一翁豪等皆有機緣語句備于各錄、

〔佛光國師語錄〕 卷十 佛光禪師塔銘 (中ノ)

度弟子以心印心以器傳器三百餘人拔其尤者建長高峯日師云、今將無學先師法衣一
頂授、遇常顯日長老、流、通
法道、接續正宗、弘安四年九月三日、福山老僧、又云、老僧欲見汝、一面而別、山川阻隔不日、
如願、香先師法眼、法衣已分付汝、汝廣求本心、爲吾流通、報佛祖恩、是吾末後之囑、珍重、
長樂一翁豪師證、據長樂一翁、上堂云、如來正法眼、非今亦非古、父子親不傳千載、密相付香嚴擊竹
偈、幾人錯指注、昨朝問長樂、直答無語、語、如人白晝行、不用將火炬、又如香象王、掘、壞
鐵鎖、去、摩、正眼、開大、塗毒鼓、普告、大家、
知、說、偈、作、證據、公、驗、甚、分、明、鶴、王、自、擇、乳、

〔圓太曆〕 十五 一翁和尚禪師號宣下事

勅式觀元始、眇觀玄風、梁武帝之褒初祖也、加以追崇、唐憲宗之南曹也、贈以諡號、溫斯
濫觴、宣資准的、爰一翁和尚者、開設見性成道之直路、弘厥西來東漸之法源、拈花傳句、
渡葦問跡、寔是釋門樞鍵、禪宇棟梁者也、厥人既去、宗不在並乎、仍宣傍之號、諡曰圓明
佛演禪師、觀應元年七月廿四日

弘安五年壬午(一九四三)

三月十日 里見時成(鳥也)新田庄鳥山郷内ノ田宅ヲ妻念空ニ讓ル。

〔長樂寺文書〕

圓明佛演
禪師

禪師號宣
下アリ

新田八反

御前
御前

ゆつりわたす、かうつけのくにつたのしやうとりやまのかうのうち、女はう
にゆつりわたすさいけの事、

一とうない入道かさいけ一う、田一丁七反、しんでんはちたんをくわうるちやう
也、

一さくら井の二郎入道かさいけ一う、田二丁三反、

一にへいたいふかさいけ一う、田一丁七反、

一三郎大郎かさいけ一う、田四反、た、し女はう一こののちいたうしのやしきの

みなみをもてにうちつくりの田一丁をそゑて、まこのねをい御せんに、女はう

一この、ちのゆつりたふへく候、すゑ、まていらんをもし候はんこまこに

いたては、時成かあとを一ふんもちきやうすへからす、このうゑをそむくとも

からあらは、かみの御はからひたるへく候、又ねをい御せんのやしきは二郎入

道かさいけをいさいけにするに、よて御くうしあるへからす、もとのことくと

うない入道かさいけに田六反、さくらいのにへいたいふかあとに田八反、これ

よりほかはいかなる御くうしをちきたるともゆめ、つとむへからす、仍狀

如件

弘安五年

弘安五年 三月十日

源時成(花押)(11)

(註) 建治二年十月一日、正應四年十二月二十一日ノ條參照、

十一月十二日 尼眞如(ナルベシ)其ノ女子藤原土用王御前ニ、新田庄内成塚、菅鹽、金谷、新島、下總藤心、讚岐吉野郷等ノ土地ヲ讓ル。

〔正本文書〕

(讀) 紙想 女子藤原土用王御前所

(上野)

(下總)

(讚岐)

紙想 乃御せんそさうてんの所りやうたる(あいたか)親父ならひに母堂祖母のゆつりしせうもんらをあいそへて、一子たるによりて、とよわう御せんになかくゆつりわたし(ところか)紙想しちなり、さらにたのさまたけ紙想るへからす、くうしにおいて(あ)せんわいによつてたの(まか)さをいたすへし、よつてゆつり(あ)紙想如件。

紙想 岐國よしの、かう、

紙想 乃御せんそさうてんの所りやうたる(あいたか)親父ならひに母堂祖母のゆつりしせうもんらをあいそへて、一子たるによりて、とよわう御せんになかくゆつりわたし(ところか)紙想しちなり、さらにたのさまたけ紙想るへからす、くうしにおいて(あ)せんわいによつてたの(まか)さをいたすへし、よつてゆつり(あ)紙想如件。

紙想 乃御せんそさうてんの所りやうたる(あいたか)親父ならひに母堂祖母のゆつりしせうもんらをあいそへて、一子たるによりて、とよわう御せんになかくゆつりわたし(ところか)紙想しちなり、さらにたのさまたけ紙想るへからす、くうしにおいて(あ)せんわいによつてたの(まか)さをいたすへし、よつてゆつり(あ)紙想如件。

弘安五年十一月十二日 尼眞如 在判

弘安五年十一月十二日

尼眞如 在判

(註) 寶治二年八月八日及ビ弘長二年八月廿八日ノ時兼ノ讓狀、嘉祿三年十二月日平能胤ノ讓狀ヲ參照、

月日平能胤ノ讓狀ヲ參照、

正和四年八月及建武元年十二月二十一日ノ條參照、

是歲 長樂寺斷岸元空寂シ、月船琛海(法照)長樂寺ニ入ル。住院スル事、二十餘年、教化スル所廣シ。

〔東福第八世法照禪師十乘坊行狀〕

師諱琛海、字月船、勅賜法照禪師、寛喜三年

辛卯、生於播州賀古郡菅氏之家、氣骨不凡、早求出家、薙髮於本郡書寫山、而作大僧、徧

歷大小講肆、靡於教乘而不該練、最精於密乘、重歸書寫山、獨廬于本寺西、徧以禪觀爲

專門、書峰一衆推尊而師事焉、獲巨益於顯密、而爲弟子者衆、由是道聲聞于帝里、文永

天皇署權法眼上人、師視名利如脫屣、遂棄而逃、竊念東遊、一錫飄然、抵于上野長樂一

翁豪老席下、豪聞師名、喜而相迎、待以上賓禮、然後製黃衣、黃伽梨、以易師之教服、而館

于方丈偏室、開教禪二門、且夕法戰、師於禪陣、終成降將、而相從數稔、日臻玄奧矣、屬者

東福聖一續佛鑑正統、煽化於洛陽、師聞臨濟宗旨、迥出常情、罵佛呵祖、而渴心日切、思

一瞻禮、乃辭田阜、徑登惠峰、聖一々見而便契、不勞參究、然服勸數歲矣、于時弘安四年

弘安五年

一八九

寛喜三年

長樂寺ニ

至ル

聖一國師

ニ就ク

斷岸示寂

長樂寺ニ住持ス

赤城練行
受戒法ヲ

日光

新田氏草創篇

一九〇

辛巳八月廿一日、上野長樂一翁迂化、翁之上足、斷岸空老繼踵、明年壬午、斷岸亦寂、於此長樂虛席、關東副元帥平公素慕師有德、乃備禮延以長樂、師兼命住持、一香聊爲東福國師拈之、當此時、叢林禮典粗行、四方學者輻湊、禪席講筵盛于一時、相陽法窟尙推之古刹、况其餘耶、粵赤城山有一練行人、三十餘年、影不出山、木食澗飲、冰雪不凍、有神異、儘與無數天狗友善、所謂天狗者、魔鬼也、然不好恠力、唯務忍進、適師涉赤嶠、從容於靈區、練行人出迎拜足、下曰、弟子仰師道德者久矣、然有願、故不下此山、幸而見降神足、是我千載一遇也、願受戒法、而結勝因、師乃授木叉并衣盂、號曰了儒、師歸寺之後、或時朝嗽未三竿、儒忽爾而來、造于方丈、師問曰、從何處來、曰、赤城、何時離彼、曰、今晨、師但咲而已、儒迺拜而去、或一月兩月之交、來省于師、率皆早旦而到、上野一易學師之道者、稱遠城門徒、以彼儒翁爲祖、儒之肖像、現今在赤峰、時人尊以如神也、野之日光山行密灌、請師而爲大阿闍梨、壇上有一鈴珠、異於常、其音纔出、衆鈴皆瘖、師問鈴來由、有一耆年對曰、昔曾此山有猛烈獵者、日夜周旋於山中、或時有鈴聲、響應幽處、獵者尋聲而臻、果有異僧、手握一鈴而坐磐石上、見獵者來、便起逃去、獵者隨後追、僧捐鈴走、竟不知所往、獵者得之、還以獻寺之管首、々喜感曰、吾山之寶也、藏之神庫、多經年所、爲師赴於茲會、特告于神而出之、非是容易、於是師抱鈴、嘆曰、寔希有不可思議也、老僧這回臨此法筵

河越氏ニ歸依サル

大黒天
禪教ヲ授ク
那須長樂
門ト稱ス

一月船ト事
一山

忝居師位、固是夙德之所感也、然則與用他无量珍寶而布施、不如用一箇寶鈴、布施老僧、言畢懷鈴歸、衆皆無語而相視而已、今在普光、並于法照三衣用寶之、有年大饑、或一粥而无飯、或一齊而鉄糜、一衆既失色、然師不以爲慮、轉勵行道、武州平氏河越者、適武門穎師也、先是、創東永精舍、請師以爲開山始祖、加以受衣法、執弟子禮、一日有一冠者、而廣且黑、身短腹大、而異於常人、到於河越之門、而報之言、長樂和尚使也、平氏接之、問爲何、來、冠者答曰、今年穀貴、州民欠供、是故寺乏於二時、緇徒將欲破夏而散、檀越豈曰、无意於此乎、答曰、隨分薄助、斯乃弟子之所忻幸也、冠者乃起謝曰、善哉、檀越謹領尊旨、言訖出河越、即馱米一百石、送之於長樂寺、頓補缺典、一衆皆謂、夫冠者是當寺所安奉之大黒天也、師默而不言、夫師居長樂二十年、於中間度人、不可勝數也、扣禪之者示禪、問教之者說教、請戒之者授戒也、時高峯佛國禪師居野之雲岩、人指那須長樂稱二甘露門、(下文延慶元年六月二十六日條ニ收ム)

〔禪刹住持籍〕上野州世良田山長樂寺歴代 第五世月船、諱琛海、諡法照禪師、扁聖一、弘安五年壬午入寺、住院二十餘年、(下文ハ延慶元年六月二十六日條ニ收ム)

〔一山國師語錄〕卷上 兼住相模州瑞鹿山圓覺興聖禪寺語錄
謝長樂月船和尚并請知客、小師上堂、百丈遭喝耳聾、怨憎會苦、臨濟蓄枝三頓、冷債難

弘安五年

一九一

還、趙州探水平地風波、南泉撫背徒成多事、雖則啐啄同時、箭鋒相拄、要且主賓禮缺、父子情乖、圓覺只據見定、且要恰恰相宜、拈拄杖卓一下云客來無茶喫、蓋湯備禮儀、

弘安十年丁亥 (一九四七)

十一月三日 源資村(輔村ト)、長樂寺ニ新田庄上今井内道忍跡ヲ寄進ス。

〔長樂寺文書〕

上今井内道忍跡屋敷堀内、奉寄進世良田長樂寺事、仍狀如件

弘安十年十一月三日

源資村在判

〔長樂寺文書〕

世良田長樂寺領所目錄事(貞治四年七月五日ノ條ニ收ム)

〔註〕 弘安三年二月十一日ノ條參照、

正應四年辛卯 (一九五二)

十二月二十一日 幕府、里見時成ノ妻念空ヲシテ、亡夫ノ讓狀ニ任セテ、新田庄鳥山、越後波多岐庄内八馬、今泉、深見、倉俣等ノ田宅ヲ領知セシム、

〔長樂寺文書〕

可早以尼念空、領知上野國新田庄鳥山内田在家、越後國波多岐庄八馬、今泉兩村

内田島在家、同庄深見、倉俣田島在家等、各名子員數并事、子細載讓狀

右任亡夫時成、建治二年十月一日讓狀、弘安五年三月十日三通讓狀等、可令領掌之狀、依仰下知如件、

正應四年十二月廿一日

陸奥守(北條宣時) 平朝臣(花押)

相模守(北條貞時) 平朝臣(花押)

〔註〕 建治二年十月一日、弘安五年三月十日、永仁五年六月十一日ノ條參照

永仁三年乙未 (一九五五)

十二月二十一日 幕府、太田貞泰ノ上野佐貫庄上中森郷ノ田宅ヲ領掌スルヲ許可ス。

〔長樂寺文書〕

永仁四年丙申 (一九五六)

二月一日 新田教氏(世良田三河次郎)、長樂寺ニ寄進ス。

〔長樂寺文書〕

永仁四年二月一日 三河次郎入道殿御寄進之狀一通(全文ハ弘安四年六月十五日條ニ收ム)

〔註〕 三河次郎入道ガ教氏ナル事、尊卑分脈、長樂寺源氏系圖、卷外長樂寺系圖ニ

ヨリテ知ラル、

永仁四年

永仁五年丁酉（二九五七）

六月十一日 里見時成ノ妻念空及孫慈圓、越後波多岐庄深見、及比上野新田庄鳥山ノ田宅ヲ長樂寺ニ寄進ス。

〔長樂寺文書〕

せらたのちやうらくしの御てらへよせまいらするさいけの事、
ところほゑちこのくにはたきのしやうのうち、ふかみのうち、（兵庫カ）いこんのかみ
かさいけ一う、又な（ふカ）かむかみのとうさうしかあと、このにけんのさいけにはた
はたけ一ふんをよけへからす、このうへに、かいかは、ありやなきのしたこせの
かわをそへたり、

みきくたんのたさいけにをきては、ゑいたいをかきて御てらへよせまいら（せ脱カ）をい
ぬ、たのさまたけあるへからす、もしいらんをもいたさん人にをきては、あましゑ
んか（里見時成カ）を、ちのさためをくいましめのしやうにまかせて、上の御はら（か脱カ）ひたるへし、
た、しこかね井殿、一このうちなり、よつてしやうくたんのことし、

ゑいにん五ねん（慈圓）のとの 六月十一日 しゑん在判

ねくう在判

尼慈圓
祖父時成
故金井殿

〔註〕 正應四年十二月二十一日ノ條参照。

〔長樂寺文書〕

せらたのちやうらくしの御てらへよせまいらするたさいけの事、
ところほかうつけのくに、つたのしやうのうち、とりやまのかうのうち、さ
くら井の二郎にうたうかさいけ一う、たにちやう三たんなり、
かのたさいけにをきては、ゑいたいをかきて御てらゑよせまいら（カ）するところな
り、た、しこかね井殿、一このうちなり、もしいらんさまたけをいたさん人にを
きては、あましゑんか（里見時成カ）を、ちのいましめのしやうにまかせて、上の御はからひた
るへきしやうくたんのことし、

ゑいにん五ねん（慈圓）のとの 六月十一日 しゑん在判

ねくう在判

〔長樂寺文書〕

〔註〕 觀應三年三月十一日、貞治四年七月五日、
日明徳三年八月十一日、條ノ目錄三通

〔註〕 弘安五年二月十日、正應四年十二月二十一日ノ條参照。 尼慈圓トハねを
い御前ノ事ナルヘシ。

永仁七年・正安元年（四月二十）己亥（二九五九）

永仁七年

八月十一日 新田家時(世良)ノ遺言ニヨリ、其ノ父教氏(沙彌)、武藏比企郡南方將軍澤ノ田三段ヲ燈明用途トシテ長樂寺ニ寄進ス。

〔長樂寺文書〕

新田家時

武藏國比企郡南方將軍澤郷内、爲燈明用途田參段、任家時申置之旨、所奉寄進世良田御寺也、若於致違亂之輩者、永可爲不孝之仁、仍寄進之狀如件。

正安元年八月十一日

沙彌靜眞 在判

〔註〕 靜眞ハ世良田教氏ナル由、長樂寺源氏系圖、卷外長樂寺系圖ニ朱書セリ。

十一月是月 幕府、山名盛康ヲ使者トシテ、信濃中野西條ノ田地ノ事ニ關シテ教書ヲ發ス。

〔市河文書〕

市河新左衛門尉盛房申、信濃國中野西條内田地等事、(中略)正應三年并去年九月、雖被成御教書、猶以無音、爰幸重當參之間、同十一月以奉行人齋藤九郎兵衛尉基連、山名下野權守盛康、使者重下御教書之處、(中略)

正安二年三月三日

陸奥守平朝臣(北條宣時)花押

相模守平朝臣(北條貞時)花押

正安二年庚子 (二九六〇)

是歲 上野長樂寺ノ月船琛海、播磨書寫山ニ招請セラレテ灌頂ヲ行フ。

〔峰相記〕

亦正安二年奉(奉カ)

比、上野世良田長老法照禪師(書寫山)請ジ下ス也、一山ノ衆徒受者ニテ灌頂ヲ行ハル、受者ヲ二手ニ別テ、隔日三摩耶戒、自講堂舞臺ヲ經テ別(別カ)ヲ引キ、常行堂ヲ道場ニシテ優童三人蓋ヲサシ、受者四十餘人伽陀ヲ頌シ、前後左右ニ相從フ、供奉ノ大衆庭上ニ連リ、見物ノ上下堂下ニ群集ス、講堂ニ正覺壇ヲ構ヘ、兩夜灌頂、萬人結緣ス、自國他國貴賤上下往詣道ヲアラソヘリ、如此八十餘人一度ニ灌頂ヲ遂ル例希レナリ、殊勝ノ見物無雙ノ法會也。

正安三年辛丑 (二九六一)

八月二十五日 山名俊行、同義俊、謀反ノ疑ニヨツテ斬ラル。

〔尊卑分脈〕

(系圖部)
(ニ收ム)

乾元二年、嘉元元年(八月五)日改 癸卯 (二九六三)

五月六日 僧了見、上野上佐貫庄飯塚郷内ノ地ヲ長樂寺ニ寄進ス。

〔長樂寺文書〕

德治二年丁未 (二九六七)

二月十一日 源成經(烏山カ)新田庄中今井郷内ノ地、五反半ヲ大舍人氏女ニ賣却シ、一丁一反ヲ長樂寺ニ寄進シ、尋デ又、五月二十九日、同地一丁四反半ヲ武田三郎太郎ニ賣却ス。

〔長樂寺文書〕

有要用賣渡永代島地事。

合伍段半、直錢拾柴貫五百文者、万雜事實也。

世良田宿
四日市場

□(右カ)島地者、上野國新田庄中今井郷内、成經知行分、世良田宿四日市場北竝堀籠内、半分定五段半於、依爲相傳私領限永代、所賣渡大舍人氏女實正也、聊不可有違亂煩、仍爲後日證文狀如件。

德治貳年二月十一日

源成經花押⁽¹²⁾

〔長樂寺文書〕

上野國につたのしやう、中いま井の内、せらたの四日市のきたの野、島壹町壹反を、本しゆおはのゆいこんにまかせて、せらたの長樂寺へ万雜之事をちやうしてくゐしんしたてまつる狀如件。

得治二年大才丁未二月十一日

源成經 在判

本主伯母
ノ遺言

武田三郎
太郎ニ賣
ル
假家郷

〔長樂寺文書〕

よう／＼あるによてうりわたす上野國新田しやう中いま井のかうのうち、せらたのすくのきたに、ほりこめのうち、ひんかしにそへてはたけ五反半、ならひにきたにはたけ九反、あはせて壹丁四反半、なりつねかさうてんのしりやうたるあひた、ゑいたいをかきて四十貫、たけたの三郎大郎殿、うりわたすところしち也、もしかの處いらんさまたけあらば、なりつねかちきやうふん、をなしきしやうのうち、いゝつかのかうのうち、おなしほとのかかりをたてかへ候へく候、よてうりけんのしやう、くたんのことし。

とくち二ねん五月廿九日

源成經 在判

〔長樂寺文書〕

(明德三年八月十日ノ條ニ收ム)

(註) 成經ノ系不明ナレド、長樂寺源氏系圖ハ時成ノ子經成ニ、成經也、作經成蓋訛ト朱ノ傍註ヲ附セリ。

十月九日 是ヨリ先、月船琛海、長樂寺ヨリ京都東福寺ニ遷リ、鑑堂大圓、長樂寺ニ入ル。是日、大圓、長樂寺ノ文書注進狀ヲ作製ス。

〔禪刹住持籍〕(東福第八世法照禪師十乘坊行狀) (延慶元年六月二十六日、及同十月十八日ノ條ニ收ム)

〔長樂寺文書〕

注進 文書惣日記

一翁和尚文書注文一通

舍利一粒、納寶篋印塔

將軍家御教書一通

性仙房一丁田寄進狀一通

岡部三郎殿寄進狀一通

新田三河孫太郎殿御寄進狀一通

慈圓御房御寄進狀二通、并金井殿御（永仁五年六月十日條ニ收ム）消息二通

中條田寄文一通

中今井一丁島寄文

衆寮太子香呂一ヶ銀

伊勢大神宮神人狼藉停止狀一通

右注進狀如件

德治二年丁十月九日

大圓（花押）(13)

一翁院豪
寶篋印塔

岡部三郎
新田三河
孫太郎



發リヨ内境宮照東地講寺樂長月九年二十和昭
光普、ルラセ見殘モ忍骨器陶形瓶、ルラセ堀
(照參頁七二二) リナ址處

銘石蓋撰募海深

七一

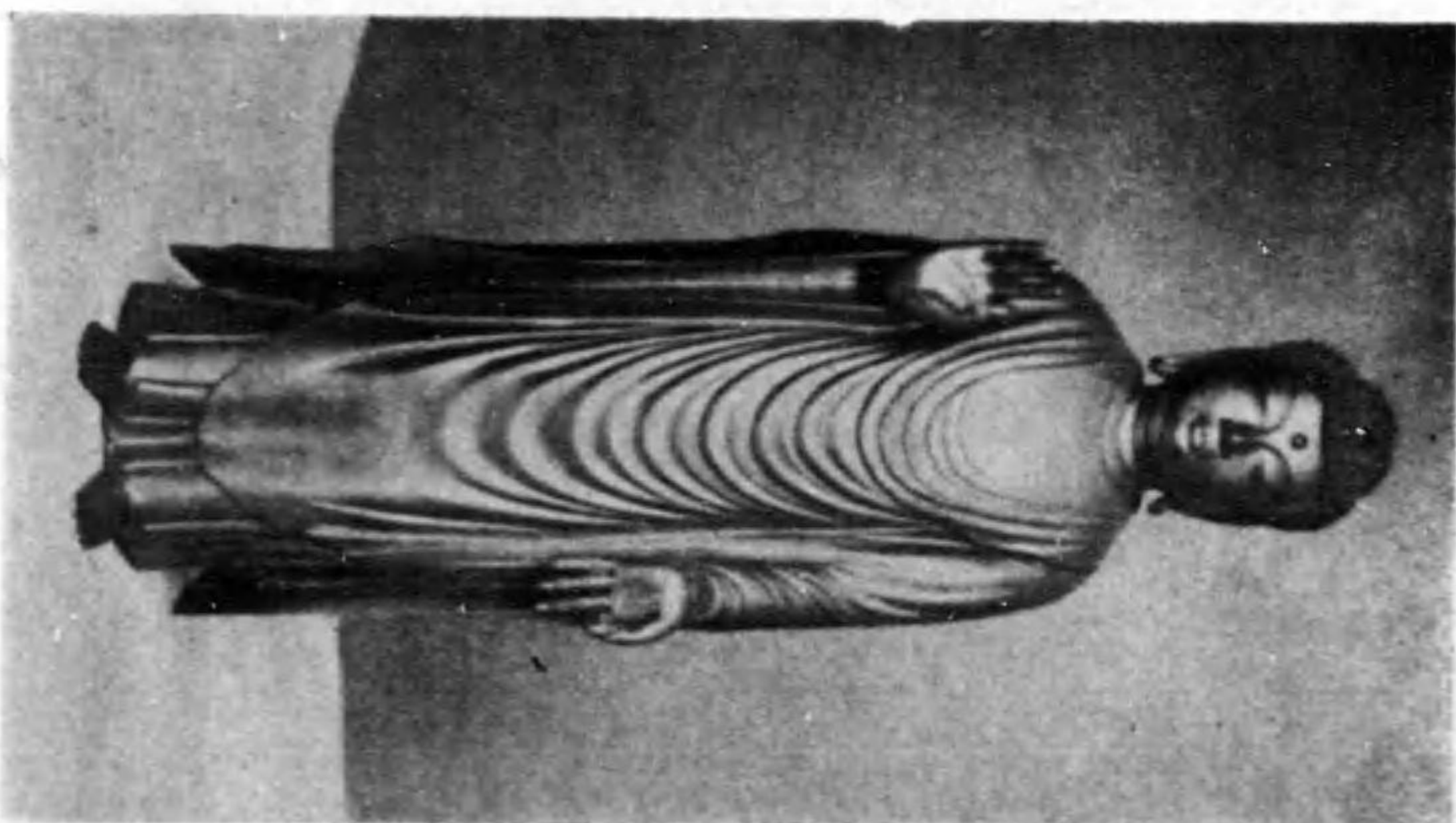
藏寺樂長野上

像肖海深師禪照法

六一



一九 右像背銘



一八 西迎寺阿彌陀佛像 (三〇三頁) 信濃縣井村西迎寺藏

是歲 僧覺源、世良田長樂寺ノ讀誦書寫ノ法會ニ加ル

〔覺源禪師年譜略〕(德治元年)師(覺源)二十歲(中略)同二十九日、至越後同門之寺、越年(中略)自厭赴鎌倉、上野國世羅田之門前一宿、亭主問云、御僧如何會裡、答曰、壽福寺林叟和尚小弟也、亭主云、承聞明匠也、主人云、爲有讀誦書寫之法會、其人衆一人欠之、御僧如何、師曰、浮雲流水身、只自然耳、亭主開喜悅之眉、即爲結衆法事過了、受囑金一緡、飯壽福寺、便五箇以爲香傳、和尚曰、此銅臭何貯處、師具啓事、和尚云、汝未其器量、彼熱鐵如何用了、忽道、々々、師答云、掬水月在手、弄花香滿衣、和尚阿呵呵。

延慶元年戊申 (一九六八)

六月二十六日 月船琛海、東福寺ニ於テ寂ス。後、長樂寺ノ牧翁了一、月船ノ塔ヲ寺内ニ建テ之ヲ普光庵ト號ス。

〔禪刹住持籍〕上野州世良田山長樂寺歴代 第五世月船諱琛海諡法照禪師、(弘安五年是歲)德治二年丁未、往東福、延慶元年戊申六月二十六日、示寂、壽七十八歲、塔于普光菴。

普光菴
東福寺ニ
移ル

〔東福第八世法照禪師十乘坊行狀〕(弘安五年ノ)德治二年丁未、承攝政九條關白殿下鈞旨、從於長樂、移于東福、未垂一葺、戊申六月中旬、示微疾、然不御醫藥、下泮之六日、謂徒弟曰、先師聖一、宴坐於常樂閣上、而入涅槃、老僧也、須効其觀、即辭丈室、登于

延慶元年

牧翁了

彼閣而於國師遺像右、屹然端坐、門弟及寺衆咸訝言、這老僧因甚顛狂如此耶、吁恐取
 咲於諸方必矣、師少頃而索筆、書偈言、四大假合、七十八年、末后一句、威音王前、書畢如
 眠而化、舉衆揚聲、嘆未曾有、異薰滿室、涉日而滅、實延慶改元戊申六月廿六日也、滅後
 長樂牧翁一禪師、卽入室之眞子也、於田上擬建師之塔、相攸於寺之四邊、未決其良地、
 一夜默坐丈室、靜思念之、恍惚之間有夢、乾坤之內、洞然明白、天亦一色、恰如瑠璃、是時
 忽然有大日輪、光明燦然、從東方飛來、墮於寺南際、師乃尋光、速到於彼而瞻之、則彼日
 輪變成色相圓滿莊嚴微妙大士也、見師來、嘿怡微咲而告之言、我名普光菩薩、實藥師
 如來之應身也、汝今欲建先師塔、唯此所最爲吉祥、言畢忽焉不見、由是便就所夢之地
 創塔基、扁曰普光庵、々號三字、南山雲師之眞蹟也、元亨年、虎關鍊禪師修釋書、尋禪師
 夏跡於神足、鈍翁愚曰、承聞先師大和尚示寂之際、異薰滿室、是也無是、則可以載予之
 所修僧史、其實如何、愚作色曰、和尚莫謗吾先師好、何故老漢、末後屎臭氣也、无更說甚
 異香、以手抑言、止々勿誤、上紙墨、鍊師悽然而上矣、夫元亨釋書、今盛行天下、恨不教先
 師夏跡上焉、王統菴卽在東福南五社廡之東也、靈感兩字台翰、

十月十八日、長樂寺大圓寂ス。見山崇喜、長樂寺ニ入り、住スル事八年ナ
 リ。

普光庵
元亨釋書

大光菴
互融菴

〔禪刹住持籍〕

上野州世良田山長樂寺歷代

第六世鑑堂、諱大圓、扁月船、德治二年丁未入寺、同三年

十月十八日於大光菴示寂、塔互融菴、壽六十三歲。

第七世見山、諱崇喜、特賜佛宗禪師、扁無學元、延慶元年戊申入寺、歲四十五、住院八年、
 後迂南禪、

延慶三年庚戌（一九七〇）

四月二十日、新田庄青根郷ノ義季ナル人、金銅阿彌陀佛像ヲ造ル

〔西迎寺阿彌陀佛像背銘〕（信濃豊井村）

上野國新田庄青根郷

大檀那 義季 見阿

延慶三年戊卯月廿日

（註） 義季ナル人、新田氏タル確證ナケレドモ、恐ラク然ルベシ。

正和二年癸丑（一九七三）

是歲 顯日、其ノ弟子疎石ヲシテ上野長樂寺ニ住セシメントス、疎石之
 ヲ避ク

〔夢窓國師年譜〕△六一五
三四八

正和二年

正和二年癸丑既出龍山未有攸往也且將壞所居之庵施之淨居以成僧寮以故覺僑淨居或者告遠濃二州或海隅或山阿皆可幽栖也師意未肯時佛國在淨知欲招師令住上野長樂有僧預告師師將避之潛出淨居先到遠州

〔前往相模州巨福山建長興國禪寺勅諭佛國應供廣濟國師行錄〕 乙卯(正和四年)師(佛國)退建長飯雲岩(以下十字原歟)按東陵所撰正覺塔銘曰佛國住巨福招夢窓住上野長樂窓力辭到濃州長瀬卓庵古溪

十二月二十一日 是ヨリ先上野長樂寺火災ニ罹リテ荒廢ス。新田覺義其ノ妻妙阿ト共ニ長樂寺ニ寄進スル目的ヲ以テ新田庄下江田村赤堀ノ田宅ヲ由良景長妻紀氏ニ沽却ス

〔長樂寺文書〕(元弘二年三月十日九日ノ條ニ收ム)

〔岡部福藏氏所藏文書〕(上野新田郡細打村長樂寺文書ノ殘片カ)

□(活カ)渡上野國新田庄下江田村赤堀内在家壹宇(田參カ)町肆段小直錢事(紙摺)

□(合カ)佰柒拾貫文者

(右件田カ)紙摺在家者妙阿自養祖父新田下野前司入道于今相傳私領也而今年癸丑十二月廿壹日限直錢佰柒拾貫文所令沽却也(田山掛)別紙載之彼田在家壹段在之一年中御公事

新田下野前司頼有
妙阿ノ
榮祖父

新田遠江太郎次郎
覺義
三郎兵衛
氏信
源頼行
覺義
妙阿

錄倉大番用途百文(紙摺)可被致沙汰候此外於京都大番役者被宛□時隨分限可致其沙汰此外公私万難公事一□(不カ)可有之若又付公私不慮之外相違事出來自餘所領可奉立替候然則背如此之約束及違亂煩子孫者覺義并妙阿之跡雖爲一分不(可知行カ)候仍爲後證妙阿夫新田遠江太郎次郎覺義所加判形也仍沽券之狀如件

(紙摺)和貳年 丑十二月廿一日

使三郎兵衛氏信

源 頼 行(花押) (14)

沙 彌 覺 義(花押) (15)

尼 妙 阿(花押) (16)

裏書爲後證所封裏也

三善(花押)

沙彌(花押)

〔岡部福藏氏所藏文書〕

紙摺 町肆段小(參カ)

紙摺 想 舊島たるを屋敷に

紙摺 想 □□□ひかし田のはたにそへ

(紙) 摺 □田一段所立替也

(紙) 摺 ひなた

(紙) 摺 うさき入とうしろ

(紙) 摺 つかた

(紙) 摺 ふけた

貳段 きさきさかい

壹段 内きさきさかい

壹段 さいけのうしろ

□ みやのきのした

貳段 はらつくり

以上參町肆段小

注文如件

正和二年癸丑十二月廿一日

使者三郎兵衛尉氏信

覺 義(花押)

妙 阿(花押)

(註)

右田宅ハ大谷道海長樂寺ニ寄進スル志アリテ其ノ女由良景長妻紀氏ノ名ヲ以テ買得シ之ヲ長樂寺ニ寄進セルモノナル事嘉曆三年十一月八日ノ條ニ見ユ。長樂寺ノ火災ハ正和年中トアレバ恐ラク本年カ或ハ昨年ナルベシ。覺義頼行妙阿ノ系詳ナラズ。覺義ハ新田遠江太郎次郎ト稱スレバ文保二年十月十八日條ノ新田遠江孫太郎頼親嘉曆二年十一月二日條ノ新田遠江彦五郎入道妙西元弘三年五月十五日條萩藩閩録ノ新田遠江又五郎經政ト近縁アル人ナルベシ。卷外長樂寺系圖ニハ覺義ヲ新田政義ノ弟トシ荒居禪師ト註スレドモ年代ヨリ考ヘテ此ノ系疑フベシ。新田族譜ニハ朝氏ノ弟トシ荒井禪師號御菴新井二郎荒井祖ト註スレドモ遠江太郎次郎ノ稱號ヨリ推シテ此ノ系亦疑ハシ。妙阿ハ元亨三年十一月九日條ノ道海寄進狀ニ妙阿聖靈ノ爲トアレバ此ノ後約十年間存生シテ四月二十九日ニ逝去セシナルベク大谷道海ト近縁アル人ナルベシ。新田下野前司ハ頼有ニシテ妙阿ハ其ノ養孫ナレバ妙阿或ハ岩松政經ニ近縁アル人カ。又頼行ハ恐ラク覺義ト妙阿ノ子ナルベシ。

正和三年甲寅 (一九七四)

五月二十八日 新田朝兼、長樂寺へ寄進スルノ目的ヲ以テ、新田庄八木沼ノ宅畠ヲ由良景長ノ妻紀氏ニ沽却ス。船田政綱之ガ使者タリ。尋テ八月二十三日、幕府之ヲ認許ス。

〔長樂寺文書〕

源朝兼
一年分御
公事
領家御年
實
惣領支配

賣渡上野國新田庄八木沼郷内在家三字内畠伍丁六反事、合直錢柒拾貫文者
右件在家畠者、朝兼爲重代相傳之私領之間、自今年甲寅歲五月廿八日、限永代、直錢柒拾貫文所賣渡實也、件在家畠等之證文、并付別紙在之惣郷公畠内小令賣渡、在家畠内之一年分御公事者、領家御年實御綿代卅三文、錢十七文、錄倉大番用途十四文、同御院飯用途六十七文、小舍人用途七文、へいの用途十三文、此御公事物等者、買主方可致沙汰依之不可有人夫等宛催事、於彼是五分者、任惣領支配之狀、仁可致沙汰、此外背定置旨、付公私有被別臨時、天直米仰下事者、於賣主沙汰可經入之、不可懸買主類、背此旨敢之、於致煩者、可被申行別科、次彼所付公私有相違出來事者、朝兼知行分自余所於此、得分勘合、天立替可被知行候、然者、至于子々孫々、背此旨事不可有之、此上於背定置旨輩者、不可知行朝兼之跡、更仍沽券之狀、如件。

正和三年五月廿八日

使者 船田孫六政綱(花押)

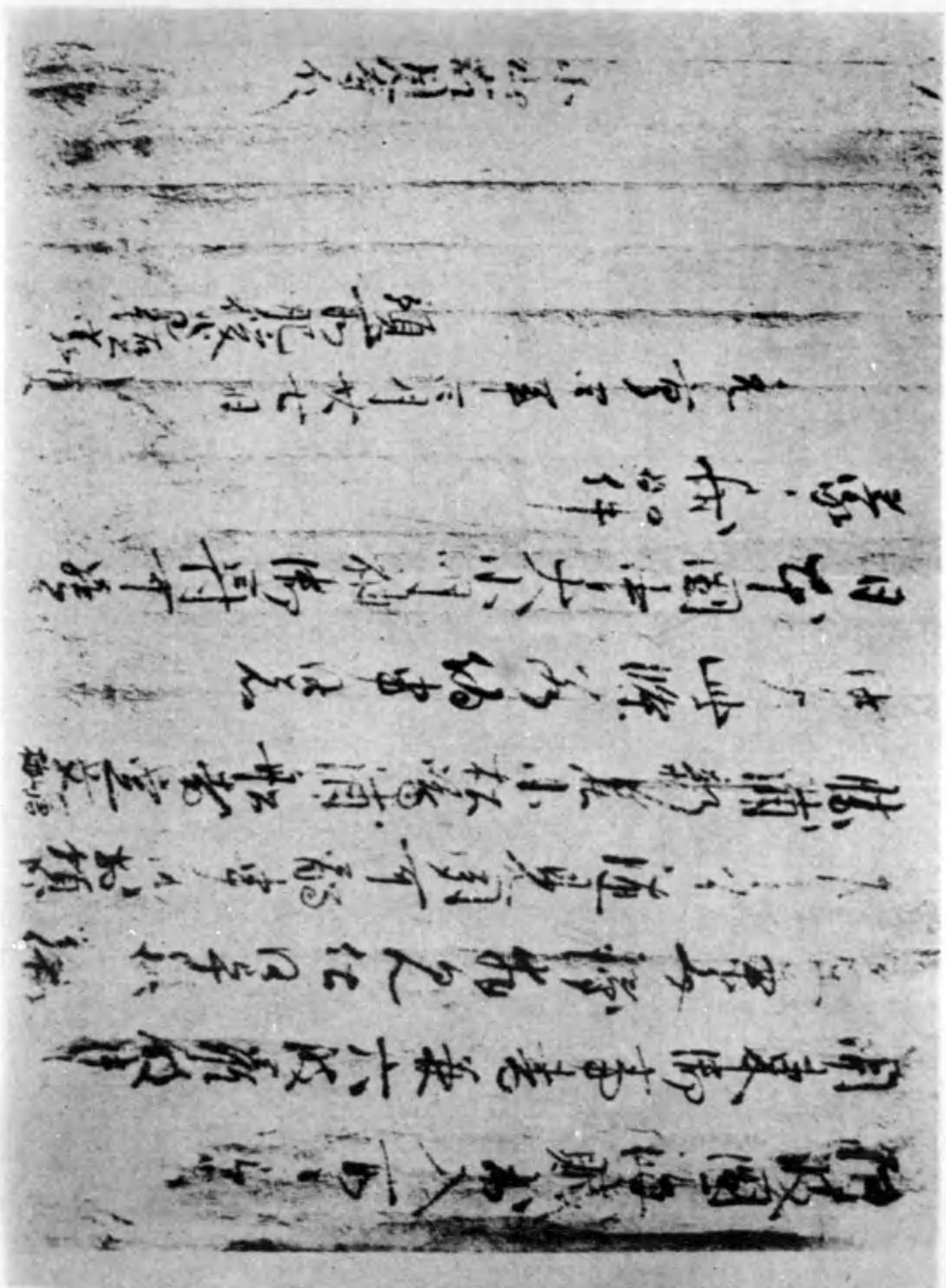
船田政綱

上野長樂寺藏

賣渡上野國新田庄八木沼郷内在家三字内畠伍丁六反事
合直錢柒拾貫文者
右件在家畠者、朝兼爲重代相傳之私領之間、自今年甲寅歲五月廿八日、限永代、直錢柒拾貫文所賣渡實也、件在家畠等之證文、并付別紙在之惣郷公畠内小令賣渡、在家畠内之一年分御公事者、領家御年實御綿代卅三文、錢十七文、錄倉大番用途十四文、同御院飯用途六十七文、小舍人用途七文、へいの用途十三文、此御公事物等者、買主可致沙汰依之不可有人夫等宛催事、於彼是五分者、任惣領支配之狀、仁可致沙汰、此外背定置旨、付公私有被別臨時、天直米仰下事者、於賣主沙汰可經入之、不可懸買主類、背此旨敢之、於致煩者、可被申行別科、次彼所付公私有相違出來事者、朝兼知行分自余所於此、得分勘合、天立替可被知行候、然者、至于子々孫々、背此旨事不可有之、此上於背定置旨輩者、不可知行朝兼之跡、更仍沽券之狀、如件。

正和三年五月廿八日
使者 船田孫六政綱

110 新田朝兼土地沽却狀



二一 岩松經家請文(三四頁)

源 朝 兼(花押)⁽¹⁸⁾

〔長樂寺文書〕

由良景長
ノ妻紀氏

新田六郎
太郎朝兼

朝兼ハ義
貞ノ父朝
氏ナリ

由良孫三郎景長妻紀氏申、上野國新田庄八木沼郷内在家三字、島五町六段 名付券、沽事、

右島地等者新田六郎太郎朝兼今年五月廿八日、永代放券之間、氏女買取訖、可給御下知之由、依申之、爲問實否、被召朝兼之處、如同六月廿八日請文者、沽却之條無異儀云々者、當郷私領之旨前々其沙汰訖、然則於彼地者、任朝兼放券、可以氏女領地之狀、依錄倉殿仰下知如件、

正和三年八月廿三日

(北條時時)相模守平朝臣(花押)

(註) 朝兼ハ、卷外長樂寺系圖ニ、基氏新田六郎——同太郎朝氏正朝兼——義貞 トアリ。又

使者ニ船田政綱アルヲ以テ考フルニ、蓋シ、新田義貞ノ父ニ當ル人ナルベシ。同系圖ニハ又岩松時兼ノ子ニ數塚六郎朝兼ナル人ヲ載セタレドモ、本條ノ文書ノ内容ヨリ考察シテ義貞ノ父トスルガ妥當ナルベシ。明年二月二十二日及ビ嘉曆三年十一月八日條參照。

正和四年乙卯(一九七五)

二月二十二日 新田朝兼、長樂寺へ寄進スルノ目的ヲ以テ、新田庄八木沼郷ノ宅畠ヲ由良景長ノ妻紀氏ニ沽却ス。船田政綱之方使者タリ。尋テ、三月二十三日、幕府、之ヲ認許ス。

〔長樂寺文書〕

賣渡上野國新田庄八木沼郷内道念給分跡在家壹字、并彌三郎跡在家壹字、已上貳字、内島參町捌反事、合直錢佰貫文者、

右件在家畠者、源光爲重代相傳之私領之間、自今年乙卯歲二月廿二日限永代、直錢百貫文所賣渡實也、件在家畠等之注文坪付別紙在之、彼在家畠等之每年公方御公事、鎌倉大番用途、院飯用途、已上百文、爲買主沙汰可被致、并此外背定置之旨、付公私別臨時、天直米有被仰下事者、於賣主沙汰可經入之、全不可懸買主煩背此旨、聊之於煩者、可被申行別科、次彼所付公私、有相違出來事者、源光知行分自余所於此得分勘合、天立替可被知行候、至于子々孫々、背此旨事不可有、此上於背定置之旨輩者、不可知行源光跡更、仍爲後日沽券之狀如件、

正和四年卯二月廿二日

使者 船田孫六政綱入道妙質(花押) (19)
沙彌源光(花押) (20)

朝兼ノ法名ハ源光

船田政綱ノ法名ハ妙質

〔長樂寺文書〕

由良景長ノ妻紀氏

由良孫三郎景長妻紀氏申、上野國新田庄八木沼郷内在家貳字、畠三町八段名付券

載沽事、

右在家等者、新田六郎太郎入道源光、今年二月廿二日永代放券之間、氏女買取訖、可給御下知之由依申之、爲問實否、被召源光之處、如同三月五日請文者、沽却之條無異儀云々者、當郷私領之旨、前々其沙汰畢、然則於彼地者、任源光沽券、可以氏女領知之狀、依錄倉殿仰、下知如件、

正和四年三月廿三日

相模守平朝臣(北條景時) (花押)

(註) 嘉曆三年十一月八日條參照、

五月二十三日 長樂寺ノ見山崇喜、長樂寺文書注文ヲ作製ス。尋テ、是歲南禪寺ニ遷ル。月菴自昭、寺ニ入ル。

〔長樂寺文書〕

當寺文書等如右、

新加

一 近江國香坂寄進狀一通、本主狀數通在之案文、

正和四年

中條伊賀
禪門

- 一 今居郷貳段田狀一通、中條伊賀禪門
- 一 正傳庵主請記一通、塔頭寄進狀

正和四年五月廿三日

住持崇喜(花押)(21)

佛宗禪師

〔禪刹住持籍〕

上野州世良田山長樂寺歴代

第七世見山諱崇喜特賜佛宗禪師、尚無學元、延慶元年

戊申入寺、歳四十五、住院八年、後迂南禪、

第八世月菴自昭、尚一翁豪、正和四年乙卯入寺、歳七十二、住院三年、文保元丁巳退院、

〔佛光國師語錄〕(卷八)

送崇喜上人

鐵壁銀山一線通、桂花陣陣送秋風、歸時別贈烏藤杖、莫道翁翁活計窮、

〔二山國師語錄〕(卷上)

住日本國相模州巨福山、建長興國禪寺語錄

侍者 崇喜編

師於正安元年十二月七日入院、

八月時正 沙彌圓佛及ビ尼妙蓮、逆修ノ爲ニ板碑ヲ造立ス、

〔金剛寺所藏板碑銘〕(新田郡尾島町大字岩松)

(1) 右志者、爲沙彌圓佛、逆修

(2) 右志者、爲比丘尼妙蓮、逆修

圓佛及ビ
妙蓮

正和四季乙卯八月時正

正和四季乙卯八月時正敬白

善根、出離生死證大非也、

善根、出離生死證大非也、

(註) 尼妙蓮、弘安五年十一月十二日ノ藤原土用王、建武元年十二月二十一日

條ノ尼妙蓮ナルベシ。沙彌圓佛ノ系不明、二基共ニ長サ一五〇、幅三四、

種字ハ彌陀三尊ナリ。

正和六年、文保元年丁巳(二月三日改)(一九七七)

是歳 長樂寺ノ月菴自昭、寺ヲ退ク。秀岩元挺、入寺ス。

〔禪刹住持籍〕

上野州世良田山長樂寺歴代

第八世月菴自昭

中略正和四年ノ

住院三年、文保元丁

巳退院、同三年己未七月十日寂、壽七十六、

第九世秀岩諱元挺、尚高峰日、文保元丁巳入寺、歳五十三、住院四年、

文保二年戊午(一九七八)

二月二十六日 後醍醐天皇、踐祚シ給フ。

十月六日 新田義貞、長樂寺寄進ノ目的ヲ以テ、新田庄八木沼郷ノ宅畠

ヲ由良景長妻紀氏ニ沽却ス。同日、岩松(泉)義氏、重廣、同庄西谷村ノ宅畠

田ヲ沽却ス。十月十八日、新田頼親、同庄村田郷ノ宅畠ヲ亦、紀氏ニ沽却

ス。尋テ十二月二十三日、幕府、義貞及ビ頼親ノ沽却ヲ認許ス。

〔長樂寺文書〕

賣渡上野國新田庄(八木沼郷力)内在家柴宇、島拾伍町柒段事、

合直錢、參佰貳拾參貫文者、

右件在家島者、義貞(爲原代力)相傳私領之間、自今年戊午年十月六日限(永代、參佰力)貳拾參貫文所賣渡實也、件在家島等之注文、坪付在惣郷公島内壹段令賣渡在家等内在之一、(分御、紙想)家御年貢御綿代百文、錢伍拾文、餘倉大番用途、(紙想)文、同御境飯用途二百文、小舍人用途廿文、并用途四十文、此御公事物等者、買主可致沙汰、依之不可有人夫等、(病儀事、於力)紙想、彼是五分者、惣領支配之狀、可致沙汰、此外背、(定置、買付力)紙想、公私有被別臨時天直米仰下事者、於賣主沙汰可經入之、不可懸買主煩、背此旨聊於致煩者、可、(紙想、彼所付公)私、有相違出來事者、義貞知行分自余所於此得分勘合天立替可被知行候、然者至于子々孫々、(不可有背力)紙想、此旨事、此上於背定置之旨輩者、不可知行義貞、仍沽券之狀如件、

文保二〇〇〇月六日

源義貞判

〔註〕本文書ハ義貞ノ文獻上最初ノ出現ナリ。又右ハ八木沼郷ヲ由良景長妻紀

氏へ沽渡セルモノナル事、嘉曆三年十一月八日ノ寄進狀ニテ知ルベシ。

源義貞
一年分御
公事
領家年貢
惣領支配

義貞ノ文
獻上最初
ノ出現

〔長樂寺文書〕

由良孫三郎景長妻紀氏申買得地條々、

一、上野國新田庄八木沼郷内在家島地名字坪付事、載證文

右地者、新田孫太郎貞義(小ノ領力)今年十月六日、永代放券之間、氏女買取之由、依申之、爲問實

否、被召貞義之處、如今年七月七日請文者、沽却之條無相違云々、且當郷私領之旨、前々其

沙汰訖、然則於彼地者、任貞義沽券、可以氏女領知也、

一、同庄村新田郷内在家田島名字坪付事、載證文

右田地等者、新田遠江孫太郎頼親今年十月十八日、永代放券之間、氏女買取之由、依

申之、爲問實否、被召頼親之處、如今年六月六日請文者、沽却之條勿論云々、仍同前、以前兩條

依謙倉殿仰、下知如件、

文保二年十二月廿三日

相模守平朝臣(北條高時) 在御判

武藏守平朝臣(北條貞顯) 在御判

〔註〕貞義ハ前文書ニアル義貞ノ誤カトモ思ハルレドモ疑ハシ、尊卑分脈ニヨレバ一井貞政ハ孫三郎トアレバ、或ハ孫太郎貞義トハ、其ノ兄堀口貞義ノ事ナルカサレド、前文書ニ義貞八木沼郷ヲ沽却セル同日、即チ十月六日ニ亦、八

文保二年

二一五

新田孫太
郎貞義

新田遠江
孫太郎頼
親

木沼郷ノ宅畠ヲ由良景長妻紀氏ニ賣レル事、及ビ、嘉曆三年十一月八日ノ寄進狀ノ宅畠ノ數量ヨリ考フルニ、貞義ハ、義貞ノ誤記トスルヲ妥當トスベシ。

〔長樂寺文書〕

去渡上野國新田庄西谷村內三郎太郎入道在家壹字、畠一丁貳段、田一丁壹段事、右件在家田畠者、自親父義妙之手、三人子息等讓得之間、於得分物者、面々所分取也、依有要用嫡子限永代令沽却之間、以別義止庶子等得分、嫡子方々所去渡也、自今以後彼在家不可致違亂煩候、背此誠候者、可被行別罪科候、仍去狀如件、

文保二年^{戊午}十月六日

源義氏(花押)(22)

源重廣(花押)(23)

(註)

義妙、卷外長樂寺系圖ノ一所ニ、又太郎政氏——三郎知信——義妙

アリテ、義妙ノ子ハ載セズ、又他所ニ、岩松時兼——經氏——重氏——義

氏——長重——トアリ、之ナルベシ、嘉曆三年十一月八日條參照。

〔長樂寺文書〕

賣渡上野國新田庄村田郷內辻在家一字、內畠一町二段、田一丁七段、直錢事、

合捌拾五貫文者、

親父義妙

泉澤重氏

新田遠江親孫太郎頼公一年分御

右件在家田畠等者、^{別紙}代相傳私領之間、自今年^{戊午}年十月十八日限永代、直錢捌拾伍貫文所賣渡實也、件在家田畠等注文坪付^{別紙}惣郷公田內一段在之、一年分御公事、宛飯用途六十八文、四文、五月會ひた、れ用途八文、御所へいすり用途三文、政所替物用途五十五文、大番用途五十文、領家御綿代同錢四十文、小舍人用途十三文、此御公事物等者、買主可致沙汰、依之不可有人夫等宛催事、於彼等者、任惣領支配、狀仁可致沙汰、此外背定置旨、付公私有被別臨時、天直米仰下事者、於賣主沙汰可經入之、不可懸買主煩、背此旨被敢煩者、可被申行別科、次彼所付公私有相違事者、頼親知行分自餘所於得分勘合、天立替可被知行候、然者至于子々孫々、背此旨事不可有之、此上於背定置旨輩者、不可知行頼親跡更、仍沽券之狀如件、

文保二年^{戊午}十月十八日

御使正圓

源頼親判

(註)

頼親ノ系不明、正和二年十二月二十一日、嘉曆三年十一月八日條參照。

文保三年・元應元年(四月二十^{八日改})己未(二九七九)

七月十日 長樂寺ノ前住月菴自昭、寂ス。(禪刹住持籍)(文保元年ノ條ニ收ム)

元應二年庚申(二九八〇)

元應二年

二一七

田家ニ嫁セルナリ。伊賀次郎太郎トハ、同系圖ニ、伊賀藏人義繼——藏人伊賀大井田
次郎氏繼——兵衛藏人義隆 トアレバ、蓋シ義隆ナルベシ。嘉曆四年六月
二十三日ノ條參照。

十二月一日 後宇多法皇、院政ヲ廢シ給ヒ、後醍醐天皇、親裁シ給フ。

元亨二年壬戌 (一九八二)

十月二十七日 是ヨリ先、新田岩松政經、新田大館宗氏ト新田庄田嶋郷
ノ用水ニツキテ争ヒ、幕府ニ訴フ。是日、幕府、之ガ裁決ヲ下ス。

〔正文書〕

新田下野太郎入道(政經)々々定代堯海申、上野國新田庄田嶋郷用水事、

右件用水者受新田二郎宗氏所領一井郷沼水、令耕作田嶋郷之條、往古例也、而宗氏
打塞彼用水堀之由申之處、宗氏如陳狀者、打塞所見何事哉、宗氏全不違亂云々、爲向
後可成給御下知之旨堯海申之、此上者不及異儀、任先例可引通之狀、依錄倉殿御下
知如件

元亨二年十月廿七日

相模(北條高時)守本朝臣(花押)
修理權(北條貞時)太夫平朝臣(花押)

新田下野
太郎定
代堯海
新田宗氏

(註) 岩松氏ガ錄倉時代ニ於テモ新田氏ヲ稱セシ事、之ニテ知ルベシ。尊卑分
脈ニヨレバ頼有ノ子ニ頼泰アリテ、之亦、下野太郎ト註スレドモ、正文書ノ
性質ヨリ考察シテ、此處ニハ政經ト考ヘシ。

十一月二十日 尼淨院、新田庄南女塚村ノ田宅ヲ、父新田頼氏供養ノ爲
ニ長樂寺ニ寄進ス。

〔長樂寺文書〕

奉寄進 上野國世良田長樂寺、同國新田庄南女塚村内田在家事、

壹字 大宮前彌四郎跡田在家、

壹字 窪田南縁荒居在家、

右爲亡父參河前司入道忌日湯水、奉寄進同庄上江田村内林之處、於于今者無林而
成作地天依爲得分地、就南女塚御寺御分、爲便宜地之間、相傳彼所寄進也、仍狀如件

元亨貳年十一月廿日

淨院 在判

〔長樂寺文書〕(觀應三年三月十一日、貞治四年七月五
日、明德三年八月十一日、條ノ目錄三通)

(註) 建治三年十二月二十三日ノ條參照。

元亨三年癸亥 (一九八三)

元亨三年

荒居
新田頼氏
ノ女淨院

十月十七日 新田(世良)滿義、新田庄小角田村御堂前ノ畠地ヲ長樂寺寄進ノ目的ヲ以テ、大谷道海(三浦時繼)ニ沽却ス。尋デ、十一月九日、道海、故妙阿ト自身ノ死後ノ供養ノ爲ニ此ノ地ヲ長樂寺ニ寄進ス。

〔長樂寺文書〕

上野國新田(庄股)世良田長樂寺永代奉寄進畠事、

合臺町捌段、一年得分、拾貳貫文所、

右件畠者、上野國新田庄小角田村內御堂前有之、件畠者長樂寺に依有其志、立四至堺、元亨三年癸十月十七日寺御使に打渡畢、如此奉寄進上者、於此地不可致一塵煩、若至子々孫々於致違亂煩者、滿義跡を一分も不可知行、仍爲後代龜鏡、寄進之狀如件、

元亨三年癸十月十七日

源滿義 在判

〔長樂寺文書〕

(觀應三年三月十一日、貞治四年七月五日、明德三年八月十一日、條ノ目錄三通)

〔長樂寺文書〕

奉寄進上野國新田庄長樂寺永代畠地事、

合畠壹町捌段、所當錢拾貳貫文、

妙阿聖靈

道海

御寶主寄進狀

大谷道海ハ三浦時繼ナリ

右畠者、上野國新田御庄內小角田村に作人入智房作畠壹町捌段、毎年所當拾貳貫文內九段所當六貫文者、妙阿聖靈毎月廿九日靈供、并二季彼岸中靈供、毎年四月廿九日、年忌爲奉訪世良田長樂寺輪藏、所奉寄進也、殘畠九段所當六貫文所者、道海死去後、如此爲奉訪にて候、彼畠御寶主寄進狀制令進候沽券道海子孫までもたす、候、御用時者可被召候、仍寄進之狀如件、

元亨三年癸十一月九日

道海 在判

〔註〕

大谷道海ハ其ノ女、由良景長ノ妻ガ紀氏ナルニヨリ、道海亦紀氏ナリトモ

思考セラルレド又平氏ナル三浦時繼タル事ヲ證スル史料アリ、建武二年

九月二十七日條ノ宇都宮文書ヲ參照スベシ、三浦系圖(諸家系圖)ニ、

時明——時繼法名道海、與力中先代、於尾州熱田被、高繼トアリ、

又、葦名古文書(△六一六)ニモ、可令早三浦介時繼法師法名道海、領知武藏國大谷郷

下野右近大夫、將監跡、足立郡、相模國河内郷、權守跡、地頭職事、(下略、建武元、四、十日附)トアリ、

妙阿ニツキテハ、正和二年十二月二十一日ノ條參照、

元亨四年・正中元年甲子(十二月九日改) (二九八四)

四月二十七日 新田岩松經家、其ノ領內阿波國勝浦新庄小松島浦ノ船

ハ定文唐梅ニシテ海賊船ナラザル由、請文ヲ提出ス。

〔小山文書〕(紀伊 田邊町) (圖版二一参照)

阿波國海賊出入所々□□□關東御事書并六波羅殿御□案文謹拜見仕候畢、如□
仰下之旨、隨見聞可觸申候、於領内勝浦新庄小松島浦船者、定文唐梅候畢、此條若偽申
候者、日本國中大小明神御罰可罷蒙之狀、如件、

元亨四年四月二十七日

預所肥後守經家請文

小山石見守殿

〔註〕 肥後守經家、岩松經家ト同一人ナル事、確實ナラザレドモ、其所領勝浦新庄

ハ、岩松氏ノ所領生夷庄ニ隣レルヨリ、同一人ト見ルヲ可トスベシ。

弘安元年十月三日條參照、島田泉山氏著、阿波に隠れたる建武の忠臣岩松經
家參照。

六月十一日、新田基氏(義貞ノ祖父)、逝去ス。

基氏ノ法
名ハ建義

〔圓福寺五輪塔銘〕(新田郡 別所) 沙彌道義七十二逝 元亨四季甲子 六月十一日巳時

〔新田族譜〕 基氏新田六郎沙彌道義、建長元年生、母左近大夫平季時女、正

七月二十八日 新田義貞、新田庄濱田郷ノ田畠宅ヲ小此木盛光妻紀氏

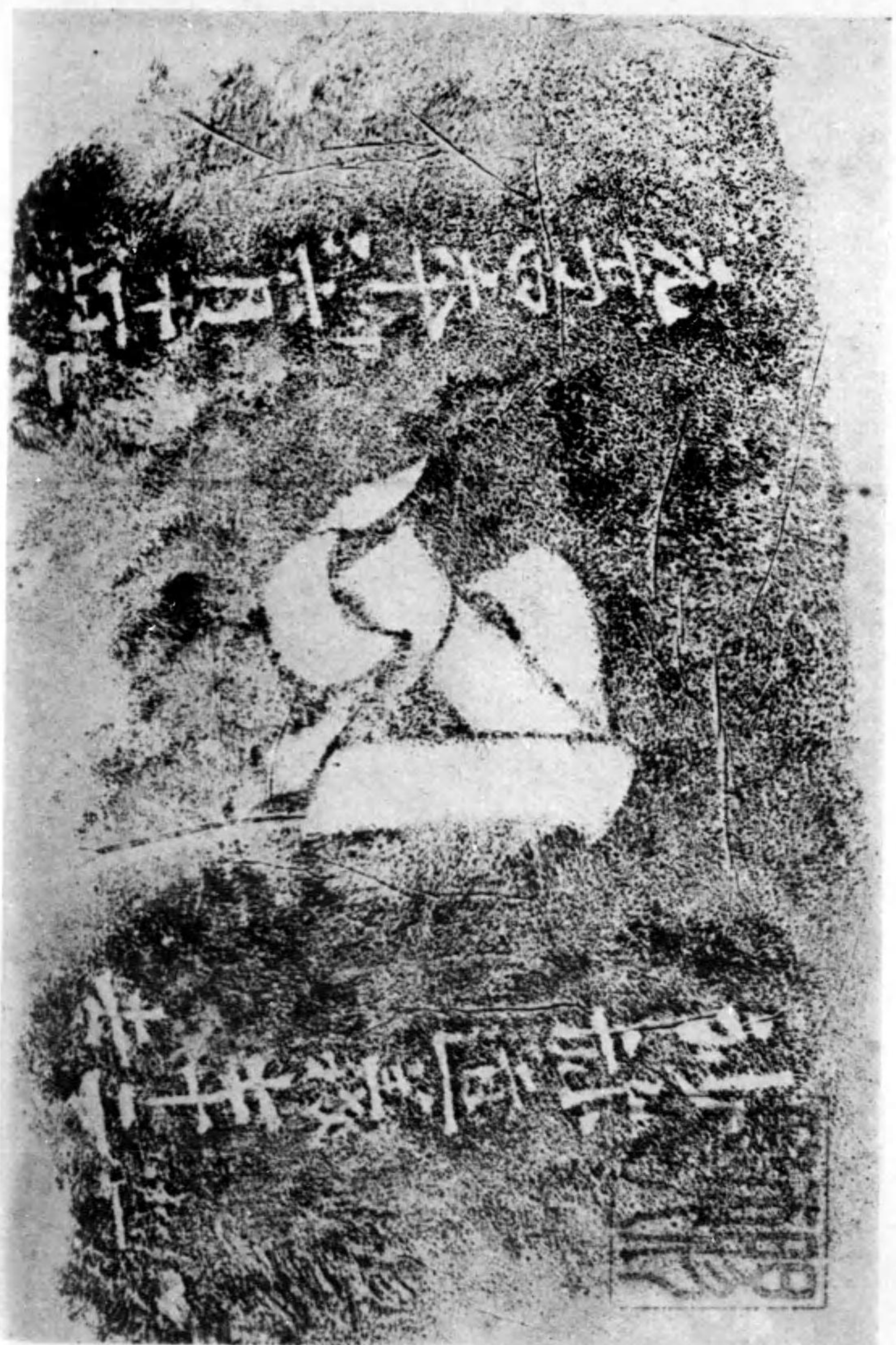


内境寺福圓所別村泉實野上

地墓氏田新 三二



1111 新田基氏墓 (左圖左ヨリ第三基目)



二四 新田基氏墓石銘

(同前)

小業及波尾感先妻紀永上野國新
 田庄濱田郷内在家載字由矣可島凍
 臨在時中
 右田島在家者新田小太郎義教自去七月廿
 八限永代治部由氏女依申之下百符之長
 如去月十三日義教自請治部將無相違
 是當押給額三昔前之耳汝訖然則
 於彼田島在家者住我員治卷汝等可令
 領知汝等女子細難載治卷且依先例
 者依鎮君卿下知如伴
 元亨四年十月七日
 相持寺奉願人
 依權奉願人

二五 新田義貞公土地治却三對ノ墓府下知狀

ニ沽却ス。尋テ、十月七日、幕府、之ヲ認許ス。

〔長樂寺文書〕

小此木彦次郎盛光妻紀氏申、上野國新田庄濱田郷内在家貳宇、田參町、島柴段、名、字。

坪付
在別紙 事、

右田島在家者新田小太郎義貞去七月廿八日限永代沽却之由、氏女依申之、下召符之處、如去月十三日義貞請文者、沽却之條無相違云々、且當郷私領之旨前々其沙汰訖、然則於彼田島在家者、任義貞沽券、以氏女可令領知也、次公事子細雖載沽券、宜依先例也者、依鎌倉殿仰、下知如件、

元亨四年十月七日

相模守 (北條高時) 平朝臣 (花押)
修理權大夫 (北條貞朝) 平朝臣 (花押)

北條高時

新田義貞

九月十九日 天皇ノ討幕ノ御企、發覺ス。是日、御企ニ參加セル土岐頼員、多治見國長等、六波羅ニ檢舉セラレ、尋テ、二十三日、日野資朝、同俊基等、亦捕ヘラル。是事、二十六日、鎌倉ニ聞ユ。尋テ資朝ノ配流ニヨリテ事、落着ス。

〔藤島神社所藏文書〕(福井市)

元亨四年

今月廿三日、自京都早馬參テ候、當今御謀叛之由、其聞候、齋藤太郎左衛門許より先申て候、自六原殿へ未被申候、明曉なとの、令參著候のす覽と申あひて候、依之諷方三郎兵衛尉諷方全禪子并工藤右衛門二郎早打ニ京都へ只今時丑立候、如此候間、錄倉中令騒動候、自御局彌一を被進候之間、此夫丸を副進候、就此早打、土岐伯耆前司宿所唐笠被押寄候之處、在國之間、留守仁、一兩人被召取候云々、九月廿三日時丑定朝狀如此承候へり、粟宮か使トテ上候か、のや被上候よし申候之間、返々、悦入候、尙々目出度候、出羽にもかゝられ候、被上候條、返々有難候、相構々々馬共勞テ、とく可被上候か、る珍事義候折節、夷京都と申か、る勝事義候也、只今時子彌一法師下著之間、則時ニ申候也、粟宮か下人の上候ニ尋候へり、三日の連進テ候由申候之間、尙々心安覺候、宗朝か狀には、今一重申候也、餘ニ急候テ、くのしく不申候、穴賢々々、

(正中元年)
九月廿六日時子

上野七郎兵衛尉殿

(新編)
宗 廣(花押)

(註) 後年、義貞ト共ニ忠臣トナル武士ノ、當時ニ於ケル精神態度ヲ窺フベシ。

嘉曆二年丁卯 (一九八七)

十月二十九日 是ヨリ先、長樂寺ノ牧翁了一、月船琛海ノ塔頭普光庵ヲ寺域内ニ建立ス。是日、新田庄中今井郷内ノ在家ヲ之ニ寄進ス。尋テ十一月七日、寂ス。

〔長樂寺文書〕

奉寄進普光庵法照禪師塔頭、中今井郷内六日市庭、并抽垣中在家一字事、右所者相副本文書所奉寄進普光庵實也、仍寄進狀如件、

嘉曆二年十月廿九日

牧翁了一(花押)(24)

〔禪刹住持籍〕上野州世良田、山長樂寺歴代 第十世牧翁諱了一(中略、元應二年ノ條ニアリ) 住院八年、嘉曆二年

丁卯十一月七日示寂、壽六十五歳、

(註) 延慶元年六月二十六日條參照。圖版一七參照。

十一月二日 新田遠江彦五郎入道妙西、新田庄東田嶋村内田畠宅ヲ小此木盛光妻紀氏ニ沽却ス。尋テ、明年二月十九日、幕府、之ヲ認許ス。

〔長樂寺文書〕

小此木彦次郎盛光妻紀氏申、上野國新田庄東田嶋村内在家貳字、同在家付田貳町伍段、畠參町玖段名字坪付事、載證文

嘉曆二年

右地者新田遠江彦五郎入道妙西去年十一月二日、永代放券之間、所令買領也、可賜御下知之由、氏女依申之、爲決眞僞、遣召文之處、如妙西同十二月廿一日請文者、沽却無異儀云々、且當村私領之旨、前々沙汰訖然、則於彼地者、任妙西沽券、可令紀氏領掌、次公事間事、雖載證文、有無宜依先例者、依將軍家仰、下知如件、

嘉曆三年二月十九日

相模守平朝臣(花押)

(註) 新田遠江彦五郎入道妙西ノ系不詳、正和二年十二月二十一日條ノ註參照、

正平十九年九月十六日條參照、紀氏此ノ田畠在家ヲ長樂寺ニ寄進セル事、

明年八月二十六日條ニ見ユ、小此木盛光妻紀氏蓋シ由良景長妻紀氏ト近縁

アル人ニテ、大谷道海ノ女ナルカ、

嘉曆三年戊辰 (一九八八)

四月五日 大江(那彦)宗元、那波郡内飯塚郷ヲ、長樂寺ニ寄進ノ目的ヲ以テ、大谷道海ニ沽却ス。道海、之ヲ長樂寺ニ寄進ス。尋デ、七月十七日、幕府、之ヲ認許ス。

〔長樂寺文書〕

寄進 世良田長(樂)寺、上野國那波郡内飯塚郷事、

右郷者、宗元重代爲私領之間、限永代一圓所奉寄進也、自今以後宗元子孫等不可成一座之締者也、彼寺者佛法興行之古所、當國無雙之禪院也、然則至于盡未來際、供養無心道人、爲積佛法之慧明也、即現世遂宿望、當來成佛果、但於御公事者、任先例可有勤仕候、仍狀如件、

嘉曆三年四月五日

大江宗元(花押)

〔長樂寺文書〕

上野國那波郡飯塚郷 那波上總二郎 事所被寄進當寺也、者、依仰執達如件、

嘉曆三年七月十七日

相模守(赤橋守時) 在御判

長樂寺長老

〔長樂寺文書〕(嘉曆三年十月十八日附惠) 〔長樂寺文書〕(嘉曆三年十月十八日附、道海證)

〔長樂寺文書〕(嘉曆四年四月十三日附、住持ノ文書同日條ニ收ム) 〔長樂寺文書〕(明德三年八月十日條ニ收ム) 〔長樂寺

文書〕(貞治四年七月五日條ニ收ム)

六月一日 新田(世良)滿義、其ノ氏寺タル長樂寺ニ寄進スルノ目的ヲ以テ、新田庄内小角田村ノ田宅ヲ大谷道海ニ沽却ス。然ルニ道海、先ニ那波郡飯塚郷ヲ長樂寺ニ寄進セシヲ以テ、十月十八日、小角田ノ地ヲ了重

ニ沽却ス。同日、了重、是ヲ長樂寺ニ寄進ス。

〔長樂寺文書〕

上野國新田庄世良田長樂寺永代奉寄進同庄之内滿義知行分小角田村之内田在家事。

田壹町、深町并 同田柴段、號塚田、堺田中、 鄉房跡在家一字、田島、玖段

合田島貳町六段、壹年得分、拾七貫文所、

右件田島者、長樂寺奉永代寄進畢、依爲先祖代々氏寺、彼地寄進者也、然者至于子々孫々、於此所者、不可致煩若背此旨輩者、滿義跡一分不可知行、仍爲末代龜鏡、自筆之狀如件。

嘉曆三年 戊辰六月一日

源滿義 在判

〔長樂寺文書〕〔觀應三年三月十一日、貞治四年七月五日、日、明德三年八月十一日、條ノ目錄三通〕

〔長樂寺文書〕

小角田村之内田島貳町六段、永代ニ沽渡、直錢合玖拾貫文者、右大谷入道々海方より無未進六月一日請とり畢、仍狀如件。

嘉曆三年六月一日

御使平六定安〔花押〕(25)

滿義知行

先祖代々氏寺

大谷道海平六定安

北殿 了重

〔花押〕(26)

〔長樂寺文書〕

自北殿〔滿義カ〕當庄内小角田仁在家一字、田島二十六段〔了重カ〕於永代買給、令存奉寄進當寺處仁、那波郡飯塚鄉買得之、奉寄進間、此小角田去與了重畢、仍道妙房於彼所者、所奉寄進當寺也、然者於本錢九十貫文者請取了、仍爲後證之狀如件。

嘉曆三年十月十八日

道海判

〔註〕北殿トハ或ハ長樂寺文書承久二年十二月三日附ノモノニ北目地頭ナル語アリ、之ト關係アルカ。

〔長樂寺文書〕

奉寄進永代小角田在家田島等注文事、

合

- 一 在家一字、鄉房跡田代島九反、内田三反、所當六貫文、
 - 一 一所田柴段、堺田中、號塚田、所當四貫五百文、
 - 一 一所田壹町、深町、所當六貫五百文、
- 以上所當錢拾柒貫文

嘉曆三年

二二一

右注文如件

嘉曆三年戊戌十月十八日

了重(花押)⁽²⁷⁾

八月二十六日 小此木盛光ノ妻紀氏、先ニ買得セル新田庄八木沼郷ノ
畠宅、飯塚郷ノ田宅、東田嶋郷ノ田畠宅ヲ長樂寺ニ寄進ス。

〔長樂寺文書〕

寄進 世良田長樂寺、上野國八木沼郷内畠捌町九段大、在家四字、同所畠拾貳町五
段半、在家四字、同庄内飯塚郷内田五町七段、在家三字、内庄内東田嶋村内田貳町
伍段、在家二字、畠三町九段事、

右田畠在家等、任四通沽券、申賜四通安堵御下知、當知行無相違之處、氏女沈病床、依
難存命、相副沽券并安堵御下知、所奉寄進長樂寺也、爰氏女無一子之上者、不可有他
裔者也、然則彼寺者佛法興行古所、當國無雙之禪院也、至于盡未來際、供養無心道人、
爲備來世之資糧、仍寄進狀如件、

嘉曆三年八月廿六日

小此木彦次郎盛光妻紀氏在判

〔長樂寺文書〕(全文ハ明德三年八月十一日ノ條ニ收ム)

一八木沼郷内在家畠 嘉曆三年八月廿六日

當國無雙ノ禪院

惣畠十四町九反新寄進分 小此木彦次郎盛光妻紀氏寄進之

所當四十一貫七百二十二文 除宮地定

(註) 右兩文書八木沼郷内畠ノ廣サ異ナル理由不明、東田嶋村ハ紀氏、新田妙
西ヨリ買得セル事、昨年十一月二日條ニ見ユ。

十月十八日 是歲、是ヨリ先、白雲惠崇、長樂寺住持トナル。是日、惠崇、
大谷道海ノ長樂寺造營ニ殊功アリシヲ賞シ、寺領内ニ散在スル道海ノ
屋敷ヲ安堵セシム。

〔禪刹住持籍〕上野州世良田山長樂寺歴代 第十一世白雲諱惠崇、諡佛頂禪師、嘉曆三年戊辰入寺、
歲六十六、住院六年、

〔長樂寺文書〕

宛給 大谷四郎入道々々海寺領内所々屋敷等事、

右屋敷等者、任先々長老宛文、雖無知行相違、依住持遷替、重所成安堵也、爰道海令遂
一寺造營、當國那波郡飯塚郷并小角田畠於永代買得之、寄進當寺之間、所被成安堵
御教書也、然間依可被行殊賞、自先々所宛給屋敷等、有限地子之外者、自元無公事上、
臨時非法公事等聊不可懸之、若又子孫等中、就公私犯罪科雖被行其咎、於道海跡屋

先々長老ノ宛文、道海長樂寺ヲ造營シ、土地ヲ寄進ス

嘉曆三年

三三三

敷等并資財物者所殘子孫等可相傳道海跡者也、就中致子々孫々敷小過可被賞勞
功然則代々相續長老可被存此旨候、仍宛狀如件、

嘉曆三年十月十八日

長樂寺住持惠宗 御判

(註) 大谷道海ノ長樂寺造營ニ殊功アリシハ元德四年三月十九日ノ條ニ明カ
ナリ。

十一月八日 大谷道海、先ニ其ノ女由良景長妻紀氏ノ名ヲ以テ、新田朝
兼及義貞ヨリ買得セル新田庄八木沼郷ノ宅畠、新田頼親ヨリ買得セル
同庄村田郷ノ宅畠田、新田覺義ヨリ買得セル同庄下江田村赤堀ノ田宅、
及ビ、同庄西谷村ノ宅畠田ヲ長樂寺ニ寄進ス。

〔長樂寺文書〕

奉寄進 世良田長樂寺、上州新田庄八木沼郷内在家拾貳間畠貳拾五町壹段、同庄
村田郷内在家壹間畠壹町貳段田壹町柒段、下江田村内赤堀在家壹間田參町肆
段小、同庄内西谷村在家四間畠捌段田陸町事、
右田畠在家等者、以由良孫三郎景長妻名字、買得彼地申給安堵御下知、道海所奉寄
進於當寺也、隨而備進沽券拾肆通安堵狀拾壹通上者、於公方申成御寄進狀、可被備

道海寄進
ノ志ニヨ
ラツテ土
地ヲ買得
ス

後日龜鏡候、但彼所領等者、道海自元依寄進之志買得之上者、景長妻聊不可申違亂、
致于盡未來際、所奉寄進三尊^(至カ)本尊也、仍狀如件、

嘉曆三年十一月八日

大谷四郎入道々海 在判

〔長樂寺文書〕(全文ハ明徳三年八月十
一日ノ條ニ收ムル目錄)

一八木沼郷内在家畠下江田村内赤堀在家一字

惣畠十五町二反 所當五十一貫五百七十三文此内三十三貫四百文ハ出作分

西谷村在家等事 嘉曆三年十一月八日

田畠十一町九反 所當員數不見之 大谷四郎入道々海寄進之

(註) 八木沼郷内在家十二軒、畠二十五町一段トアルハ、朝兼ノ沽却セル正和三
年五月二十八日附ノ在家三軒、畠五町六段、翌年二月二十二日附ノ在家二軒、
畠三町八段、義貞ノ沽却セル文保二年十月六日附ノ在家七軒、畠十五町七段
ノ合計ナリ。各日附ノ條參照。文保二年十月六日(正八十月十八日)正和二年十二
月二十一日條參照。西谷村ノ宅畠田ハ、文保二年十月六日源義氏ノ沽券ト
相當スル様ナレドモ宅畠田ノ數量ト異ル。

嘉曆四年・元德元年(八月二十日改)己巳(二九八九)

四月八日 三善貞廣、上野佐貫莊内弘願寺寺領ヲ長樂寺ニ寄進ス。

〔長樂寺文書〕

四月十三日 長樂寺住持惠崇、大谷道海ヲシテ新田庄八木沼、田嶋、堀口等ノ在家ノ政所職ヲ知行セシメ、其ノ子孫ニ繼承セシム。

〔長樂寺文書〕

道海所持政所職事、

上野新田庄内八木沼内在家、一字松房在家、一字五郎太郎入道か跡、

三間一字後藤四郎入道、一河原島一丁、

此在家等者、至于道海以後者、永代爲彼職、可孫四郎吉宗知行、

右件條、云八木沼在家、云同庄内堀口田嶋在家、云當國那波郡内飯塚郷、如此所、在家等於大谷四郎入道々海買得之、自上御寄進之狀申副所寄進當寺也、於今政所職八木沼田嶋堀口等者、依彼功、於政所職在家者、道海可知行、但此在家等、沽券於自上御下文者、政所職相副可傳持、仍至于子々孫々後、長老モ不可被背此旨之狀如件、

嘉曆四年卯月十三日

住持

六月二十三日 信濃ノ市川氏ノ人、尼せんかう、大井田女子及ビ其ノ他

孫四郎吉

政所職

ノ子女ニ高井郡西條内ノ田宅ヲ讓ル。

〔市河文書〕

(羽前酒田市本
間光正氏所藏)

しなの、國たか井のこほりにしてう内、

ゆつりわたすこともになかの、うは御せんよりゆつり給候中の、ちうたゆふかさいけ、田五反、ならひにしくみのかしかさわの村事、

一六郎分そうりやうしきとして、つき御くたしふみあいそゑて、ゆつるところなり、一八郎分(中略)以下各條横ニ並ブルモ、一八郎分(中略)一十郎分(中略)一井上女子分(中略)一つのかわの女子分(中略)

一大井田女子分かしかさわに田二百かりゆつる、一この、ちはそうりやうにかへすへし、一ほしなの女子分(中略)一しかの又三郎分(中略)

右このところはめんく、にゆつる也、しやうをかきをくへしといへとも、たいたい一しに書あたるあひた、めんく、にさかいをたてん事わつらひたるより、一しにかきをくところなり、このむねをま□で、六郎をそうりやうとして、ちきやうせしむへし、よてゆつり狀如件、

嘉曆四年六月廿三日

あませんかう

大井田女
子分

のちのために、あましひつをそうるところ也

(註) 元亨元年十月二十四日ノ條參照。

是歲 山名氏ノ外族、上野世良田ニ生レタル南海寶洲、七歳ニシテ、長樂寺單寮桃源ニ就キテ度ヲ受ク。

〔正統下南海和尚傳〕

師諱寶洲、號南海、上野州良田人也、姓源、爲累世大將之一家也、甫七齡、而隨長樂單寮桃源勤禪師而受度、(中略長)時師外族山名左京兆任伯州太守、嚮慕師德、建立伽藍凡三所、開道場初少室山少林寺、次報光孝寺、後作州大義山理濟寺、師所草創也、四十而視簣於長樂、一香爲桃源、未轉藏前此寺之耆舊兩三輩夢之同也、先師法照禪師端居丈室、不幾師公文到也、耆舊等拍手曰、南海和尚便是法照禪師再來也、四十七而領京師萬壽公牒、五十四住東福、(符號)住後歸作之理濟、養病入滅六十有二也。

〔本朝高僧傳〕 釋寶洲號南海、上野世良田人、姓源、山名種族也。

元德二年庚午 (一九九〇)

四月二十一日 新田滿義(世良)、曾祖父新田賴氏ノ菩提ノ爲ニ長樂寺ニ寄進スルノ目的ヲ以テ、新田庄小角郷内ノ畠ヲ大谷道海ニ沽却ス。

桃源勤禪師

法照禪師ノ再來

〔長樂寺文書〕

永代沽渡、上野國新田庄滿義所領小角郷内畠貳町壹段、所當合拾肆貫文也、在所觀音堂西五郎跡、新畠也合直錢柴拾貫文者。

右件畠者、大屋四郎入道々海買得之、世良田長樂寺仁、可奉永代寄進之由、依半之沽渡、畢然之間、及子孫於彼所不可有違亂、仍之狀如件、(中カ)

元德貳年四月廿一日

源滿義(花押) (28)

〔長樂寺文書〕

奉世良田長樂寺永代寄進、上野國新田庄滿義所領小角郷内畠貳町壹段、壹年所當拾肆貫文也、在所觀音堂西五郎跡、新畠也

右件畠者、故爲參州妙應菩提、彼寺仁奉永代寄進者也、然者爲彼菩提云、氏寺云、於彼地者、至于子孫、不可致違亂、若背此之旨、輩者可爲不孝仁、仍自筆之狀如件。

元德貳年卯月廿一日

源滿義 在判

〔長樂寺文書〕(觀應三年三月十一日、貞治四年七月五日、日明德三年八月十一日、條ノ目錄三通)

八月二日 新田滿義、長樂寺修理用途トシテ、武藏比企郡南方將軍澤ノ田宅ヲ寄進ス。

參州妙應

元德二年

二二九

〔長樂寺文書〕

武藏將軍

世良田長樂寺爲修理用途奉永代寄進武藏國比企郡南方將軍澤郷内二子塚入道跡、在家壹字、并田參段、毎年所當八貫文事、

氏寺

右依爲氏寺、爲未代修理、永代奉寄進者也、然者雖及子孫、不可致違亂、背此之旨輩者、永可爲不孝仁、仍自筆之狀如件、

元德二年八月二日

源滿義 在判

十二月二十三日 新田滿義、長樂寺修理用途トシテ寄進スル目的ヲ以テ、新田庄小角郷ノ宅畠ヲ大谷道海ニ沽却ス、

〔長樂寺文書〕

氏寺

世良田長樂寺爲修理用途、奉永代寄進、上野國新田庄内小角郷内百姓平三郎作畠壹町五段、同郷内又太郎入道跡畠壹町、毎年所當合拾伍貫文事、

右依爲氏寺、爲末代修造、永代奉寄進者也、然者雖及子々孫々、所不可致違亂、若背此之旨輩者、永爲不孝之仁、滿義跡雖爲一寸一步不可知行、仍爲後代龜鏡、自筆之狀如件、

元德二年庚午十二月廿三日

源滿義 在判

〔長樂寺文書〕

永代沽渡滿義所領上野國新田庄小角郷内、百姓平三郎在家壹字、畠壹町五段、毎年所當拾貫文、同郷内又太郎入道跡畠壹町、所當五貫文直錢事、

合樂拾五貫文者、

右平三郎作、在家壹字、畠壹町伍段、并又太郎入道跡畠一町所當合拾五貫文所、於大谷入道々海永代仁買得之、爲長樂寺修造所奉寄進也、然者於彼畠等者、至于子々孫々不可致違亂、若背此之旨輩者、永爲不孝之仁、滿義跡雖爲一寸一步不可知行、仍爲後年以自筆沽卷之狀如件、

元德二年庚午十二月廿三日

源滿義 在判
此正文者在道海之許

〔長樂寺文書〕

(觀應三年三月十一日、貞治四年七月五日、明徳三年八月十一日、條ノ目錄三通)

元德三年・元弘元年辛未(八月九日改) 二九九二

五月十一日 天皇ノ討幕ノ御企、再度發覺ス。是日、幕府、僧圓觀等ヲ捕ヘ、尋テ、七月十一日、俊基ヲ捕フ

七月十二日 平時雄、武藏男衾郡小泉郷ノ田宅ヲ、又、翌十三日、高山重朝、上野那波郡善養寺ノ田宅ヲ、由良景長妻紀氏ニ沽却ス。

元德三年

二四一

〔長樂寺文書〕

武藏國男衾郡小泉郷内田在郷□□□□注次第文事注文ノ本文略ス

右注文如件

元德三年七月十二日

平時雄花押

〔註〕 本文書ノミニテハ沽却ノ由不明ナレドモ、明年三月十九日條ヲ參照シテ知ルベシ。

〔長樂寺文書〕

由良孫三郎景長妻紀氏申、上野國那波郡善養寺内田肆町參段半、在家貳宇坪付在別紙

事、右田在家者、高山彌四郎重朝所帶也、去七月十三日限永代沽却之由紀氏依申之、爲糺明遣召符之處、如重朝去月廿日請文者、放券之條勿論云々、爰當所私領之旨前々沙汰畢、此上不及異議、然則於彼田在家者、紀氏可令領掌、次公事間事、雖載證文、有無宜守先例者、依錄倉殿仰下知如件、

元德三年十一月廿三日

(左カ)北條時方
右馬權頭平朝臣 在御判
(余權守時)
相模守平朝臣 在御判

〔長樂寺文書〕

(觀應三年三月十一日、貞治四年七月五日、日明德三年八月十一日條ノ目錄三通)

〔註〕 明年三月十九日條參照。

八月二十四日 是夜、天皇、宮闕ヲ出デ、奈良ニ潛幸シ、尋デ二十七日、笠置山ニ遷幸シ給フ。尋デ、楠木正成、勅ヲ奉ジテ河内赤坂城ニ據リ義兵ヲ舉グ。

九月三十日 是ヨリ先、二十日、持明院統ナル光嚴院、踐祚シ給フ。又大佛貞直、金澤貞冬、足利高氏等ノ幕府軍、笠置ヲ攻圍シ、二十九日、笠置、陷ル。是日、天皇、京都ニ還幸シ給フ。

十月二十一日 楠木正成ノ赤坂城、陷ル。大塔宮、正成等ト共ニ所在ヲ晦シ給フ。

元弘二年(正慶元年)(四月二十一日改)壬申(二九九二)

三月七日 天皇、京都出御、隱岐ニ向ハセ給フ。尋デ四月一日、隱岐ニ着御アラセラル。

三月十九日 由良景長妻紀氏、去年買得セル武藏男衾郡小泉郷ノ田宅、上野那波郡善養寺ノ田宅ヲ長樂寺修理用途トシテ寄進ス。

元弘二年

二四三

〔長樂寺文書〕

寄進 世良田長樂寺

武藏國男衾郡内小泉郷内在家貳拾柒間田貳町陸段、上野國那波郡内善養寺高山彌四郎重朝領地内在家二字田四町三段半事

右田島在家等者、以二通沽券、申賜二通安堵（狀原カ）當知行無相違、爲修造料所奉寄進長樂寺也、當寺者禪院最初之古所、當國無雙之寺院也、去正和年中灰燼之時、既可爲荒廢地之處、氏女之親父道海發大願、不申公方御助成、不成國土費勞、造營（全カ）、若于佛開堂舍、既令遂一寺之造功畢、爰適雖致大功、依無料足且堂舍等及破損、然間氏女發大願宛、修造料足、至于盡未來際所奉寄進彼田地等也、仍狀如件

元德四年三月十九日

由良孫三郎景長妻紀氏女 在判

（註）正和二年十二月二十一日、去年七月十二日條參照。

是冬 楠木正成、赤坂城及千早城ニ據リテ再、ヒ兵ヲ舉ゲ、六波羅軍トノ間ニ交戦シテ年ヲ越ユ。尋テ護良親王、亦吉野ニ兵ヲ舉ゲ給フ。

禪院最初ノ古所、正和年中、燒ケテ盡力道海ノ盡

第二 新田義貞公篇

元弘三年（正慶二年）癸酉 二九九三

正月二十九日 鎌倉ノ大軍、西上ス。即チ、是日、二階堂道蘊入洛ス。又、是頃、阿蘇治時、大佛高直、名越宗心等、大軍ヲ率キテ上洛シ、三軍ニ部署シテ官軍ヲ攻ム。當時、大番衆トシテ在洛セシ新田一族（義貞是ヲ統率、セシナルベシ）、里見一族等、大佛高直ニ率キラレテ大和道ヲ南進ス。山名一族等、名越宗心ニ率キラレテ紀伊道ニ向フ。

〔續史愚抄〕卷十 廿九日甲午、出羽守入道道蘊二階、自鎌倉入洛、○道平

〔楠木合戦注文〕正慶二年分

河内道

大將軍遠江彈正少弼殿、治時 軍奉行長崎四郎左衛門尉高眞、大手

大和道

大將軍陸奥右馬助殿、軍奉行工藤二郎右衛門尉高景、但此外出羽入道爲使節向之。

紀伊手

大將軍名越遠江入道殿、軍奉行安原藤内右衛門入道圓光、

河内道

河内、和泉、攝津、美濃、加賀、丹波、淡路、

大和道

山城、大和、伊賀、丹後、但馬、伯耆、播磨、近江、

紀伊道

尾張、美作、越前、因幡、備前、備中、備後、紀伊、安藝、阿波、伊豫、

大番衆 紀伊手

佐貫一族、江戸一族、大胡一族、高山一族、足利藏人二郎跡、山名伊豆入道跡、寺尾入道跡、和田五郎跡、山上太郎跡、

一宮檢校跡、嘉加二郎太郎跡、伊野一族、岡本介跡、重原一族、小串入道跡、連一族、小野

里兵衛尉跡、多相宗次跡、瀬下太郎跡、高田庄司跡、伊南一族、荒卷二郎跡、高井余三跡

大番衆 大和道

新田一族、里見一族、豊嶋一族、平賀武藏二郎跡、飽間一族、園田淡路入道跡、綿貫三郎

大番衆ノ
多クハ上
野住人ナ
高山氏
山名氏

新田氏里
見氏飽間
道氏等大和
進ム

新田義貞
此中ニ在
ベリシナル

義貞ハ源
名家嫡流
名家ナリ

入道跡、沼田社別當跡、伴田左衛門入道跡、白井太郎跡、神澤一族、綿貫二郎右衛門入道跡、藤田一族、武二郎太郎跡、

閏二月一日 去月二十二日、河内道ニ向ヘル阿蘇治時、赤坂城ヲ攻ム。

二十七日、大和道ニ向ヘル軍亦、千早城ヲ攻ム。是日(閏二月一日)、赤坂城陷ル。

又、是日ヨリ、二階堂道蘊、吉野攻撃ヲ開始ス。尋デ吉野城陷ル。護良親王、

高野ニ匿レ給フ。全幕府軍、千早城ニ集ル。

閏二月二十四日 天皇、隱岐ヲ脱出シ給フ。尋デ、名和長年、天皇ヲ船上

山ニ迎ヘテ守護シ奉ル。

三月十一日 是頃、新田義貞、千早城ノ攻圍軍中ニアリ。大塔宮護良親

王、討幕ノ令旨ヲ賜フ。義貞、上野ニ歸國シテ舉兵準備ヲナス。

〔参考太平記〕卷第七 新田義貞申賜大塔宮令旨附宇都宮攻千劍破城事

上野國住人、新田小太郎義貞ト申ハ、八幡太郎義家十七代當作二十代、蓋行三七字、後胤、源家嫡流

ノ名家ナリ、

○毛利家、金勝院、天正本并云、義貞ハ、足利判官義康兄、大炊助義重末孫、新田六郎

頼氏カ毛利家本作朝氏ニ爲得、系圖作三六郎太郎朝氏、長男ナレハ、清和天皇十五代後胤、義家九代ノ孫ナリ、

九代、金勝院本、作二十代、爲得、按三系圖、義貞者義家十代孫、清和帝十六世苗裔也。

義山眞金剛 國軍手ニ攻 舉アリテス 義志ニ

然トモ平氏世ヲ取テ、四海皆威ニ服スル折節ナレハ、カナク關東ノ催促ニ從テ、金剛山ノ搦手ニソ向ハレケル、爰ニ如何ナル所存カ出來ニケン、或時執事船田入道義昌ヲ近ツケテ宣ヒケルハ、古ヨリ源平兩家朝家ニ仕ヘテ、平氏世ヲ亂ル時ハ、源家はヲ鎮メ、源氏上ヲ侵ス日ハ、平家はヲ治ム、義貞不肖ナリトイヘトモ、當家ノ門楣トシテ、普代弓箭ノ名ヲ汚セリ、毛利家、天正本云、然トモ身ノ不肖ナルニ依テ、榮枯ヲ易テ、久シク天下ノ權ヲ棄、遺恨ノ次第ニ非スヤサレハ、家運再興ノ事所存ニカケスニハ非ス、然トモ此比ハ關東ノ威風ニ勝テ、下回ニ本文、而ニ今相模入道ノ行跡ヲ見ルニ、滅亡遠キニアラス、我本國ニ歸リテ義兵ヲ舉、先朝ノ宸襟ヲ休メ奉ラント存スルカ、勅命ヲ蒙ラテハ叶フマシ、如何シテ大塔宮ノ令旨ヲ賜リテ、此素懷ヲ達ヘキト問給ヒケレハ、船田入道畏テ、大塔宮ハ此邊ノ山中ニ忍テ、御座候ナレハ、義昌方便ヲ廻シテ、急テ令旨ヲ申出シ候ヘシト、事安クニ領掌申テ、己カ役所ヘソ歸ケル、其翌日船田己カ若黨ヲ三十餘人、毛利家本、作三十四人、野伏ノ姿ニ出立セテ、夜中ニ葛城峯ヘ上セ、我身ハ落行勢ノ眞似ヲシテ、朝マタキノ霧隱ニ、追ツ返ツ半時許同土軍ヲソシタリケル、宇多内郡ノ野伏トモ是ヲ見テ、御方ノ野伏ソト心得、力ヲ合センタメニ、餘所ノ峯ヨリ下合テ、近附タリケル所ヲ、船田カ勢ノ中ニ取籠テ、十一人マテ生捕テケリ、船田此

被論言 敷言ヲ奉

生捕共ヲ解救シテ、藩ニ申ケルハ、今汝等ヲタハカリ搦取タル事、全ク誅セン爲ニアラス、新田殿本國ヘ歸テ、御旗ヲ舉ントシ給フカ、令旨ナクテハ叶フマシケレハ、汝等ニ大塔宮ノ御座所ヲ尋問シタメニ、召取ツルナリ、命惜クハ案内者シテ、此方ノ使ヲツレテ、宮ノ御座アナル所ヘ參レト申レハ、天正本云、船田吉野十津河ノ樵夫、草薙ヲ一兩人囚テ、宮ノ御在所ヲ實問ケレハ、初ハ申サリケルヲ、事ノ由シカシカト謂テ、野伏共大ニ悅テ、其御意ニテ候ハ、御在所ヲ聞セスハ、首ヲ斬ヘシト申ケレハ、下同ニ本文、野伏共大ニ悅テ、其御意ニテ候ハ、最安カルヘキ事ニテ候、此中ニ一人暫ノ暇ヲ賜リ候ヘ、令旨ヲ申出シテ、進ラセ候ハント申テ、残り十人ヲハ留置、一人宮ノ御方ヘトテソ參リケル、今ヤ今ヤト相待處ニ、一日有テ令旨ヲ捧テ來レリ、開テ是ヲ見ルニ、令旨ニアラテ、論旨ノ文章ニ書レタリ、其詞云、
被論言、倭敷化理萬國者、明君德也、撥亂鎮四海者、武臣節也、頃年之際、高時法師一類、蔑如朝憲、恣振逆威、積惡之至、天誅已顯焉、爰爲休累年之宸襟、將起一舉之義兵、歡感尤深、抽賞何淺、早運關東征罰之策、可致天下靜謐之功、者、論旨如此、仍執達如件、
元弘三年二月十一日、神田本開、三年毛利家、金勝院、天正本、作二年、非也、二月當、作三月、按、第六卷云、二階堂道、龜、正月晦日、發、京向、吉野、云云、按、二月十八日、道繼、吉野、城、矢合、因考、之、二月十日、
一日、大塔宮猶在吉野、然則今所謂二月十一日賜令旨者、非也、且第十卷、義貞舉義兵一段云、三月十一日賜令旨云云、與此相離、第十卷爲得、

左少將 金勝院本、作藏人、左少辨宣爲奉、

新田小太郎殿

繪旨ノ文章、家ノ眉目ニ備フヘキ繪言ナレハ、義貞斜ナラス悦テ、其翌日ヨリ虛病シテ、急キ本國ヘソ下ラレケル、宗徒ノ軍ヲモシツヘキ勢トモハ、兎ニ角ニ事ヲヨセテ、國々ヘ歸リヌ、

(註) 此ノ時ニ義貞ノ拜受セシハ繪旨ニアラズシテ、令旨ナリシナルベシ。然レドモ大塔宮ノ令旨今傳ラズ。又、日附モ諸書異レドモ、太平記卷十、舉兵ノ條及ビ、前後ノ事情ヨリ推シテ、シバラク本日ニ掲グ。三月十五日條參照。繪旨ハ後日拜受セシモノナルベシ。

三月十二日 赤松則村等、京都ニ攻メ入ル。尋テ退ク。

三月十五日 大塔宮護良親王、討幕ノ令旨ヲ結城宗廣ニ賜フ。尋テ、四月二日、令旨、宗廣ノ許ニ達ス。

〔白河證古文書〕

伊豆國在應高時法師等、誇過分之榮耀、頻奉令輕朝威之條、下剗上之至、奇怪之可所被加征伐也、早相催一門以下之群勢、速可追討彼凶徒等、於勸賞者、宜依請者、依大塔宮令旨、執達如件。

下剗上ノ

義貞上野ニ歸國ス

新田小太郎殿

繪旨ノ文章、家ノ眉目ニ備フヘキ繪言ナレハ、義貞斜ナラス悦テ、其翌日ヨリ虛病シテ、急キ本國ヘソ下ラレケル、宗徒ノ軍ヲモシツヘキ勢トモハ、兎ニ角ニ事ヲヨセテ、國々ヘ歸リヌ、

(註) 此ノ時ニ義貞ノ拜受セシハ繪旨ニアラズシテ、令旨ナリシナルベシ。然レドモ大塔宮ノ令旨今傳ラズ。又、日附モ諸書異レドモ、太平記卷十、舉兵ノ條及ビ、前後ノ事情ヨリ推シテ、シバラク本日ニ掲グ。三月十五日條參照。繪旨ハ後日拜受セシモノナルベシ。

三月十二日 赤松則村等、京都ニ攻メ入ル。尋テ退ク。

三月十五日 大塔宮護良親王、討幕ノ令旨ヲ結城宗廣ニ賜フ。尋テ、四月二日、令旨、宗廣ノ許ニ達ス。

〔白河證古文書〕

伊豆國在應高時法師等、誇過分之榮耀、頻奉令輕朝威之條、下剗上之至、奇怪之可所被加征伐也、早相催一門以下之群勢、速可追討彼凶徒等、於勸賞者、宜依請者、依大塔宮令旨、執達如件。

三月十五日

左少將隆貞在判

結城上野入道殿

〔白河證古文書〕

去三月十五日令旨、四月二日到來、謹承了、抑相催一族已下軍勢、可令誅罰伊豆國在應高時法師等凶徒由事、任被仰下旨、云道忠、愚息親朝親光並舍弟祐義廣堯等、及熱田伯耆七郎等、於京都錄倉奥州抽隨分之軍忠、已令征伐彼凶黨等了、且都鄙無二之奉公無其隱候歟、委細之趣、以使者親類伯耆又七朝保令言上候、可有洩御披露候哉、道忠恐惶謹言、

元弘三年五月九日

沙弥道忠請文

(註) 右ノ事實ハ同ジク東國ノ豪族新田義貞ニモ亦親王ノ令旨ヲ賜ハリシヲ想察セシムルニ足ル。

(參考) 是ノ前後、護良親王ノ發セラレシ令旨若干ヲ左ニ掲グ。

〔光嚴院宸記〕(元弘三年六月) 六日自熊野山執進大塔宮令旨、相憑當山旨云々、

〔久米田寺文書〕

和泉國久米田寺住僧等抽御祈禱之忠勤之上者、於當寺並寺領者可被停止官兵狼

元弘三年

二五一

三月十五日
日ノ令旨
四月二日
ニ到來ス

熊野山ニ
令旨ヲ賜
フ
久米田寺
ニ令旨ヲ
賜フ

藉者、依大塔宮二品親王令旨、執達如件、

元弘二年十二月廿六日

左少辨隆貞奉

明智上人御房

〔大山寺文書〕

(附)

伊豆國在應北條遠江前司時政之子孫東夷等、承久以來、採四海於掌、奉茂如朝家之處、頃年之間、殊高時相模入道之一族、匪營以武略藝業、輕朝威、刺奉左遷、當今皇帝於隱州惱宸襟、亂國之條、下尅上之至、甚奇怪之間、且爲加征伐、且爲奉成還幸、所被召集西海道十五箇國內群勢也、各奉歸帝德、早相催一門之軍、率軍勢、不廻時日、可令馳參戰場之由、依大塔宮二品親王令旨、之狀如件、

元弘三年二月廿一日

左少將定恒奉

大山寺衆徒中

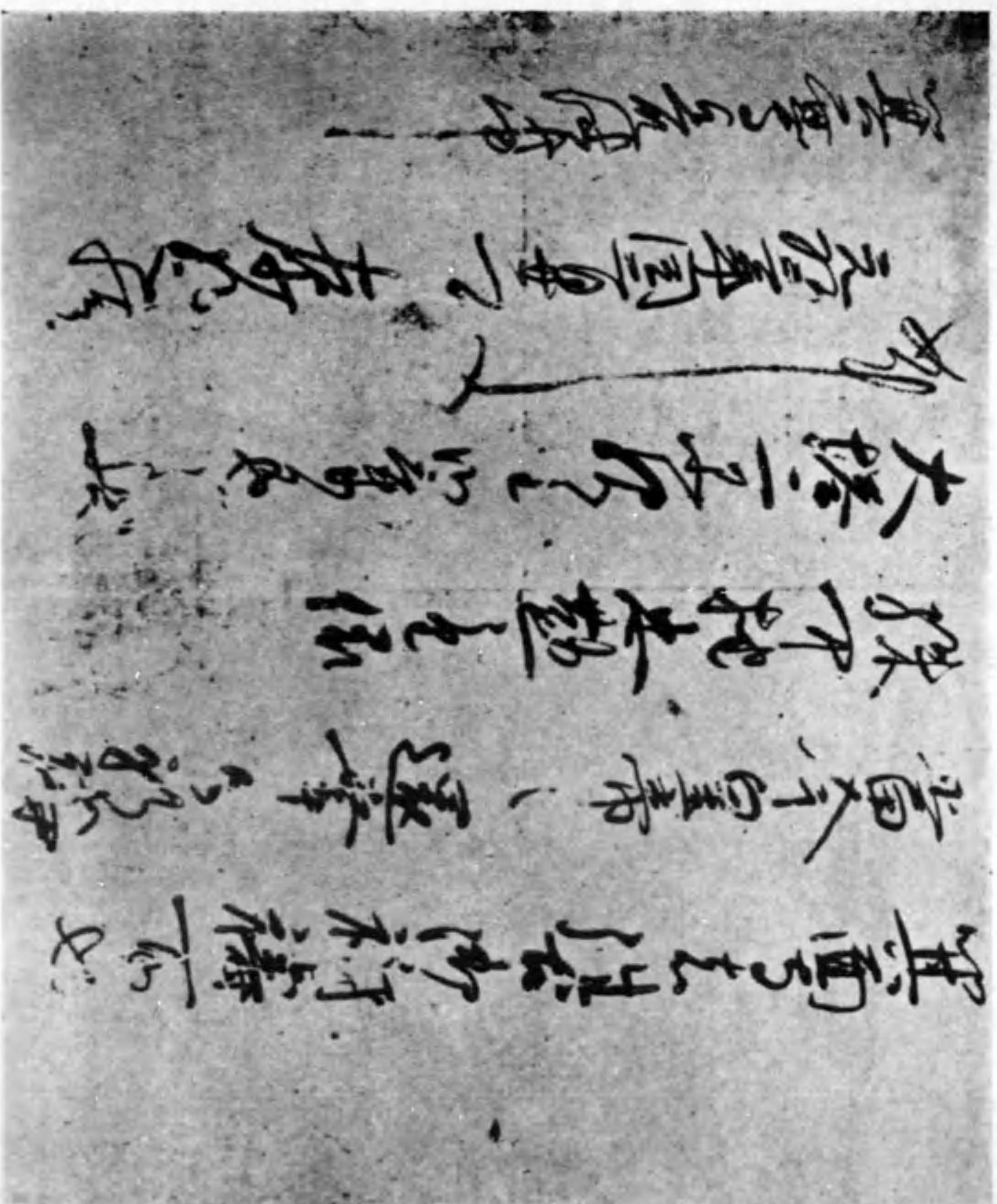
〔瀧安寺文書〕

(元弘三年閏二月廿二日附) 〔萩藩閔閱録〕 (元弘三年四月一日附、左少將奉)

(將隆貞奉、熊谷小四郎宛)

四月一日 討幕ノ綸旨、結城宗廣ニ下ル。尋デ十日、下野ノ地頭等ニ下ル。是頃、同ジク義貞ニモ亦綸旨下リシナルベシ。

〔白河證古文書〕



二六 護良親王令旨

元弘三年四月十七日

結城(龍體)參河前司館

左中將(千種忠顯)(花押)

〔白河證古文書〕(右論旨ニ對スル遺忠書
文五月十八日條ニ收ム)

〔註〕 右ノ事實ヨリ、是頃新田義貞ニモ亦論旨ノ下リシヲ想察セザルベカラズ。

四月二十七日 是ヨリ先、足利高氏、官軍討伐ノ爲、名越高家ト共ニ上洛ス。高氏、豫テ、幕府ニ異心ヲ挾ミ、討幕ノ論旨ヲ乞ヒ、上洛ノ途中之ヲ拜受ス。二十一日、岩松經家ニ舉兵催促狀ヲ發ス。是日、(七叶)高氏、高家、同時ニ京都ヲ發シテ伯耆ニ向ヒ、高家、戰死ス。高氏、丹波篠村八幡社前ニ陣シ、結城・小笠原・島津等ノ全國諸豪ニ義兵ヲ募ル。尋デ、二十九日、同社前ニ、旗ヲ舉ゲテ官軍ニ應ジ、更ニ、島津・大友・阿蘇等ノ諸豪ニ義兵ヲ募ル。鎌倉ニ在リシ高氏ノ子千壽(義詮)隱ル。尋デ五月七日、尊氏、兵ヲ動カシ、赤松則村・千種忠顯等ト共ニ六波羅ヲ攻メテ是ヲ破ル。六波羅南方、北條益時、戰死ス。

高氏上洛

〔梅松論〕上 依之京都より早馬關東へ馳下る間、當將軍尊氏重て討手として御上洛あり、御入洛は同四月下旬なり、元弘元年にも笠置の城退治の一方の大將と

高氏、高時ヲ恨ム

名越高家ト同時ニ上洛ヲ出ツ

高家久我ニ戰死ス

近江鏡驛ニ於テ論旨ヲ披露ス
篠村八幡社前ニ旗ヲ舉グ

して御發向有し也、今度は當將軍の父淨妙寺殿御逝去一兩月の中也、未御佛夏の御沙汰にも及ばず、御悲涙にたへかねさせたまふ折ふしに、大將として都に御進發あるべきと高時禪門申間、此上は御異儀に及ばず御上洛あり、凡大將たる其仁軀もだしがたしといへども、關東今度の沙汰不可然、依てふかき御恨とぞ聞へし、一方の大將は名越尾張守高家、これは承久に北陸道の大將軍式部丞朝時の御胤なり、兩大將同時に上洛有て、四月廿七日、同時に又都を出で給ふ、將軍は山陰道丹波丹後を経て伯耆へ御發向有べきなり、高家は山陽道播磨備前を経て同伯耆へ發向せしむ、船上山を攻らるべき議定有て下向の所久我細手にをいて手合の合戰に、大將名越尾張守高家討る、間當手の軍勢戰に及ずして悉く都に歸上る、同日、將軍は御領所に丹波國篠村に御陳を召る、抑將軍は關東誅伐の事、累代御心の底にさしはさまる、上、細川阿波守和氏、上杉伊豆守重能、兼日潛に論旨を賜て、今度御上洛の時、近江國鏡の驛にをいて披露申され、既に勅命を蒙らしめ給ふ上は、時節相應、天命の授所なり、早々思召立べきよし再三諫申されける間、當所篠村の八幡宮の御寶前にをいて既に御旗を上らる。

〔正文書〕

元弘三年

〔島津文書〕

自伯耆國蒙勅命候之間參候、令合力給者本意候、恐々謹言、

四月二十九日

高氏(花押)

島津上總入道殿

〔阿蘇文書〕〔大友文書〕(前文書ト略同ジ、同日附)

〔光明寺藏書殘篇〕

繪旨重令拜見候、任勅命先日捧領狀之請文、彌可抽軍忠候、以此旨可令奏聞給候、誠惶誠恐謹言、

元弘三年五月二日

前治部大輔高氏

〔篠村八幡宮文書〕

敬白 立願事

右八幡大菩薩者王城之鎮護、我家之廟神也、而高氏爲神之苗裔、爲氏之家督、於弓馬之道誰人不優異哉、依之代々滅朝敵、世々誅凶徒、于時元弘之明君爲崇神爲興法爲利民爲救世、被繪旨之間、隨勅命所舉義兵也、然間占丹州之篠村宿、立白旗於楊木木爰於彼木之本有一之社、尋之村民所謂大菩薩之社壇也、義兵成就之先兆、武將頓速

高氏再日
繪旨ヲ賜
ハル日既
先日領狀
ノ請文ニ
捧グヲ

高氏篠村
八幡宮ニ
立願ス

之靈瑞也、感涙暗催、仰信有憑、此願忽成、我家再榮者、令莊嚴社壇、可寄進田地也、仍立願如件、

元弘三季四月廿九日

前治部大輔源朝臣高氏 白敬

〔將軍執權次第〕(元弘三年) 四月一日足利高氏上洛、即奉隨先帝云、

〔難太平記〕〔參考太平記〕〔保曆間記〕〔神皇正統記〕〔增鏡〕〔其他〕

〔神明鏡〕下 一家ニハ名越尾張守高家竝足利治部大輔高氏ヲ大將トシテ其勢七千餘騎、四月十六日京着ス、翌日ニ高氏ハ船上へ使者ヲ以テ御方ニ參可キ由申入ラレケリ、

〔參考太平記〕卷第十 千壽王落大藏谷、附竹若被害事

足利治部大輔高氏敵ニ成給ヒタル事、道遠ケレハ、飛脚イマタ到來セス、鎌倉ニハ曾テ其沙汰モ無リケリ、懸リシ處ニ、元弘三年五月二日夜半ニ、足利殿ノ二男千壽王殿、大藏谷ヲ落テ、行方シラス成給ヒケリ、是ニ依テ鎌倉中ノ貴賤、スハヤ大事出來ヌルハトテ、騒動斜ナラヌ、京都ノ事ハ道遠キニ依テ、イマタ分明ノ説モ無リケレハ、每事心元ナシトテ、長崎勘解由左衛門入道ト、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、無ニ入道字ニ爲得、此下鎌倉 兵火段、本文及諸異本云、長崎思元子息勘解由左衛門、云云、蓋行ニ入道、諷訪木工左衛門入道ト、兩使ニテ

五月二日
高氏ノ子
義詮ノ子
クマラス

高氏ノ京
著ヲ四月
十六日ト

高氏ノ子
竹若若七
ラ

新田義貞公篇

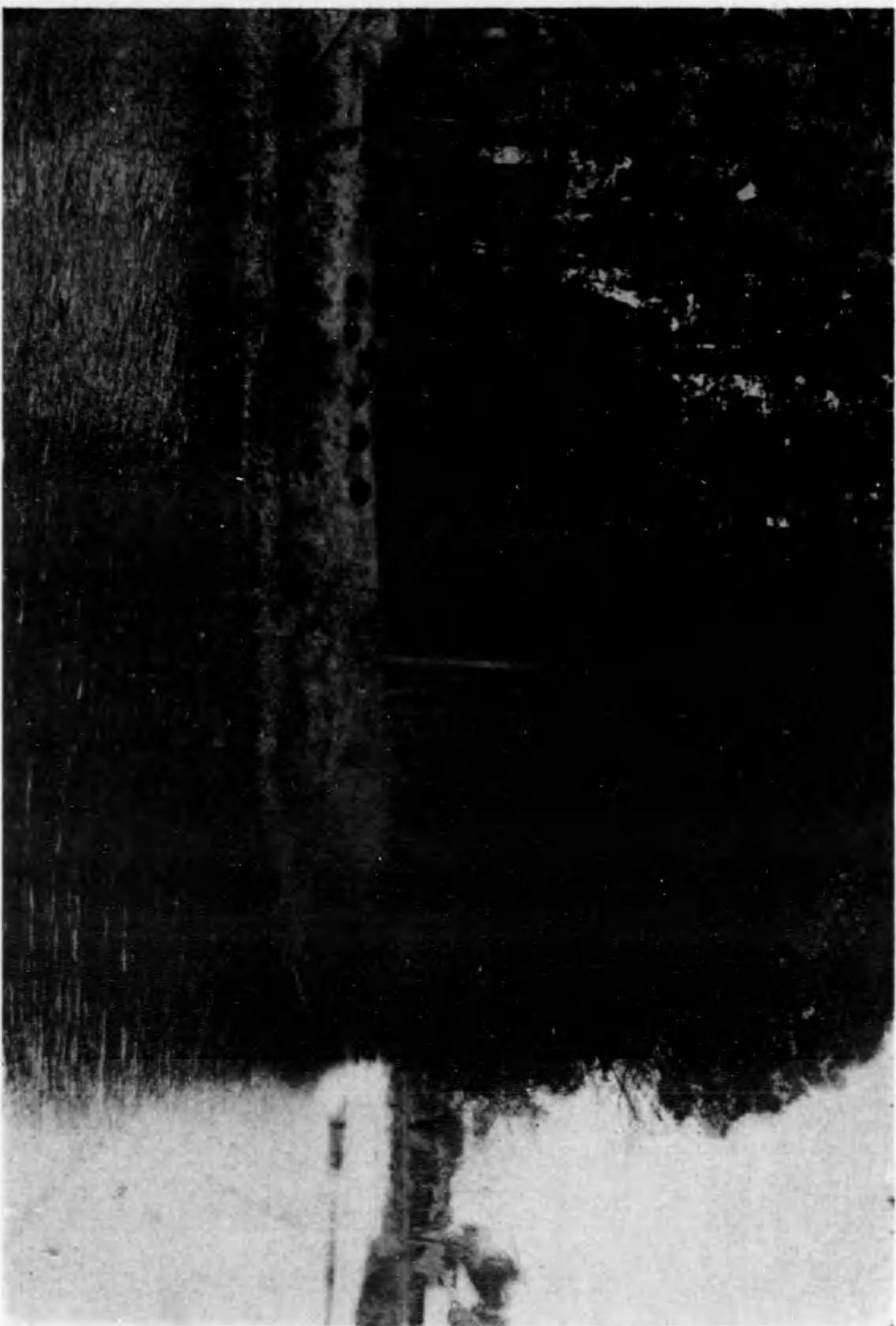
上セラレケル處ニ、今川家、毛利家、北條家、金勝院、南都本云、五月三日兩使發、鎌倉、西源院本作三、日、非也、按、上云、二日夜半、千壽王逃去、由是見之、兩使發、鎌倉、理當、在三日、六波羅ノ早馬、駿河高橋ニテソ行逢ケル、名越殿ハ討レ給フ、足利殿ハ敵ニ成給ヒスト申ケレハ、サテハ鎌倉ノ事モ覺東ナシトテ、兩使ハ取テ返シ、關東ヘソ下リケル、爰ニ高氏ノ長男竹若殿ハ、金勝院本作竹王、非也、下做之、伊豆御山ニオハシケルカ、舅宰相法印良暹金勝院本宰相法印上有、密嚴院字、西源院本通作、泉、系圖作、覺通、而爲、竹若之、母兄、金勝院本又云、良通ノ弟子ニテ、云云、西源院本云、良泉ノ兒ニテ、云々、兒同宿十三人、山伏ノ姿ニ成テ、竊ニ上洛シ給ヒケルカ、浮島原ニテ彼兩使ニソ行逢給ヒケル、諏訪、長崎生捕奉ラント思フ處ニ、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、長崎是非ナク、打留ントシケル、云々、宰相法印、是非ナク馬上ニテ腹切テ、道ノ傍ニソ伏給ヒケル、長崎、サレハコソ、内ニ野心ノアル人ハ、外ニ遁ル、辭ナシトテ、竹若殿ヲ竊ニ刺殺シ奉ル、今出川家、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、竹若ヲ生捕テ、其夜竊ニ刺殺ス、云々、同宿十三人ヲ首ヲ刎テ、浮島原ニ懸テソ通リケル、

五月八日 是ヨリ先、義貞、弟義助ト共ニ幕府ノ徵稅使ヲ誅殺シテ一族ニ背水ノ決意ヲ堅メシム。是日、幕府、新田氏ノ所領新田庄平塚郷ヲ沒收シテ長樂寺ニ寄進ス。是日、義貞一族ヲ率キテ新田庄生品明神ノ社前ニ旗ヲ擧グ。越後ノ一族等來リ會シ、上野守護職ノ軍ヲ破ル。

〔參考太平記〕卷第十 新田義貞舉義兵、附小手指原久米川分陪川原合戰并天狗催



二八 總持寺不動尊像 新田公館址ト傳フル土野 世良田村總持寺ニ藏ス



二九 照明寺 通義師反周濠 新田公館址ト傳フ

三月十一日
賜旨ヲ

義貞舉兵
準備ヲナ

幕府ノ野
使上ニ
世良田ニ
來ル
出雲親
連入道
庄家ヲ
實家ヲ
六萬貫
五日ガ
義貞ノ
義貞ノ
ノ邊ナ
義貞ノ
使ヲ捕
斬

越後勢事

懸リケル處ニ、新田太郎義貞、去三月十一日、第七卷、義貞賜令旨一段令旨末、諸本並云、二月十一日、今作三月、相繼、蓋第七卷誤也、十一日、天正本作、十八日、先朝ヨリ給旨ヲ賜タリシカハ、按、義貞在、金剛山、時、大塔宮賜令旨、其文用、繪旨體、故今稱繪旨、與第七卷、可合見、千劍破ヨリ
虛病シテ、本國へ歸リ、便宜ノ一族達ヲ竊ニ集テ、謀反ノ計略ヲ運サレケル、懸ル
企有トハ思ヒ寄ス、相模入道、舍弟四郎左近大夫入道ニ俗名泰家、法名慧性、後還俗改名時興、十萬餘騎ヲ
差副テ、京都へ上セ、畿内西國ノ亂ヲ鎮ムヘシトテ、武藏、上野今出川家、北條家、南都本作、相模、安房、上
總毛利家本
作、下總、常陸、下野六箇國ノ勢ヲソ催サレケル、其兵糧ノ爲トテ、近國ノ庄園ニ、臨
時ノ夫役ヲソ懸ラレケル、中ニモ新田庄世良田ニハ、有徳ノ者多シトテ、出雲介親
連、黒沼彦四郎入道ヲ使ニテ、黒沼、西源院本作ニ、黒沼、下倣之、六萬貫ヲ五日カ中ニ沙汰スヘシト、堅
ク下知セラレケレハ、使先彼所ニ莅テ、大勢ヲ庄家ニ放入テ、譴責スル事法ニ過タ
リ、新田義貞是ヲ聞給ヒテ、我館ノ邊ヲ、雜人ノ馬蹄ニ懸サセツル事コソ、返々モ無
念ナレ、争カ見ナカラ堪フヘキトテ、數多ノ人勢ヲ差向ラレテ、兩使ヲ忽ニ生捕テ、
出雲介ヲハ禁置キ、黒沼入道ヲハ首ヲ斬テ、同日暮程ニ、世良田ノ里中ニソ懸ラレ
ケル、里中、金勝院
本作、田中、相模入道此事ヲ聞テ、大ニ忿テ宣ヒケルハ、當家世ヲ執テ既ニ九代、
海内悉其命ニ隨ハスト云事更ニナシ、然ニ近代諸異本作、近
年、爲得、遠境動レハ武命ニ隨ハ

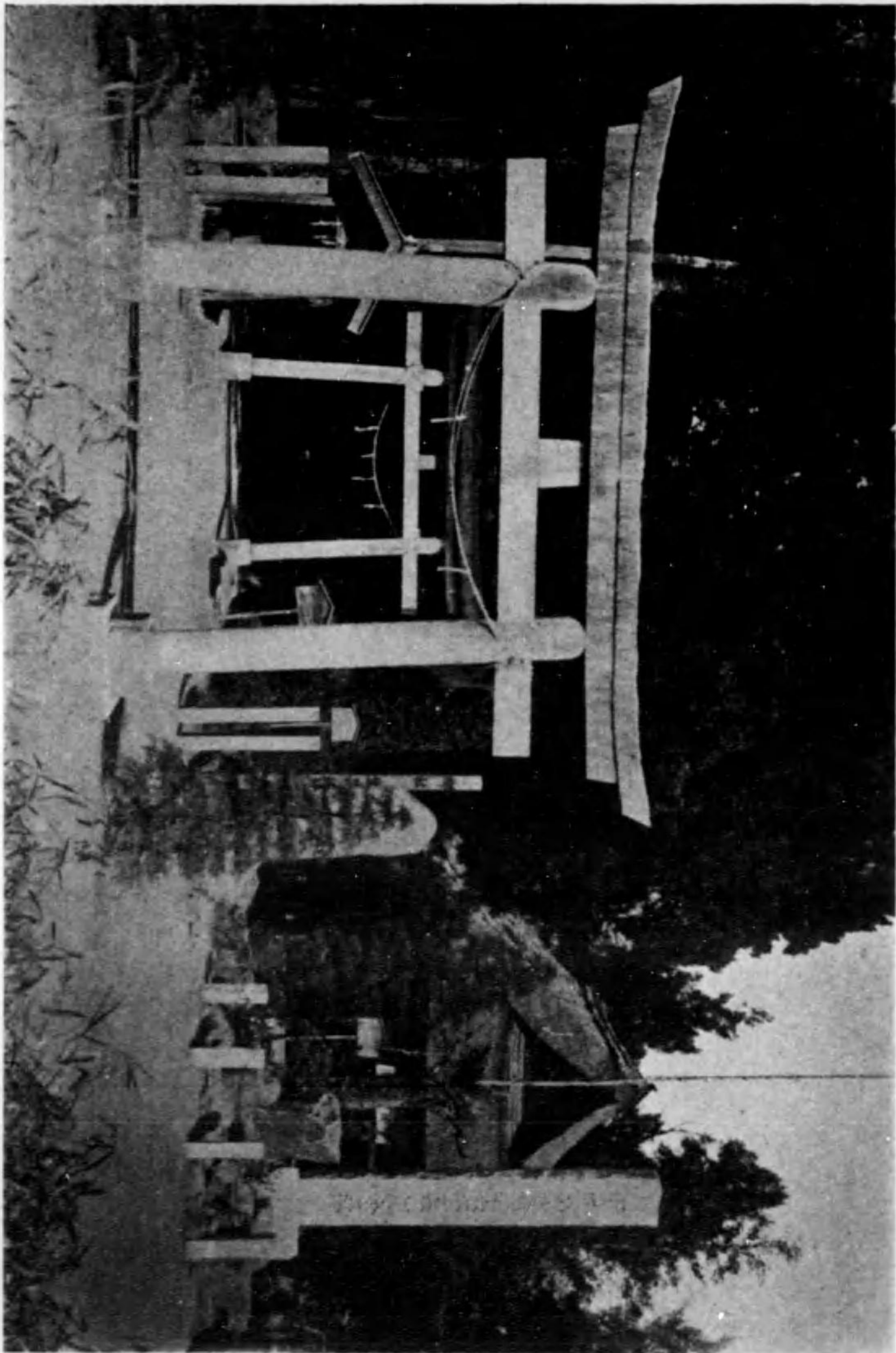
元弘三年

高時、義貞討伐令
新田方ノ
軍議
沼田庄

越後ノ津
張郡

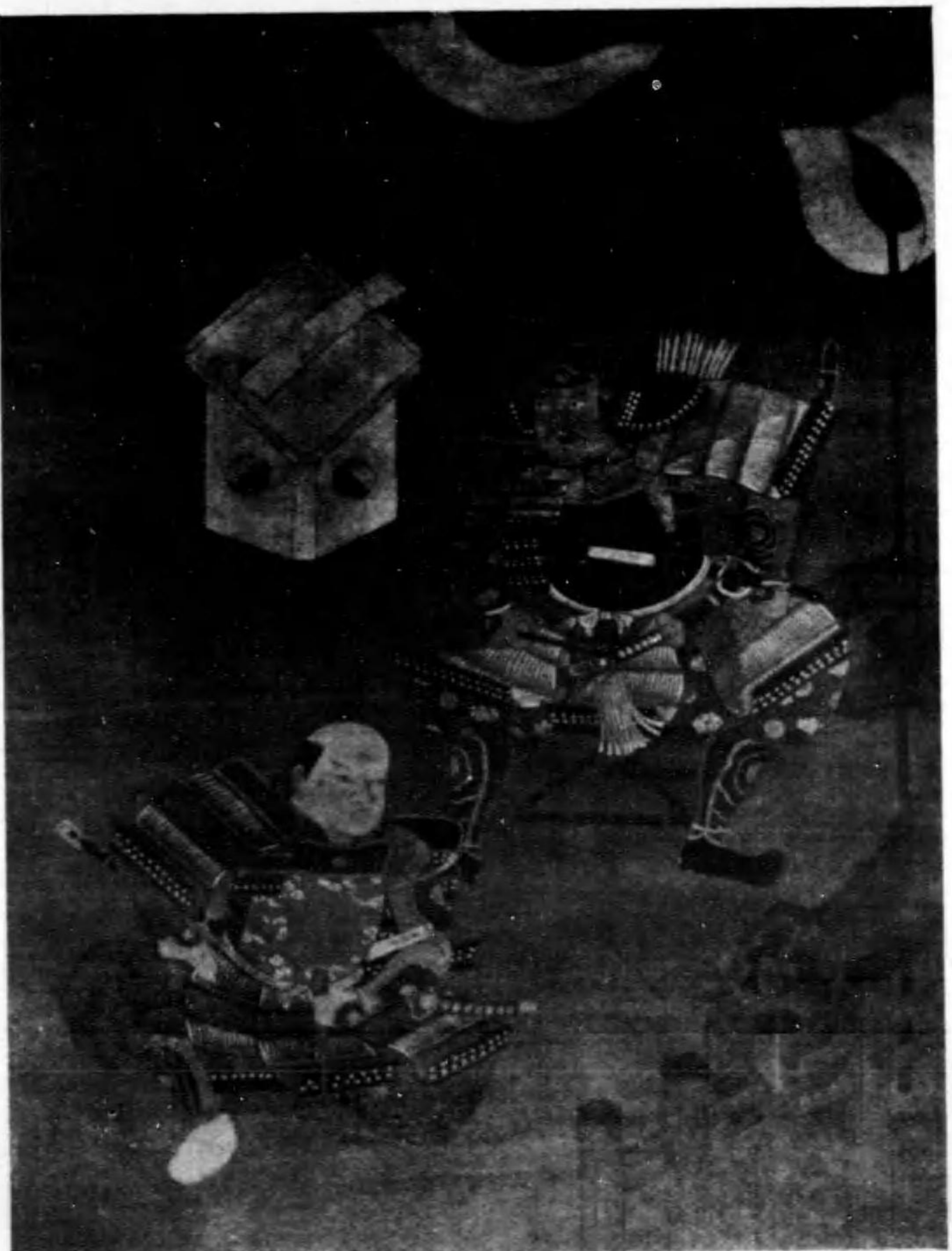
義助殉忠
ヲ主張シ
一族ニ決
意セシム

ス、近國常ニ下知ヲ輕スル事奇怪ナリ、利藩屏ノ中ニシテ、使節ヲ誅戮スル條、罪科輕キニ非ス、此時若緩々ノ沙汰ヲ致セハ、大逆ノ基ト成ヌヘシトテ、即武藏、上野、兩國ノ勢ニ仰テ、新田太郎義貞、舍弟脇屋次郎義助ヲ討テ進ラスヘシトソ下知セラレケル、義貞是ヲ聞テ、宗徒ノ一族達ヲ集テ、此事如何有ヘキト評定有ケルニ、異議區々ニシテ一定ナラス、或ハ沼田庄ヲ要害ニシテ、毛利家、北條家、金勝院、四源院、南都本云、沼田ハ究竟ノ要害ナレハ、城廓ヲ構フベシ、云々、下同、利根河ヲ前ニ當テ、敵ヲ待ント云議モアリ、又越後國ニハ大略當家ノ一族充按、後名鈔、越後無津張郡、然第三十二卷直冬降參吉野一段、諸異本或有云、越後領城郡、或作、越後津張郡者、不レ、其廢置沿革、今不レ可レ盡考、因姑并註焉、満タレハ、津張郡ヘ打超テ、後、上田山ヲ伐塞キ勢ヲ附テヤ防クヘキト意見定ラサリケルヲ、舍弟脇屋次郎義助暫思案シテ、進出テ申サレケルハ、弓矢ノ道死ヲ輕シテ名ヲ重スルヲ以テ義トセリ、就中相模守天下ヲ執テ百六十餘年、當レ作、百十餘年、按、建保七年、實朝被殺、自レ此北條氏權、至元弘三年、百十餘年也、今ニ至マラ武威盛ニ振テ、其命ヲ重セスト云處ナシ、サレハ縱令利根河ヲサカフテ防クトモ、運盡ナハ叶フマシ、又越後國ノ一族ヲ憑タリトモ、人ノ意、不和ナラハ、久シキ謀ニアラス、指タル事モ仕出サヌ物故ニ、此彼ヘ落行テ、新田ノ某コソ、相模守ノ使ヲ斬タリシ咎ニ依テ、他國ヘ逃テ討レタリシナント、天下ノ人口ニ入ン事コソ口惜ケレ、トテモ討死ヲセンスル命ヲ、謀叛人ト謂レテ、朝家ノ爲ニ捨タランハ、無ラン跡



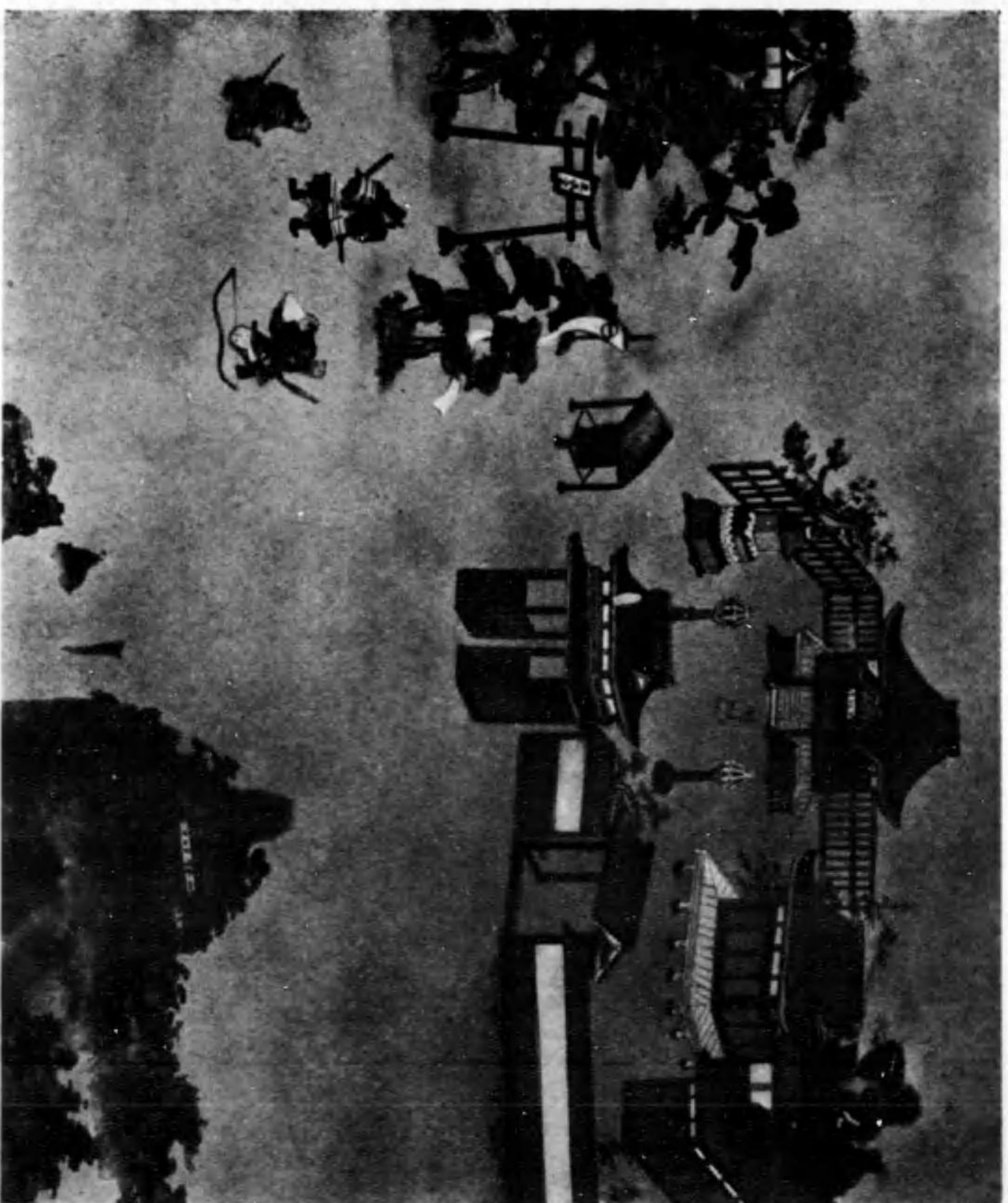
川○ 新田生田神社 上野生品村

三一 義貞公義舉ノ古圖



上野賣泉村脇屋 正法寺藏

三二 生品明神ト不動堂及金山城ノ古圖



上野鳥之郷村西慶寺所藏

宣旨ヲ額
ニ當テ運
命ヲ天ニ
任ス

五月八日
生品明神
ノ前ニテ
旗ヲ擧ゲ
ス懸野へ
打出ル

集ル人々
百五十騎

越後ノ一
族來リ會
ス

マテモ、勇ハ子孫ノ面ヲ悦ハシメ、名ハ路徑ノ尸ヲ清ムヘシ、先タツテ繪旨ヲ下サ
レヌルハ、何ノ用ニカ當ヘキ、各宣旨ヲ額ニ當、運命ヲ天ニ任テ、只一騎ナリトモ、國
中へ打出テ、義兵ヲ擧タランニ、勢附ハ懸テ、鎌倉ヲ攻落スヘシ、勢附スハ、只鎌倉ヲ
枕ニシテ、討死スルヨリ外ノ事ヤアルヘキト、義ヲ先トシ、勇ヲ宗トシテ宣ヒシカ
ハ、當座ノ一族三十餘人、皆此議ニソ同シケル、サラハ懸テ事ノ漏聞ヘヌ前ニ打立
トテ、同五月八日卯刻ニ、生品明神ノ御前ニテ旗ヲ擧、繪旨ヲ披テ、三度はヲ拜シ、笠
懸野へ打出ラル、相隨フ人々、氏族ニハ、大館次郎宗氏家氏、子息孫次郎幸氏、二男彌
次郎氏明、三男彦二郎氏兼、堀口三郎貞滿左馬權頭、舍弟四郎行義、岩松三郎經家政經
里見五郎義胤、脇屋次郎義助、江田三郎光義光義、此下鎌倉合戰段、諸本作行義、今作光義、者恐非也、按江田家譜、行義者有氏子也、後爲三兵部大輔、修理
亮系圖異本或、桃井次郎尙義滿氏、是等ヲ宗徒ノ兵トシテ、自大館至此金勝、西源院本不出、百五十騎ニハ
過サリケリ、此勢ニテハ如何ト思フ處ニ、其日ノ晚景ニ、利根河ノ方ヨリ、馬物具爽
ニ見ヘタリケル、兵二千騎許、馬煙ヲ立テ馳來ル、スハヤ敵ヨト目ニ懸テ見レハ、敵
ニハ非スシテ、越後國ノ一族ニ、里見、鳥山、田中、大井田、羽川ノ人々ニテソオハシケ
ル、義貞大ニ悦テ、馬ヲ控テ宣ケルハ、此事兼テヨリ其企ハアリナカラ、昨日今日ト
ハ存セサリツルニ、俄ニ思ヒ立事ノ候ツル間、告申マテナカリシニ、何トシテ存ラ

元弘三年

大井田遠
江守
五日ニ天
廻狗山伏觸

近國軍勢
集ル
小幡庄

生階明神

五月中旬

新田義貞公篇

二六四

レケルト間給ヒケレハ、大井田遠江守、鞍壺ニ畏テ申サレケルハ、勅定ニ依テ、大義ヲ思召立ル、由承候ハスハ、何トシテ加様ニ馳參ルヘク候、去五日御使トテ、天狗山伏一人、越後國中ヲ、一日ノ間ニ觸廻テ通候シ間、夜ヲ日ニ繼テ馳參テ候、境ヲ隔タル者ハ、皆明日ノ程ニソ參著候ハンスラン、他國へ御出候ハ、暫彼勢ヲ御待候ヘカシト申サレテ、馬ヨリ下リ、各對面色代シテ、人馬ノ息ヲ繼セ給ヒケル處ニ、後陣ノ越後勢、并甲斐、信濃源氏トモ、家々ノ旗ヲ指連テ、其勢五千餘騎、夥敷見ヘテ馳來、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、後陣ノ越後勢、甲斐信濃源氏五千餘騎ハ、小幡庄ニテ追附奉ル、云々義貞義助斜ナラス悦テ、是偏ニ八幡大菩薩ノ擁護ニヨル者ナリ、暫モ逗留スヘカラストテ、(下文十一日) 條ニ收ム

〔上野國神名帳〕 新田郡 廿五座

- 從三位 生階明神 大窪明神
- 從四位下 新池明神
- 正五位上 宿窪明神 櫛事明神 阿波明神 郡玉明神
- 餘社十八座

〔梅松論〕 去程に將軍は君に頼れ奉り給ふよし關東へ聞えければ、皆色をうしなふ夏斜ならす、さる處に、五月中旬に上野國より新田左衛門佐義貞君の味方と

世良田ニ
討出テ陣
ヲハル
承ルニ勅ヲ

上野守護
ト戦ヒテ
勝ツ

鎌倉幕府
新田庄内
平塚郷ヲ
進退ス

五月五日

八幡庄ニ
馳付テ
足利千壽
王來會

して當國世良田に討出て陣をはる、是も清和天皇の御后胤陸奥守義家三男式部大夫義國子息大炊助義重陸奥新判官義康の連枝也、潜に勅を承るに依て義貞一流の氏族皆打立けり、先山名、里見、堀口、大館、岩松、桃井、みな一人當千にあらずといふ事なし、然間當國守護長崎孫四郎左衛門尉、即時に馳向て合戦に及といへども、既に上野の輩殘らず義貞に屬するにこそ、あひさゝふるに及ず引退間、(下文十五日) 條ニ收ム

〔長樂寺文書〕

奉寄 世良田長樂寺、上野國平塚郷事、
右爲當寺領守先例、可致沙汰也者、依仰奉寄之狀如件、
正慶二年五月八日

右馬權頭平朝臣(花押)
相模守平朝臣(花押)

〔保曆間記〕〔増鏡〕〔神皇正統記〕(何レモ五月二十) 條ニ收ム 〔正本文書〕(四月二十七) 日條ニ收ム

〔神明鏡〕下 五月五日、新田小太郎義貞、義助一族卅餘人、宣旨、三度拜之、笠懸野邊打出、其勢僅百五十餘、不過ケリ、越後等騎來、其日二千餘騎成、甲斐信濃源氏五千餘騎、八幡庄馳付、又足利殿若君千壽王殿、上野國二百餘騎打出、上野、上總、常陸、武藏兵一日内、廿餘萬及、

元弘三年

二六五

十一日武藏小手指

義貞忽チ入間川ヲ渡リテ小手指原ノ戰

都本、作「四郎」恐非也、下倣之、高重、毛利家本作「爲基」、金勝院本作「隆泰」或高重、今出川家、西源院、同孫四郎左衛門本、作「基資」下倣之、今出川家、今川家、北條家、南都本、載「同孫三郎」按「長崎家譜」高重者高資子也、今出川家、今川家、北條家、南都本、加治二郎左衛門入道ニ加治、今出川家、北條家、南都本、作「加藤」恐非也、武藏、上野兩國ノ勢六萬餘騎ヲ相副テ、上路ヨリ入間河ヘ向ラル、是ハ水澤ヲ前ニ當テ、敵ノ渡サン處ヲ討トナリ、承久ヨリ以來、東風閑ニシテ、人皆弓箭ヲモ忘タルカ如クナルニ、今始テ干戈ヲ動カス珍シサニ、兵共コトコトシク、此ヲ晴ト出立タリシカハ、馬物具太刀、皆照耀計ナレハ、由由敷見物ニテソ有ケル、路次ニ兩日逗留有テ、同十一日辰刻ニ、武藏國小手指原ニ打臨給フ、按、上云、十日貞將貞國等發、鎌倉ニ云々、今云、逗留於途二兩日、而十一日至小手指原、然則自鎌倉、僅二日而至小手指原也、所謂兩日逗留者、前後兩日爰ニテ遙ニ源氏ノ陣ヲ見渡セハ、其勢雲霞ノ如クニ、幾千萬騎トモ云ヘキ數ヲ知ス、櫻田、長崎諸異本或作「平家兵」是ヲ見テ、案ニ相異ヤシタリケン、馬ヲ控テ進得ス、義貞忽チ入間河ヲ打渡テ、先闕ノ聲ヲ揚、陣ヲ進メ、早矢合ノ鏑ヲ射サセケル、平家モ闕ヲ合セテ、旗ヲ進メテ懸リケリ、初ハ射手ヲ汰テ、散々ニ矢軍ヲシタルカ、前ハ究竟ノ馬ノ足立ナリ、何レモ東國ソタチノ武士トモナレハ、爭カ少モタマルヘキ、太刀長刀ノ鋒ヲソロヘ、馬ノ轡ヲ並ヘ切テ入、二百騎三百騎千騎二千騎、兵ヲ悉テ相戰事、三十餘度ニ成シカハ、

○今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本並云、源平陣ヲ進メ、矢合ノ鏑ヲ射サセケル、初ノ程ハ源氏射手ヲ百騎出シテ射サスレハ、百、金勝院本作「二百」恐非也、平家ニモ二百騎出シテ射サス、平家又千騎ヲ出シテ懸サスレハ、源氏モ二千騎出シテ戰ハシム、源平互ニ兵ヲ増テ相戰、一日ノ中三十餘箇度ニ及、云々、

義貞入間川ニ陣ス、北條軍久米河ニ陣ス

十二日ノ戰

義貞勝利

射サセケル、初ノ程ハ源氏射手ヲ百騎出シテ射サスレハ、百、金勝院本作「二百」恐非也、平家ニモ二百騎出シテ射サス、平家又千騎ヲ出シテ懸サスレハ、源氏モ二千騎出シテ戰ハシム、源平互ニ兵ヲ増テ相戰、一日ノ中三十餘箇度ニ及、云々、

義貞ノ兵三百餘騎討レ、鎌倉勢五百餘騎討死シテ、日既ニ暮ケレハ、人馬共ニ疲レタリ、軍ハ明日ト約諾シテ、義貞三里引退テ、入間河ニ陣ヲトル、鎌倉勢モ三里引退テ、久米河ニ陣ヲソ取タリケル、兩陣相去其間ヲ見渡セハ、三十餘町ニ足サリケリ、何レモ今日ノ合戰ノ物語シテ、人馬ノ息ヲ繼セ、兩陣互ニ篝火ヲ燒テ、明ルヲ遲シト待居タリ、夜既ニ明ヌレハ、源氏ハ平家ニ先ヲセラレシト、馬ノ足ヲ進メテ、久米河ノ陣ヘ推寄ル、平家モ、夜明ハ源氏定テ寄ンスラン、待テ戰ハ、利アルヘシトテ、馬ノ腹帶ヲ固メ、兜ノ緒ヲシメ相待トソ見ヘシ、兩陣互ニ寄合セテ、六萬餘騎ノ兵ヲ一手ニ并セ、陽ニ開テ中ニ取籠ント勇ケリ、義貞ノ兵是ヲ見テ、陰ニ閉テ中ヲ破レシトス、是ソ此黃石公カ虎ヲ縛スル手、張子房カ鬼ヲ拉ク術、何レモ皆存知ノ道ナレハ、兩陣トモニ入亂テ、破ラレス圍マレスシテ、只百戰ノ命ヲ限リニシ、一舉ニ死ヲソ争ヒケル、サレハ千騎カ一騎ニ成マテモ、互ニ引シト戰ケレトモ、時ノ運ニヤヨリケン、源氏ハ繼ニ討レテ、平家ハ多ク亡ヒニケレハ、加治

今出川家、北條家、南都本、前作「加藤」今同本文、相亂

北條軍分
陪ニ退ク

十一日
藤信明
參十五
陪十八
演ノ八
戰ノ日
前

義貞ノ
證判

新田義貞公篇

蓋此上、長崎二度ノ合戰ニ打負タル心地シテ、分陪ヲ差テ引退ク、源氏猶續テ寄ント誤也、シケルカ、連日數度ノ戰ニ、人馬アマリニ疲レタリシカハ、一夜馬ノ足ヲ休メテ、久米河ニ陣ヲ取寄テ、明ル日ヲコソ待タリケレ、(下文、十五日、條ニ收ム)

〔由良文書〕(東京帝大文部所藏)

市村王石丸代後藤弥四郎信明、去五月十一日馳參御方、同十五日於分倍原御合戰仁、依捨身命令分捕頸壹、則入見參畢、同十八日於前濱一向堂前依散々責戰左足股被切破畢、然早給御判爲備後代龜鏡、仍目安如件、

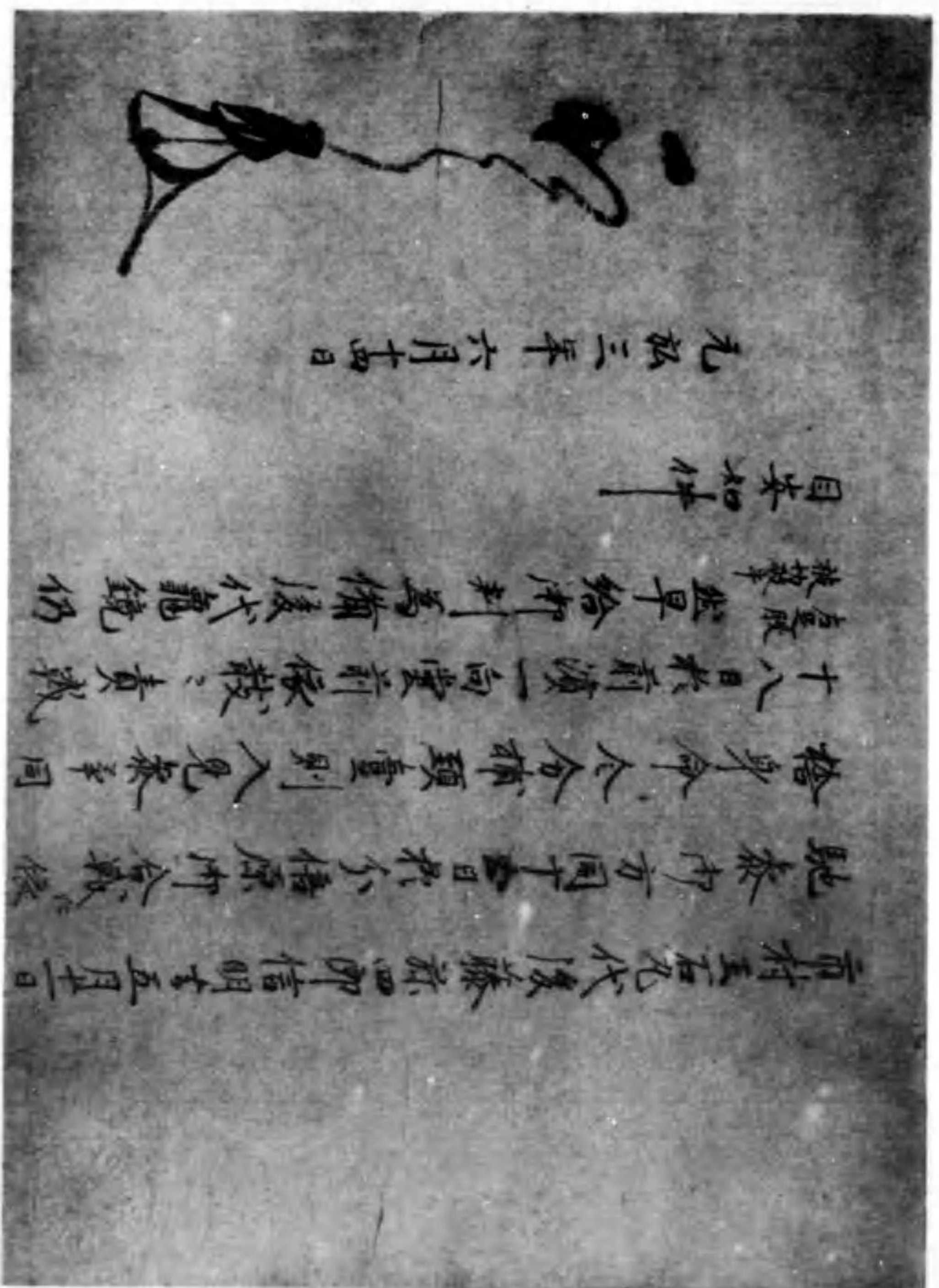
元弘三年六月十四日

承了(新田義貞、花押)

五月十五日 幕府、北條泰家ヲシテ武藏ニ増援セシム。是日、義貞、是ヲ分倍川原ニ攻撃シテ利ナク、堀金ニ退ク。明日、義貞、三浦義勝等ノ援軍ヲ加ヘ、幕府軍ヲ分倍川原ニ撃破ス。幕府方、戰死スル者多シ。六波羅ノ敗報關東ニ達ス。

〔梅松論〕(前文八日、條ニ收ム) 義貞多勢を引卒イ兵して武藏國に攻入間、當國の軍勢も悉從付けるほどに、五月十四日、高時の弟左近將監入道惠性を大將として武藏國に發向

東京帝國大學文學部藏



三三 義貞公證判後藤信明軍忠狀(承了ノ二字、義貞公自筆、)由良文書



三四 飽間氏供養板碑

東京府北多摩郡東村野口徳藏寺藏

十四日北條泰家鎌倉ヲ分ツ
十日分ノ陪河原ノ戰

北條軍敗

飽間盛貞
十五日府中ニ戰死ス

飽間家行
八日村岡ニ戰死ス

塙政茂
六日入間ノ會
川ノ陣ニ來ス

す同日、山口の庄の山野陣を取て翌日十五日、分配關戸河原にて終日戰けるに命を落し疵を蒙る者幾千萬といふ數をしらず、中にも親衛禪門の宗徒の者共、安保左衛門入道道潭、粟田横溝一八郎はら最前一に討死一をしける間、鎌倉勢ことごとく引退く處一に、則大勢せめのぼる間、鎌倉中のさはぎ、只今敵の亂入たらんもかくやとぞおぼえし、(下文十八日 條ニ收ム)

〔德藏寺所藏板碑〕(武藏)

飽間齋藤三郎藤原盛貞生年六廿 勸進玖阿卷陀佛

於武州府中五月十五日令打死

元弘三年 癸五月十五日 白敬

同孫七家行廿三同死飽間孫三郎

宗長卅五於相州村岡十八日討死 執筆遍阿弥陀佛

〔由良文書〕(十一日條) 〔増鏡〕〔保曆間記〕(二十二日條) 〔神明鏡〕

〔塙文書〕(常陸國鹿島郡烟田 村塙又三郎氏所藏)

目安 常陸國塙大和守平政茂申軍忠事、

右爲鎌倉高時入道御對治、大將御發向之間、五月十六日、武藏國入間河御陣馳參陣

元弘三年

々供奉仕、同十九日、極樂寺坂於合戰先手馳向、家人丸場次郎忠邦、怨敵三騎討捕、同山本四郎義長討死之事、徳宿彦太郎、完戸安藝四郎同時合戰之間、被見知、奉抽忠節上者、賜御證判、可被備後胤龜鏡也、目安言上如件

元弘三六月日

承了(義貞)了(花押)(29)

〔萩藩閔録〕(熊谷帶刀藏)

武藏國小四郎直經孫子虎一丸申、親父平四郎直春討死事、

右亡父直春、今年元弘五月十六日、馳參于御方致數々度合戰之刻、同廿日、奉屬于新

田遠江又五郎經政御手、就致軍忠、於鎌倉靈山寺之下討死畢、此等子細者、大將軍御

檢知之上、同所合戰之軍勢、吉江三位律師、齋藤郷房良俊等所見及也、早賜御證

判、爲浴恩賞、恐々言上如件

元弘三年八月日

承了(義貞)了(花押)

(註) 新田遠江又五郎經政ノ系不詳、正和二年十二月二十一日條ノ註、及ビ、延元

々年三月八日、同十六日條ノ相馬文書等ヲ參照。

〔參考太平記〕

卷第(前文ハ十一日)

サル程ニ、櫻田治郎大輔貞國、加治、長崎等、十

二日ノ軍ニ打負テ引退ク由、鎌倉へ聞へケレハ、相模入道舍弟四郎左近大夫入道

慧性ヲ大將軍トシテ、鹽田陸奥入道、安保左衛門入道、城越後守、長崎駿河守時光、佐

藤左衛門入道、安東左衛門尉高貞、横溝五郎入道、南部孫二郎、新開左衛門入道、三浦

若狹五郎氏明ヲ差副テ、鹽田以下至此、金勝院、西源院本、不出重テ十萬餘騎ヲ下サル、十萬、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、及神明

鏡作三其勢十五日夜半許ニ分陪ニ著ケレハ、十五日、毛利家本作三十四日、按神明鏡、五月十四日夜

合戰、義貞敗退、堀金、十五日、三浦至義貞陣、由、此見之、諸本今云、十五日、夜半、者、恐非也當陣ノ敗軍又カヲ得テ、勇進マントス、義貞ハ、

敵ニ新手ノ大勢加リタリトハ思寄ス、十五日夜未明ニ、按、符、夜字、分陪へ押寄テ、関ヲ

作ル、鎌倉勢先究竟ノ射手三千人ヲ勝リテ、三千、西源院、本作三百面ニ進メ、雨ノ降如ク、散々ニ

射サセケル間、源氏射立ラレテ懸リ得ス、平家はニ利ヲ得テ、義貞ノ勢ヲ取籠、餘サ

シトコソ攻タリケレ、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、平家三十萬騎圍義貞、云々、恐非也、天正本

新田義貞退兵ヲ引勝リテ、敵ノ大勢ヲ懸破テハ裏へ通り、取テ返テハ喚テ懸入、電

光ノ激スルカ如ク、蜘蛛手輪違ニ、七八度カ程ソ當リケル、サレトモ大敵シカモ新手

ニテ、先度ノ恥ヲ雪メント、義ヲ專ニシテ戰ヒケル間、義貞遂ニ打負テ、堀金ヲ指テ

引退ク、其勢若干討レテ、痛手ヲ負者數ヲ知ス、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、義貞勢若干討レ、大半落テ六萬騎ニ成ニケル、云々、

元弘三年

其日懸テ追テハシ寄タラハ、義貞爰ニテ討レ給フヘカリシヲ、今ハ敵何程ノ事カ有ヘキ、新田ヲハ、定テ武藏上野ノ者共カ、討テ出サントスラント、大様ニ憑テ時ヲ移ス、是カ平家ノ運命ノ盡ヌル處ノシルシナリ、

三浦大多和屬義貞合戰意見附左近大夫入道慧性敗走事

懸リシ程ニ、義貞モ爲方ナク思ハレケル處ヘ、三浦大多和平六左衛門義勝ハ、大多和金勝院懸リシ程ニ、三浦族、或稱和田、或大多和、或佐原、皆同宗也、大多和家譜云、大多和平六左衛門義行、兼テ本作和田、下做之、按、三浦族、或稱和田、或大多和、或佐原、皆同宗也、大多和家譜云、大多和平六左衛門義勝、未知孰是、三郎左衛門尉季信子也、鎌倉之役、屬新田義貞、立戰功、云々、家譜又有義行姪彦六左衛門義勝、未詳、今出川家、北條家、西ヨリ義貞ニ志有シカハ、相模國ノ勢、松田、河村、土肥、土屋、本間、澁谷ヲ今出川家、北條家、西源院、南都本、戴大胡、山上、江、具足シテ、以上其勢六千餘騎、十五日晩景ニ、晩景、西源院本作早朝、非也、說見上義貞ノ陣ヘ馳參ル、義貞大ニ悦急キ對面有テ禮ヲ厚シ、席ヲ近附テ、合戰ノ意見ヲソ問レケル、平六左衛門畏テ申ケルハ、今天下ニツニ分レテ、互ノ安否ヲ、合戰ノ勝負ニ懸タル事ニテ候ヘハ、其雌雄十度モ二十度モ、ナトカ無テハ候ヘキ、但始終ノ落居ハ、天命ノ歸スル處ニテ候ヘハ、遂ニ太平ヲ致サレン事、何ノ疑カ候ヘキ、御勢ニ義勝カ勢ヲ合テ戰ハンニ、十萬餘騎、是モ猶敵ノ勢ニ及ハス候トイヘトモ、天正本云、サノミ大勢ハ惡敷候ト申、云々、今度ノ合戰ニ、一勝負セテハ候ヘキト申ケルハ、義貞モイサトヨ、當手ノ疲レタル兵ヲ以テ、大敵ノ勇誇タルニ懸ラン事ハ如何ト宣ヒケルヲ、義勝重テ申ケルハ、今

三浦義勝
義貞ニ來
授ス

義勝意見
ヲ述ブ

勝ツテ驕
ル者必ズ
敗ル

十六日早
朝義勝北
條軍ヲ急
襲ス

日ノ軍ニハ、治定勝ヘキ謂レ候、其故ハ、昔秦ト楚ヲ國ヲ争ヒケル時、楚ノ將軍武信君、纔ニ八萬餘騎ノ勢ヲ以テ、秦ノ將軍李由カ八十萬騎ノ勢ニ打勝、首ヲ斬コト四十餘萬ナリ、是ヨリ武信君、心驕リ軍懈リテ、秦ノ兵ヲ恐ル、ニタラスト思ヘリ、楚ノ副將軍ニ、宋義ト云ケル兵、是ヲ見テ、戰ニ勝テ將驕リ卒惰ル時ハ、必破ルト云ヘリ、武信君今如此、亡ヒスシテ何ヲカ待ント申ケルカ、果シテ後ノ軍ニ、武信君、秦左將軍章邯カタメニ擊レテ、忽一戰ニ亡ニケリ、義勝昨日潛ニ人ヲ遣シテ、敵ノ陣ヲ見スルニ、其將驕レル事、武信君ニ異ナラス、是即宋義カ言シ所ニ違ハス、所詮明日ノ御合戰ニハ、義勝新手ニテ候ヘハ、一方ノ前ヲ承テ、敵ヲ一當當テ見候ハント申ケレハ、義貞誠ニ心ニ服シ、宜シキニ從ヒ、即今度ノ軍ノ成敗ヲハ、三浦平六左衛門ニソ許サレケル、明レハ五月十六日ノ寅刻ニ、三浦四萬餘騎カ眞前ニ進テ、四萬、今出川家、北條家、西源院、南都本作十萬、爲得、上云、義貞、義勝、兩勢合十萬、分陪河原ヘ押寄ル、敵ノ陣近ク成マテ、態旗ノ手ヲモ下サス、関ノ聲ヲモ揚サリケリ、是ハ敵ヲ出拔テ、手攻ノ勝負ヲ決セン爲ナリ、案ノコトク敵ハ前日數箇度ノ戰ニ、人馬皆疲レタリ、其上今敵寄ヘシトモ思懸サリケレハ、馬ニ鞍ヲモ置ス、物具ヲモ取調ヘス、或ハ遊君ニ枕ヲ雙テ、帶紐ヲ解テ臥タル者モアリ、或ハ酒宴ニ酔ヲ催サレテ、前後ヲ知ラス、寢タル者モアリ、只一業所感ノ者

トモカ自滅ヲ招クニ異ナラス、爰ニ寄手相近ツクヲ見テ、河原面ニ陣ヲ取タル者
 只今西ヨリ旗ヲ卷テ、西、本文作レ、今、依、異本、改レ之、大勢ノ閑ニ馬ヲ打テ來ルハ、若敵ニテヤ有ラ
 ン、御用心候ヘト告タリケレハ、大將ヲ始テ、サル事アリ、三浦大多和カ、相模國勢ヲ
 催シテ御方ヘ馳參スルト聞ヘシカハ、一定參タリト覺ルソ、懸ル目出度事コソナ
 ケレトテ、驚者一人モナシ、只兎ニモ角ニモ運命ノ盡ヌル程コソ淺マシケレ、サル
 程ニ義貞、三浦カ先懸ニ追スカウテ、十萬餘騎ヲ三手ニ分テ、三方ヨリ推寄テ、同ク
 時ヲ作リケル、懸性閑ノ聲ニ驚テ、馬ヨ物具ヨト、周章騒處ヘ、義貞、義助兵、毛利家、北條
源院、南都本、及神明鏡云、
義貞大手ヨリ懸入云々、縦横無盡ニ懸立ル、三浦平六是ニカヲ得テ、江戶、豊島、葛西、河越
源院、南都本、及神明鏡云、
義貞大手ヨリ懸入云々、諸異本無、七手字、而天正本作、二手、毛利家、
院本載、鎌倉、坂東ノ八平氏、武藏ノ七黨ヲ七手ニナシ、北條家、金勝院、西源院、南都本、及神明鏡云、
綱手ヨリ、蜘蛛手輪違十文字ニ、アマサシトソ攻タリケル、四郎左近大夫入道、大勢ナリ
 トイヘトモ、三浦カ一時ノ謀ニ破ラレテ、落行勢ハ散々ニ鎌倉ヲ差テ引退、討ル、
 者ハ數ヲシラス、大將左近大夫入道モ、關戸邊ニテ、既ニ討レヌヘク見ヘケルヲ、横
 溝八郎、金勝院本作、横
溝八郎行宣、踏留テ近ツク敵二十三騎、金勝院本作、三騎、西
源院本作、三十二人、時ノ間ニ射落シ、主從
 三騎討死ス、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、矢種
盡ヌレハ、打物ニ成テ、主從三騎討死ス、云々、安保入道道堪、今出川家、毛利家、北條家、西
源院、南都本、入道上有三左衛
門字、金勝院本作、左近大夫入
道道忽、西源院本、堪作、源、父子三人、相從フ兵百餘人、同枕ニ討死ス、金勝院、西源院本、不
レ載、從兵百餘人戰死、其

外譜代奉公ノ郎從、一言芳恩ノ軍勢トモ、三百餘人引返シ、討死シケル間ニ、大將四
 郎左近大夫入道ハ、其身ニ恙ナクシテソ、山内マテ引レケル、長崎二郎高重、久米河
 ノ合戦ニ、組テ討タリシ敵ノ首二ツ、斬テ落シタリシ敵ノ首十三、中間下部ニ取持
 セテ、鎧ニ立處ノ箭ヲモイマタ拔ス、創ノ口ヨリ流ル、血ニ、白絲ノ鎧、忽ニ緋威ニ
 染成シテ、靜々ト鎌倉殿ノ御屋形ヘ參リ、中門ニ畏リタリケレハ、西源院本云、鎌倉殿ノ
御前ニ參ケレハ、云々、
 祖父ノ入道ヨニモ嬉シクニ打見テ出迎、自ラ創ヲ吮血ヲ含テ、涙ヲ流シテ申ケル
 ハ、古キ諺ニ見子不如父トイヘトモ、我先ニ汝ヲ以テ、上ノ御用ニ立カタキ者ナリ
 ト思ヒテ、常ニ不孝ヲ加ヘシ事、大ナル誤ナリ、汝今萬死ヲ出テ一生ニ遇、堅ヲ摧キ
 ケル舉動、陳平張良カ難シトスル處ヲ究メ得タリ、相構テ今ヨリ後モ、我一大事ト
 合戦シテ、父祖ノ名ヲモ顯ハシ、守殿ノ御恩ヲモ報シ申候ヘト、日來ノ庭訓ヲ翻シ
 テ、只今ノ武勇ヲ感シケレハ、高重頭ヲ地ニ搶テ、兩眼ニ涙ヲソ浮ヘケル、懸ル處ニ
 六波羅沒落シテ、近江ノ番馬ニテ、悉自害ノヨシ告來ケレハ、只今大敵ト戦中ニ、此
 事ヲ聞テ、大火ヲ打滅テ、アキレ果タル事限ナシ、其所從眷屬トモ是ヲ聞テ、泣歎キ
 憂悲ムコト、喩ヲトルニ物ナシ、如何ニ猛ク勇メル人々モ、足手モナユル心地シテ
 東西ヲモ更ニ辨ヘス、然トイヘトモ、此大敵ヲ退ケテコソ、京都ヘモ討手ヲ上サン
 元弘三年

スレトテ、先鎌倉ノ軍評定ヲソセラレケル、此事敵ニ知セシトセシカトモ、隠アルヘキ事ナラネハ、聽テ聞ヘテ、哀潤色ヤト、悦ヒ勇マヌ者ハナシ、

〔神明鏡〕

〔小笠原系圖〕（續群從本） 貞宗（前略）元弘之戰、義貞舉旗之時、依勅定貞宗引卒信飛勢爲一方大將、於武州入間河鎌倉等度々顯武功、

〔小笠原系圖〕（宗長） （八日條ノ高氏書狀ニテ想察セラル） 宗長鎌倉攻撃ニ從軍セルコト、六月

朝敵追討之事、蒙勅命之間參候、早相催一族合力候者本意候、恐々、

五月十六日

（高力）
尊氏判

小笠原信濃入道殿

〔相州文書〕

（圖覺寺）

山内瓜谷郷屋地事、去年八月之比進避狀候畢、彼時狀依所勞用他筆候之間、勞減氣之後、以自筆可書改之、由雖相存候、自然弛過候畢、與依此騷動罷出候之間、重以自筆所奉避渡之也、物念之間不及委細所存之趣、載先日狀候畢、任彼狀可有御管領候、仍避狀如件、

正慶二年五月十六日

沙彌道貞（花押）

〔宮下過去帳〕

（上野新田） （十六日） 元弘三年五月分倍宿ニ而討死、田部井太郎三郎泰寛

（郡武藏島日）

小笠原貞宗
ニ加ハル

尊氏、小笠原宗長
ヲ催促ス

此ノ戰ニ
出陣スル
故ニ自筆
ヲ避渡狀
ノ書ク

沙彌道貞

田部井泰寛

五月十八日 是ヨリ先、金澤貞將、千葉、小山等ノ官軍ト武藏鶴見ニ戰ヒテ敗退ス。十七日、義貞、三軍ヲ部署シ、右翼軍ヲ極樂寺坂ニ、左翼軍ヲ巨福呂坂ニ、中央軍ヲ化粧坂ニ向ハシム。是日朝、村岡、片瀬、葛原方面ヨリ攻防戰、始マル。幕府軍ノ將、赤橋守時、洲崎ニ於テ戰死ス。新田軍、稻村崎ヲ突破シ、一旦、稻瀬川迄進入ス。然ルニ其ノ將大館宗氏戰死シ、官軍、靈山ニ退ク。是日、結城宗廣、新田軍ニ加ハル。

〔梅松論〕

（前文十五）

かゝりしほどに、三の道へ討手をぞ遣されける、下の道の

大將は武藏守貞將むかふ處に、下總國より千葉介貞胤、義貞に同心の義有て責上る間、武藏の鶴見の邊にをいて相戦けるが、是も打負て引退く、武藏路は相模守守時、すさき千代塚において合戦を致しけるか、是もうち負て一足も退す自害す、南條左衛門尉并安久井入道一所にて命を落す、

陸奥守貞通は中の道の大将として葛原において相戦、是も寄手の軍侶手しげく戦ける程に、本間山城左衛門以下數輩打死しける程に、又打負て引退し間、五月十八日の未刻ばかりに、義貞の勢は稻村崎を経て前濱の在家を焼拂ふ煙みえければ、鎌倉中のさはぎ手足を置所なく、あはてふためきける有様たとへていはんか

元弘三年

二七九

金澤貞將
鶴見ヨリ
敗退ス

赤橋守時
戰死ス

北條貞通
敗退ス

五月十八日
新田軍
稻村崎
ニ進出ス

新田大館
幸氏
紀五左衛門尉

十八日天
野經顯片
瀨原二馳
參澤川崎
稻瀨川合戰
五月廿一
日葛西谷
合戰
新田矢島
次郎

大館氏明
ノ殿判

新田義貞公篇

二八二

幸氏子孫二郎為大將軍致軍忠之間、注進分明也、就中自六月一日至于今、二階堂御所山上陳屋勤仕不退轉之條、紀五左衛門尉狀明白也、將又今年武建元三月錄倉(以下缺)

〔由良文書〕(十一日條)〔塙文書〕(十五日條)

〔天野文書〕(備後福山天野景三氏藏)

天野周防七郎左衛門尉經顯申、子息三郎經政關東合戰事、

右去元弘五月十八日、經顯經政最前馳參于片瀨原、則奉屬于此御手、懸破稻村崎之

陣、迄于稻瀨川并前濱鳥居脇、(致脱力)合戰忠之處、若黨犬居左衛門五郎茂宗、小河彦七安重

中間孫五郎藤次男等令討死訖、自同五月廿一日、迄于廿二日之葛西谷之合戰、致軍

忠訖、此等之次第御見知之上、同時合戰之間、新田矢島次郎上野國住人山上七郎五郎見知之間、就捧請文御注進之上者、為後證欲申賜御證判矣、仍言上如件、

元弘三年十二月 日

(大館氏明ナルベシ)一見了(花押)(31)

〔註〕大日本史料稿本ニハ右花押ヲ新田政經カト云ヘリ。然レドモ、前掲本日

條ノ石川文書花押ト類似シ、又、忽那文書延元三年十一月十九日附ノ左京權

太夫、久米田寺文書延元三年四月十一日附ノ源朝臣ノ花押ト同ジキ事ヨリ

スレバ、恐ラク大館氏明ナルベシ。(藤田精一氏著)
(新田氏研究參照)

〔相州文書〕(圖覺寺享) △六・五三二六

正續院領相模國山内庄秋庭郷内信濃村事、(中略)

一聖福寺奸訴之起者、新田殿前代合戰之最初、聖福寺(江カ)被取陣事、其時今度合戰得

理者所領一所可寄附之由、構被披露、錄倉入之後、以信濃村寺家所望之間、依被契

約令申行給旨之間、自將軍被成御施行畢、就給旨御牒被成御施行條、其時之例儀

也、何以彼御施行可號安堵之御施行乎、結句今者止聖福寺領之號、替面稱如意寺

僧正坊相傳之地、以彼御施行、猶號信の村安堵之條、殊奸謀之至也、(以下略)

〔參考太平記〕(卷第十) 義貞攻入錄倉合戰事

サル程ニ義貞數箇度ノ戰ニ打勝給ヒストキコヘシカハ、東八箇國ノ武士トモ、隨

ヒ附コト雲霞ノ如シ、關戸ニ一日逗留有テ、(一日、金勝院本)軍勢ノ著到ヲ附ラレケル

ニ、六十萬七千餘騎トソ註サル、(今田川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、及神明鏡作二十八萬餘騎)此ニテ此勢ヲ三手ニ

分テ、各二人ノ大將ヲ差副、三軍ノ帥ヲ司トラシム、其一方ニハ、大館次郎宗氏ヲ左

將軍トシテ、江田三郎行義ヲ右將軍トス、其勢總テ十萬餘騎、極樂寺ノ切通ヘソ向

ハレケル、一方ニハ、堀口三郎貞滿ヲ上將軍トシ、(三郎、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作美濃守、按、貞滿後爲美濃守)大島

元弘三年

二八三

義貞關戸
ニ逗留ス

義貞聖福
寺ニ陣ヲ
取ル

恩賞給旨
ニヨツテ
尊氏施行
ス

三軍ヲ部
署ス

極樂寺坂
ニ大館宗
氏、江田
行義

巨福呂坂
二堀口貞
滿大島
某假
假粧坂ニ
義貞義助

北條泰家

金澤貞將
退キ歸ル
十八日攻
防戦開始

新田義貞公篇

讚岐守守之ヲ裨將軍トシテ、守之、金勝院本作義貞、按系圖、義貞子義、其勢都合十萬餘騎西源、
院本作、巨福呂坂へ指向ラル、其一方ニハ新田義貞義助諸將ノ命ヲ司テ、堀口、山名
七萬一、
岩松、大井田、桃井、里見、鳥山、今田川家本作鳥田、非也、西源院本堀口、鳥山、額田、一井、羽川以下ノ一族達ヲ、前後
左右ニ圍セテ、其勢五十萬七千餘騎、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南假粧坂ヨリソ寄ラレ
ケル、鎌倉中ノ人々ハ、昨日一昨日マテモ、分陪關戸ニ合戦有テ、御方打負ヌト聞ヘ
ケレトモ、猶物ノ數トモ思ハス、敵ノ分際サコソ有メト侮リテ、強ニ周章タル氣色
モ無リケルニ、大手ノ大將ニテ向ハレタル、四郎左近大夫入道僅ニ討成サレテ、昨
日ノ晩景ニ、按、十六日也、神明鏡作、十七日、非也、山内へ引返サレヌ、搦手ノ大將ニテ、下河邊へ向ハレタ
リシ金澤武藏守貞將ハ、小山判官千葉介ニ打負テ、下道ヨリ鎌倉へ引返シ給ヒケ
レハ、思ヒノ外ナル珍事カナト、人皆周章シケル處ニ、結句五月十八日卯刻ニ、村岡
藤澤、片瀬、腰越、十間坂、五十餘箇所ニ火ヲ懸テ、三方ヨリ寄懸タリシカハ、武士東西
ニ馳達、貴賤山野ニ逃迷フ、是ソ此霓裳一曲ノ聲ノ中ニ、漁陽ノ鼙鼓地ヲ動シテ來
リ、烽火萬里ノ詐ノ後ニ、戒翟ノ旌旗天ヲ翳テ到ケン、周幽王ノ滅亡セシ有様、唐玄
宗ノ傾廢セシ體タラクモ、角コソハ有ツラント、思ヒ知ル、計ニテ、涙モ更ニ止ラ
ス、淺マシカリシ事トモナリ、サル程ニ義貞ノ兵、三方ヨリ寄ルト聞ヘケレハ、鎌倉

金澤某假
粧坂ヲ防
大佛貞直
極樂寺坂
赤橋守時
洲崎ヲ防

ニモ、相模左馬助高成、城式部大輔景氏、丹波左近大夫將監時守ヲ大將トシテ、三手
ニ分テソ防ケル、自相模左馬助高成至此、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本不出、疑本文衍文耶、其
一方ニハ、金澤越後左近大夫將監ヲ、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作、越後守有時、恐非也、
監者、未詳其名、差副テ、安房、上總、下野ノ、今出川家、北條家、南都本、載、下總上野、勢三萬餘騎ニテ、假粧坂ヲ固メタリ、
一方ニハ、大佛陸奥守貞直ヲ大將トシテ、甲斐、信濃、伊豆、駿河ノ勢ヲ相從ヘテ五萬
餘騎、極樂寺ノ切通ヲ固メタリ、一方ニハ、赤橋前相模守盛時ヲ大將トシテ、盛時北條
守、武藏、相模、出羽、奥州ノ勢六萬餘騎ニテ、六萬、天正本、洲崎ノ敵ニ向ラル、洲崎、今出川家、
作、巨福呂坂、下、此外末々ノ平氏八十餘人、國々ノ兵十萬餘騎ヲハ、弱カラシ方ヘ向ヘシ
トテ、鎌倉中ニ殘サレタリ、サル程ニ同日巳刻ヨリ合戦始リテ、終日終夜攻戰フ、寄
手ハ大勢ニテ、新手ヲ入替入替攻入ケレハ、鎌倉方ニハ、防場切所ナリケレハ、打出
打出相支テ戰ケル、サレハ三方ニ作ル關ノ聲、兩陣ニ叫フ箭叫ハ、天ヲ響カシ地ヲ
動カス、魚鱗ニ懸リ鶴翼ニ開テ、前後ニ當リ左右ヲ支、義ヲ重シ命ヲ輕シテ、安否ヲ
一時ニ定メ、剛臆ヲ累代ニ殘スヘキ合戦オレハ、子討ルレトモ助ケス、親ハ乗越テ
前ナル敵ニ懸リ、主射落サルレトモ引起サス、郎等ハ其馬ニ乗テ懸出、或ハ引組テ
勝負ヲスルモアリ、或ハ打違テ共ニ死スルモアリケリ、其猛卒ノ機ヲ見ルニ、萬人
元弘三年